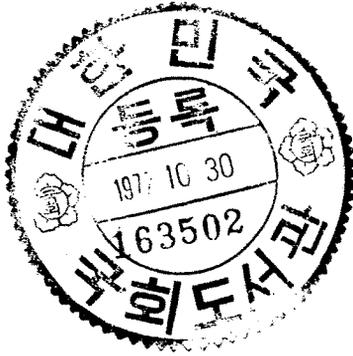


覽便勢現鮮朝

版年一十和昭



本書は朝鮮の現勢を紹介する爲最近の統計數字を以て簡明に表示し、併せて内地及外地と比較對照したものである。

昭和十一年七月

# 朝鮮現勢便覽 (昭和十一年版)

## 目次

一	土地	一
二	氣象	五
三	人口	一〇
四	行政	一八
五	司法	二六
六	警備	三九
七	財政	四五
八	專賣	五三
九	農業	六二
目次		

目次

一〇 林業	八〇
一一 鑛業	九〇
一二 工業	九九
一三 水產	一〇六
一四 商業	一一八
一五 貿易	一二七
一六 金融	一三四
一七 物價及勞銀	一四七
一八 教育	一五五
一九 宗教	一六三
二〇 衛生	一六九
二一 交通	一七六
二二 遞信	一九二
二三 社會事業	二〇六

# 朝鮮現勢便覽

昭和十一年版

## 一 土 地

地勢 朝鮮は亞細亞の東南に斗出せる一大半島にして、地勢南北に長く東西に短く、東經百二十四度十一分より百三十度五十六分・北緯三十三度六分より四十三度の間に位し、面積二十二萬七百六十九方浬(帝國總面積の三割三分)東は日本海、西は黃海に臨み南は朝鮮海峽を隔て、九州及中國と對し、北は鴨綠江及豆滿江を以て滿洲國及露領沿海州と境して居る。東部海岸には元山城津・清津・羅津・雄基等の諸港あり、南部及西部海岸は岬灣の出入、島嶼の散在比較的多く釜山・麗水・木浦・群山・仁川・龍塘浦・鎮南浦等の良港がある。地勢は長白山脈東北より西南に連つて北方の國境を擁し、其の一脈南に延び平安南北、咸鏡南北四道の境を劃して江原道に入り東海岸線に沿うて南に走り、半島の脊梁を成して居る。脊梁山脈以東の地は斜面急峻にして大川平野に乏しいが、其の以西は比較的緩斜で處々に平野多く、鴨綠江・大同江・臨津江・漢江・錦江・蟾津江・洛東江等あり、舟楫の便、灌漑の利に富み、地味概ね肥沃で、農業發達し、人口稠

密である。

面積 朝鮮全土の面積は二十二萬七千六百六十九方秆(一萬四千三百三十三方里)で本州の面積から滋賀縣の面積を除いたものに略々等しい。各道中最も面積の廣大なるは咸鏡南道の三萬一千九百七十八方秆(九州より鹿の面積を除いたものに略々等し)で、最も狭小なるは忠清北道の七千四百十八方秆(宮崎縣の面積に略々等し)である。

各道面積 (單位方秆) (昭和九年末)

京畿道	一一、八二四	慶尙北道	一八、九八八	江原道	二六、二六一
忠清北道	七、四二八	慶尙南道	一一、三〇四	咸鏡南道	三二、九七八
忠清南道	八、一〇六	黃海道	一六、七三七	咸鏡北道	二〇、三四八
全羅北道	八、五五三	平安南道	一四、九二五	計	三三〇、七六九
全羅南道	一三、八八七	平安北道	二八、四四四		

面積比較 (單位方秆)

朝鮮	二二〇、七六九	内地	三八二、五四五	臺灣	三五、九七四
樺太	三六、〇九〇	關東州 <small>(滿鐵經營地を含む)</small>	三、七四七	南洋群島	二、二四九

經度及緯度

朝鮮

北緯	東經
極北	極東
咸鏡北道穩城郡柔浦面北端	慶尙北道鬱陵島竹島東端
	極西
	平安北道龍川郡薪島面馬鞍島西端
	極南
	全羅南道濟州島大靜面馬羅島南端

一三〇・五六  
二二四・一一  
一三三・〇六  
四三・〇〇

緯度比較

木浦	釜山	光州	馬山	清州	仁川	京城
三四・四七 <small>度分</small>	三五・〇六	三五・〇九	三五・一一	三六・三八	三七・二八	三七・三四
靜岡	名古屋	岐阜	長崎	福岡		
三四・四三 <small>度分</small>	三五・一〇	三五・二〇	三六・四〇	三七・四七		
全州	大邱	群山	公州	咸興	龍浦	新義州
三五・四九 <small>度分</small>	三五・五二	三五・五九	三六・二七	三九・五五	三九・五六	四〇・〇六
銚子	福井	前橋	秋田			
三五・四四 <small>度分</small>	三六・〇三	三六・二四	三九・四二			

土地

三

元	平	鎮	海	春
		南		
山	壤	浦	州	川
三九・一〇	三九・〇一	三八・四四	三八・〇二	三七・五三
}		石	相	新
	水			

澤	卷	川	湯
三九・〇八	三八・二六	三八・〇二	三七・五五

會	雄	中	清	羅
		江		
寧	基	鎮	津	南
四二・二六	四二・二〇	四二・四七	四二・四七	四二・四三
}				國

館 四二・四七

## 二 氣 象

氣温 年平均氣温は南部海岸地方は攝氏十四度にして北進するに従ひ遞減し、中央部京仁地方は十度内外なるも、國境附近に於ては四度乃至三度となる。東部海岸は西部海岸に比すると氣候温和にして、夏季を除き約二度内外高温なるを常とする。これは西部海岸は冬季北西季節風多きも東部海岸は脊梁山脈の爲風勢微弱、且海水温度が西部海岸に比し高温なるに因る。寒氣は南北に於て大差あるも、暑氣は其差が極めて少い。この季節風の影響を受けて冬季は三寒四温が顯著に現はれる。

風 冬季は大陸方面より來る風が朝鮮附近に於て北西風と爲り、夏季は一般に南偏の季節風と爲り兩季節風の交替期たる春秋の候は風向區々にして一定しない。冬季は空氣一般に乾燥して天氣晴れ、氣壓の傾斜概ね急峻で風力強きも、夏季は濕潤にして曇天雨天の日多く、且氣壓の勾配緩なるを以て風勢が弱い。西部海岸は冬季北西風を受くるを以て風力強きも、東部海岸は脊梁山脈に遮らるゝ爲め風勢弱く、全域を通じて概して風勢は沿岸に於て強く内陸に於て弱い傾向がある。雨 雨の年量は概して少く、内地のそれと較べて約二分の一に當る。全土の大半は八百乃至千耗を示し、南東部海岸は稍々多く、北部竝に北西方に至るに従ひ遞減し、釜山より元山に至る沿岸

は年量千五百耗、中部は約千耗、西部海岸は九百乃至千耗を測るも、北部地方は遙かに減少して七百耗内外となる。咸鏡南北道の高原地方は最も寡雨にして年量五百耗に満たざる處あり、降雨は季節によりて差異甚しく、十月より翌年三月に至る間は乾燥期にして雨量少く、六月より八月に至る間は降雨期に屬する。南部地方に於ては降雨最盛期は七月なるも、東部海岸の北部は八月にして、時に九月に亘る。各地方を通じて降雨期と乾燥期とに截然たる區別あるは、半島氣象上の一特色である。

霜 初霜は北部地方に在りては九月上旬に之を見るも、他は概ね十月下旬より十一月中旬の間にあり、四月中に終るを一般とし、北部地方に在りては五月に入りて終るを常とするが、南部に在りても往々五月中旬晩霜を見ることがある。

霧 朝鮮近海は到る處濃霧を發生し、就中最も多きは多島海附近にして、濃霧日數一年中七十日内外に達し、西部近海、北東部沿岸地方之に亞ぎ、其他は二十日乃至五十日の間にあり、濃霧は沿岸に近づくに従つて減少し、内陸に入りては殆んど皆無となり、冬季に於ては概ね之を見ざるも、初春より漸次發生して晩春から初夏の候に最盛を極め盛暑期に入るに及びて減退する。

雪 降雪期は年々遅速あるも、初雪は北部高原地方に最も早くして十月上、中旬に、他は概ね十一月に、南東海岸地方は最も晩くして十二月下旬に之を見る。終雪は北部國境地方最も晩くして四

月下旬乃至五月上旬、中旬となり、釜山地方最も早くして三月上旬、其他は三月中旬乃至四月中旬の間にある。冬季は一般に雨雪量少なくして積雪一、二尺に及ぶは北東部の山地に限られ、中部以南の平原に於ては五寸を越ゆること稀である。

これを要するに、朝鮮の氣象は大陸の影響を受くること多く、内地に比して寒暑の差異は著しいが、其地勢が南北に長く略々九州の南端より北海道の北端までの間に於て見る寒暑と大差ない爲め動植物の分布も亦内地と朝鮮とは相似た所が多く、従つて内鮮人相互の移住同化と經濟的提携には極めて好都合である。

### 朝鮮氣象表 (昭和九年)

#### 朝鮮

(本表中+印は増、-印は減、△印は零度以下を示す)

測候所	平均氣壓 (mm)		氣温 (攝氏)		濕度 (%)	降水量 (mm)			風速度 (米/秒)		天候日數		
	平均	の差	最高	最低		總量	平年との差	最大日量	平均	最大	晴	快降水	
木浦	763.1	13.8	10.4	15.5	△8.8	73	1,423.9	△56.5	16.6	4.0	3.4	15	15

釜山	七六・〇	一三・〇	(-)〇・六	三二・六△九・九	六四・一	七七・五	(+)三六・四	一六五・七	四・四	二五・六	七五	九七
全州	七三・九	一一・七	(-)〇・五	三五・一△二五・五	七五・一	七三・四	(+)四八・三	一〇七八	一・六	一一・七	五〇	一三〇
京城	七三・八	一〇・二	(-)〇・八	三三・四△二八・七	六四・一	三四・六	(-)一二・六	九七・二	二・九	一四・〇	八三	一五
平壤	七三・〇	八・九	(-)〇・三	三三・三△三〇・七	七四・一	四五・二	(+)五七・四	一三三・一	二・二	一四・九	九二	三〇
天津	七六・六	七・九	〇・〇	二八・〇△二六・一	七三	九四・七	(+)二〇・七	二六・五	二・七	一五・三	九一	一〇八
中江鎮	七六・〇	三・八	(+)〇・二	三三・九△三四・八	七五	八四七・八	(+)五・二	五五・七	一・三	一一・三	六七	一三三

内地

測候所	平均氣壓(秤) 動力及海面の更正を施したるもの	氣	平均の差	最高極	最低極	濕度%	降水量(秤) 平均と最大日量	風速度(秒/米) 平均	最大	天候日數	快晴	降水
札幌	七五・三	七・一	(+)〇・一	二九・五△三〇・五	七二・一	〇〇・七	(-)四〇・九	五七・五	二・九	二・四	三三	一九二
仙臺	七六・〇・八	一〇・四	(-)〇・七	三三・八△九九・九	七二・一	三三・七	(+)二〇三・二	八六・七	一・六	一五・六	三〇	一五〇
東京	七六・〇・八	一三・九	〇・〇	三五・三△三五・六	七二・一	三四六・七	(-)三三七・〇	六七・〇	二・八	三三・三	五七	一三三
新潟	七六・一・三	一三・二	(-)〇・四	三三・三△三六・五	七六・一	九三〇・〇	(+)三三・六	九〇・七	五・二	二七・九	一九	三三九

大	阪	七六・六	一四・八	(一)〇・三	三六・六	△四・八	七三・一	〇六六・八	(一)二八・六	八五・一	二・七	二九・八	五三	一一三
下	關	七三・三	一五・〇	(一)〇・二	三三・四	△二・八	七三・一	二六〇・一	(一)三七・五	一〇七・三	四・八	二五・六	四三	一五八
高	知	七二・八	一五・三	(一)〇・三	三六・〇	△六・〇	七四・二	〇八四・九	(一)六〇・五	一三三・五	一・六	一五・三	五七	一三二
鹿兒島		七三・〇	一六・五	(一)〇・二	三五・五	△四・六	七六・一	七四〇・六	(一)四四・〇	八四・〇	三・一	一七・六	五四	一四五
那	霸	七二・一	二二・六	(一)〇・四	三二・九		八三	八六一	八〇八・四	(一)三二・二	一七四・八	五九	三〇・一	一四

臺 灣

臺	北	七六・七	二二・七	(中)〇・一	三七・二		二・六	八一	四九八・九	(一)六三・七	八	七五・二	三・〇	一八・五	三〇	一八四
臺	南	七五・五	二三・一	〇〇	三五・七		六	八〇	一、六六一・六	(一)六八・二	三	三四七・四	三・一	一四・三	五一	九二

樺 太

大	泊	七五・二	三・九	(中)一・〇	二四・九	△三〇・二	八二	七九・九	(中)四八・三	三	三七・九	四・八	二六・三	三八	一三六
眞	岡	七五・三	四・六	(中)〇・八	二六・〇	△二五・五	七七	七一・〇	(一)三六・二	三	三三・二	四・三	二六・三	二五	一九八

關東州及鐵道附屬地

旅	順	七三・一	一〇・二	〇〇	三三・一	△一五・六	七〇	七二〇・二	(中)二八・三	七	七七・六	三・二	一六・七	一〇三	八八
新	京	七六・八	五・三	(中)〇・七	三三・一	△三九・四	六六	七五二・二	(中)一〇六・八	五	五五・一	二・四	一〇・三	一〇七	一〇一

## 三一人口

人口の増加 李朝時代には朝鮮の人口増加率極めて低く、疫病、饑饉屢々起り、時に人口の減少せる例も尠くなかつたが併合後に於ては衛生施設の改善、生活の向上、治安の維持、文化の普及産業の開發、交通の進歩等の影響を受けて人口の増加著しく、明治四十三年末には總人口一千三百三十一萬三千七十七人であつたものが、昭和九年末には二千百十二萬五千八百二十七人に増加しこの間に於て實に七百八十一萬二千八百十人の膨脹を見、明治四十三年末の人口を一〇〇とする、昭和九年末の人口は一五八・六九となつて居る。昭和九年末朝鮮の人口密度は一方料に付九五・七人で、内地の明治十年頃の人口密度に略々相當し、昭和九年内地の人口密度一七八・四人に比し遙かに低率であるが、最近數年間の人口増加率を以て將來の人口豫測をして見ると、今後四十年乃至五十年にして朝鮮の人口は現在の約二倍となる計算である。既に現在に於ても人口稠密なる南鮮地方に於ては人口の飽和状態に入りて内地及び滿洲方面への移住出稼者が多い。内地人の朝鮮に在住する者昭和九年末に於て僅か五十六萬一千餘人に過ぎないが、朝鮮人の内地に移住出稼せる者は約六十萬人に達し、又滿洲國に在住せる者は百五十萬人乃至二百萬人と稱せられ、最近に於て朝鮮人の滿洲移住は急激に増加して居る。朝鮮總督府に於ては、朝鮮人の滿洲移住に

對して適當なる指導獎勵を加へ、各地に安全農村及び集團部落を設置してその定着保護を計つて居る。

現住戸口 (昭和九年末現在) (内地人中には盛  
設人六人を含む)

世帯數	人		計	男女割合 (女百に付男)	人口密度 (二方軒に付)
	男	女			
内地人	一四二、四二七	二八七、九六四	二七三、四一〇	五六一、三八四	一〇五・三
朝鮮人	三、八五七、一六九	一〇、四二六、〇四〇	一〇、〇九七、七六四	二〇、五三、八〇四	一〇三・一
外國人	一一、〇一〇	四〇、四三五	一〇、二〇四	五〇、六三九	三九六・三
計	四、〇一〇、六〇六	一〇、七四四、四三九	一〇、三八一、三八八	二二、二五、八二七	一〇三・五

人口比較

朝鮮	内地	臺灣	樺太	南洋群島	關東州及 鐵道附屬地
人口總數	三、八九六、六五五	六、三五、二五五	五、三三、七一九	三三、一九四	一、〇三、三六
人口密度	一〇四	一八一	一四五	九	四八
男女割合 (女百に付男)	一〇三・八〇	一〇〇・六三	一〇四・二〇	一三七・八〇	二二六・六
備考	昭和十年國勢調査速報に依る。				一五〇・四三

人口

現住人口職業別比較 (昭和九年末)

	朝鮮	臺灣	樺太	南洋群島	關東州及 鐵道附屬地
總數	二二,三五,八七	四,五九二,五三七	三三,一一〇	九〇,六五一	一,三八,〇一一
農林業	一六,一七五,三七三	一,一九七,〇七三	四八,〇四九	三四,二五二	二四二,七七八
水産業	三〇二,九九九	二八,六四三	一五,五七六	二,三三六	一三,五一六
鑛業	五六九,六六一	一九,七五六	三,九三〇	三八四	二六,三三六
工業		一五三,八〇三	一七,八七四	三,五四二	二九,六〇六
商業		一七八,三四五	三四,四四〇	三,四三四	一四五,元一
交通業	一,五八,六一〇	六三,一四九	六,三〇五	七七二	六八,七九六
公務及自由業	八五七,九七一	七五,九九六	七,〇六六	一,六五三	四六,一六四
家事使用人		九,八七七	二,三三七	四八三	九,九九六
其他有業者	一,三三七,二五	六三,四五四	一〇,八二七	二,七四	三六,一五〇
無職業者及 無申告者	三六四,〇〇八	二,八〇三,四四一	一六,八三四	四一,一三一	七〇八,二八八
備考 臺灣、 關東州及鐵道附屬地は昭和五年十月一日國勢調査に依る。					

人口動態比較 (人口千に付) (昭和九年)

朝鮮	朝鮮			內地	計	出生率	死亡率	結婚率	離婚率
	外國人	朝鮮人	內地人						
南	三・四・五	一・八・一	—	—	—	—	—	—	—
鐵道附屬地	二・四・〇	一・五・一	—	—	—	—	—	—	—
關東州及太	三・六・二	一・六・四	—	—	—	—	—	—	—
樺太	四・四・〇	二・〇・二	—	—	—	—	—	—	—
臺海	二・九・九	一・八・二	—	—	—	—	—	—	—
內地	二・九・八	一・九・三	—	—	—	—	—	—	—
朝鮮外國人	七・九	六・六	—	—	—	—	—	—	—
朝鮮內地人	三・〇・〇	一・九・四	—	—	—	—	—	—	—
計	—	—	—	—	—	—	—	—	—
出生率	二・四・〇	一・五・〇	—	—	—	—	—	—	—
死亡率	—	—	—	—	—	—	—	—	—
結婚率	—	—	—	—	—	—	—	—	—
離婚率	—	—	—	—	—	—	—	—	—

主要都市人口 (昭和九年末)

朝鮮人口

人口

都市名	位置	總人口	內地人	朝鮮人	其他
京城府	京畿道	三九四、五二一	一〇九、六七二	一七九、〇〇三	五、八三六
釜山府	慶尙南道	一六三、八一四	五三、三三八	一一〇、一七五	二〇一
平壤府	平安南道	一五九、〇三二	二〇、五八一	一三六、七二五	一、七三六
大邱府	慶尙北道	一〇七、六五七	二六、六〇二	八〇、五五七	四九八
仁川府	京畿道	七五、五六〇	一一、〇五〇	六二、六〇三	一、九〇七
木浦府	全羅南道	五五、六六七	八、五三四	四六、八九六	二三七
元山府	咸鏡南道	五四、五七四	一〇、一三六	四三、五六〇	八七八
開城府	京畿道	五三、六一四	一、五六六	五一、八七一	一七七
新義州府	平安北道	五一、三三八	八、〇〇七	三七、四九五	五、八三六
鎮南浦府	平安南道	四五、五八二	五、四三三	三九、五三七	六三二
咸興府	咸鏡南道	四四、六二二	八、一七三	三六、〇三六	四〇三
清津府	咸鏡北道	四二、三二二	九、五二〇	三二、九三三	七八八
群山府	全羅北道	三六、九五九	九、四〇八	二七、一四四	四〇七
馬山府	慶尙南道	二八、四三〇	五、二三五	二三、一四一	五三

全州府	全羅北道	三九、八七七	五、八八四	三三、六七二	三二
濟州邑	全羅南道	三五、一五二	六七三	三四、四六一	一八
光州府	全羅南道	三八、〇〇八	七、一〇一	三〇、七四七	一六〇
大田府	忠清南道	三四、五三二	八、五五七	二五、八三三	一五一

内地 (推計)

東京市	東京府	五、六六二、九〇〇	福岡市	福岡縣	二八二、九〇〇
大阪市	大阪府	二、七七二、七〇〇	函館市	北海道	二二三、七〇〇
京都市	京都府	一、〇五二、五〇〇	長崎市	長崎縣	二二七、〇〇〇
名古屋市	愛知縣	一、〇一七、七〇〇	仙臺市	宮城縣	二二六、九〇〇
神戸市	兵庫縣	八五三、八〇〇	八幡市	福岡縣	二〇〇、五〇〇
横濱市	神奈川縣	七〇三、九〇〇	熊本市	熊本縣	一八六、〇〇〇
廣島市	廣島縣	二九五、七〇〇			

臺灣

人口

人口

一六

臺北市	臺南市	基隆市	高雄市	新竹市	總數	內地人	本地人	其他
(臺北州)	(臺南州)	(臺北州)	(高雄州)	(新竹州)	二八三、〇八五	八一、二七七	一八五、五九四	一六、二四
					一〇九、八八七	一五、八一〇	九〇、六二七	三、四五〇
					八四、六五〇	二〇、六五五	五九、八五九	四、一三六
					八一、五八一	一九、五九四	五九、九〇八	二、〇八〇
					五四、一一〇	五、九九三	四七、五五七	五、六〇〇

樺太

豐原町	豐原支廳管内	三四、二七四	三四、一三六	一三六
大泊町	大泊支廳管内	三〇、九一三	三〇、六七七	一三六

關東州

旅大連順	總數	內地人	朝鮮人	滿洲人	外國人
	二四一、八二五	八一、三三〇	一一、九四	一五八、四六八	七三
	一四二、二七九	一三、二五	一六一	一二八、八七三	三〇

金州 二六、〇一五 二、一〇〇 六九 一三、八四五

鐵道附屬地

大石橋 一一、三五七 四、二七八 二六一 六、八一八 |

鞍山 二六、七九四 一〇、三九八 六二八 一五、七五一 一七

奉天 七二、五〇六 五〇、六〇八 一、六〇八 一九、五八〇 七二〇

新京 五八、八七一 三〇、一〇九 二、六九三 一五、六九三 三七七

南洋群島

サイパン島 一九、九九四 一六、四三六 三、三七九 一八九

サイパン支廳管内

## 四行政

統治。明治四十三年八月、日韓併合の條約公布せられ、舊韓國は完全に我國領土の一部となり、韓國の國號を廢して朝鮮と爲し、同年十月一日、朝鮮總督府を設置し朝鮮總督をして天皇に直隸し、命を受けて陸海軍を統率し、朝鮮統治に關する諸般の政務を統轄せしむることとなり、其諮問機關として、朝鮮人中の達識の士を採りて、中樞院を設け、地方にも道に參與官、府郡島に參事(參事は今は之を廢す)を置いて地方官の諮問に應ぜしめたのである。當時の新政の方針は秩序を回復して治安を維持し、庶務を更新して疲弊せる民心を作興し、教育人文の發達を計り、特に産業を開發して頽廢せる邦土を振興するにあつたが、爾來二十五年、各般の施設漸く其緒に就き、文化の進歩、經濟の發達、民度の向上等洵に隔世の感あるは中外の齊しく認むる所である。

最初朝鮮總督は陸海軍大將を以て之に充つる制度であつたが、世運の進展に従つて、大正八年武官總督の制を改め總督の軍隊統率權を廢した。現制に依れば、總督は朝鮮の最高官廳であつて、朝鮮を管轄し諸般の政務を統理し、朝鮮の統治は悉く其責任に於て實施せられる。但し軍事に關しては別で、總督は安寧秩序保持の爲め必要と認むるとき、朝鮮に於ける陸海軍の司令官に兵力

の使用を請求し得るのである。朝鮮統治の方針は一視同仁の大義に遵ひ、大正八年總督府官制改正の際の詔書にも、民衆の愛撫に秋毫の差異を設けぬ旨を宣明あらせられて居る。帝國憲法は併合と同時に當然朝鮮に效力を延長せられ、民衆の生命財産の自由は憲法に依つて保障せられるに至つた。しかしながら、朝鮮と内地とは著しく其事情を異にして居るので、内地に行はるゝ法律を直ちに朝鮮に延長施行することは困難であり、さればと言つて、朝鮮に施行する目的を以て定むる法律を、悉く帝國議會の協賛を受くることも、諸種の關係から適當ならずと認められ、朝鮮に於ては原則として法律を施行せず、帝國憲法上法律を以て施行すべき事項と雖、總督が上奏御裁可を得て公布せる制令を以て定め得べきことに法律を以て規定せられ、現在民法、商法、訴訟法等の私法典を始め、各種の行政法規は多く制令を以て定められ、朝鮮の特殊事情に即した制度が實施せられて居る。又總督は其職權又は特別の委任に依り朝鮮總督府令を發し、之に一年以下の懲役若は禁錮、拘留、二百圓以下の罰金又は科料の罰則を附することを得る。之を要するに、朝鮮は内地に對して特殊の法域を形成して居り、各省大臣の行政權は朝鮮に及ばないのが原則となつて居る。

**官署** 總督の補助機關として、總督府に親任の政務總監を置き、府務を統理し、各部局の事務を監督して居る。總督府には、總督官房及内務局、財務局、殖産局、農林局、法務局、學務局、警

務局を置く。

總督官房 秘書官室、審議室、人事課、外事課、文書課、會計課、臨時國勢調査課

内務局 地方課、土木課

財務局 稅務課、司計課、理財課

殖産局 商工課、鑛山課、水産課、燃料選鑛研究所、商工獎勵館、地質調査所

農林局 農政課、農産課、土地改良課、水利課、林政課、林業課

法務局 法務課、行刑課

學務局 學務課、社會課、編輯課、觀測所

警務局 警務課、保安課、圖書課、衛生課

この外、所屬官署としては、總督に隸し其諮詢に應ずる中樞院、總督の管理に屬し又は總督に直屬する遞信、鐵道、專賣の三局、稅關、稅務官署(稅務監督局、稅務署)、裁判所(高等法院、地方法院、審判部)及檢事局、供託局、監獄、營林署、濟生院、穀物檢査所、種馬牧場、農事試驗場、中央試驗所、獸疫血清製造所、警察官講習所、水産試驗場、林業試驗場、帝國大學、諸學校(京城法學專門學校、京城醫學專門學校、京城高等工業學校、水原高等農林學校、京城高等商業學校、師範學校)、感化院、永興學校、更生園、種羊場、圖書館、林野調査委員會、朝鮮史編修會、經學院、明倫學院、朝鮮神宮、道、府、郡、島等がある。

本府(廳)及所屬官署職員數比較 (昭和九年未現在) (係給國庫支給のもののみを掲ぐ)

	朝鮮	臺灣	樺太	關東州及 鐵道附屬地	南洋群島
總數	八三、三七七	二六、二五八	三、三〇二	一一、三三六	八三七
勅任官	八五	五二	一	二	一
勅任官待遇	三〇	一	一	一	一
奏任官	一、三三七	八三三	一一〇	一八〇	三三
奏任官待遇	九〇	一三	一	八	一
判任官	一一、三三九	五、二八八	一、〇八〇	一、七四〇	三、四四
判任官待遇	一九、六七四	七、四三八	四九五	三、一八四	一
嘱託	七三八	五九一	一〇五	一七〇	二二
雇員	一九、五二五	一一、〇五六	一、五二一	一、七三五	四三九
其他	二八、五六九	九八七	一	四、二八八	一

地方行政 行政上朝鮮全土を京畿道・忠清北道・忠清南道・全羅北道・全羅南道・慶尙北道・慶

尙南道・黃海道・平安南道・平安北道・江原道・咸鏡南道・咸鏡北道の十三道に區劃し、更に之を分ちて十七府、二百十八郡、二島、四十七邑、二千三百二十七面と爲す。之に道知事・府尹・郡守・島司・邑面長を置きて官廳事務の執行者たらしむると共に、公共團體の事務を執らしめ、道には知事官房・内務部・警察部を置き、各部長は道事務官を以て之に充て、産業の特に發達せる京畿道・全羅南道・慶尙北道及慶尙南道の四道には、内務、警察の二部の外に産業部を置き、參與官を以て産業部長たらしめて居る。

公共團體 地方公共團體としては、道・府・邑面・學校費・學校組合あり、法人たる道・府・邑面の區域は行政區劃に同じく、道に議決機關たる道會を置き、府に議決機關たる府會及教育部會を置き、更に之を第一教育部會(内地)、第二教育部會(朝鮮)に分ち、邑には議決機關たる邑會を置き、面には諮問機關たる面協議會を置く。學校費は普通學校其他朝鮮人教育に關する費用を支辨する爲め郡島に設け、學校費に關し諮問機關として學校評議會を置く。學校組合は府以外の内地人の多數居住する所に内地人を以て組織し、學校組合會を設け自治的に小學校を設立維持し、高等女學校、實業學校等を經營して居るものもある。之を要するに朝鮮に於ける地方制度は數次の改正を経て漸次完全なる自治制度に近づきつゝあり、以て民意の暢達が期せられて居る。尙ほ各道の行政區劃は左の如くなつて居る。

各道行政區劃表 (昭和十一年四月一日現在)

道名	所在地廳	行政區劃			
		府	郡	島	邑面
京畿道	京城	三	二〇	一	二三八
忠清北道	清州	一	一〇	一	一〇四
忠清南道	大田	一	一四	一	一七〇
全羅北道	全州	二	一四	一	一七二
全羅南道	光州	二	二二	一	二四八
慶尙北道	大邱	一	二二	一	二五〇
慶尙南道	釜山	二	一九	一	二五〇
黃海道	海州	一	一七	一	二二六
平安南道	平壤	二	一四	一	一四一
平安北道	新義州	一	一九	一	一七四
江原道	春川	一	二二	一	二七二

洞里(町)

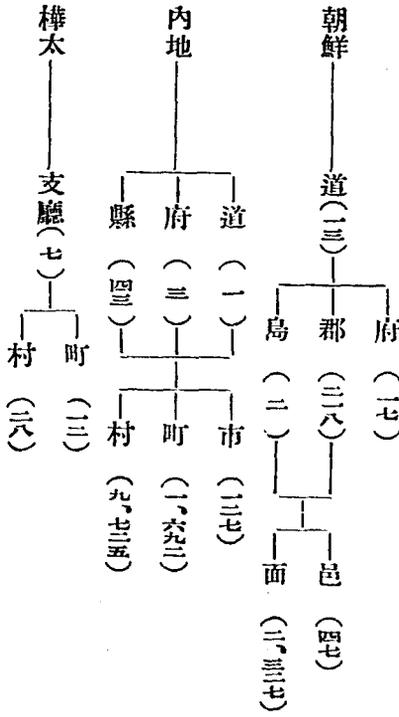
一、九八一

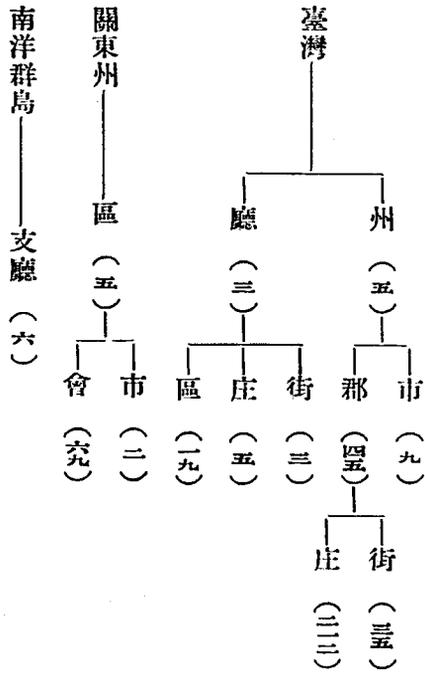
咸鏡南道	咸興	二	一六	一	三	二、九七五
咸鏡北道	羅南	一	一一	一	五	七二〇
合計		一七	二八	二	四七	二、三三七
						二八、三九四

備考 町洞里數は昭和十年三月一日現在

### 行政區劃比較

内地は昭和十年七月一日現在  
 外地は同九年十二月末日現在  
 朝鮮は昭和十一年四月一日現在





備考 括弧内の數字は行政區劃數を示す。

### 五 司 法

裁判所 裁判所は朝鮮總督に直屬し、民事及刑事の裁判及非訟事件に關する事務を掌り、高等法院・覆審法院・地方法院の三階級より成立し、地方法院の事務の一部又は全部を取扱はしむる爲め地方法院支廳 又登記及公證の事務を取扱はしむる爲め地方法院出張所を設置し、且裁判所には檢事局を併置して檢察事務を掌らしめ、内地の三審制と同様である。朝鮮の裁判所は内地のそれと聯絡なく獨立して居るが、これは内地と朝鮮と法域を異にする自然の結果で、これ等の地域間に於ける法律關係の牴觸矛盾は、共通法と稱する法律の規定に依り之を調整して居る。

#### 裁判所の構成

朝鮮	内地	臺灣	樺太	關東州	南洋群島
地方法院	區裁判所	地方法院單獨部	區裁判所	地方法院	地方法院
覆審法院	地方裁判所	地方法院合議部	地方裁判所	地方法院	地方法院
高等法院	控訴院	高等法院覆審部	高等法院覆審部	高等法院	高等法院
	大審院	高等法院上告部	高等法院上告部		

## 司 法 職 員

總數 判事 檢事 試 司法官書記 通譯 書記 通譯 生 見 習 官 囑託 雇員 傭人 辯護士

明治四	内地人	七〇	一八三	五	—	四	四	二〇八	四	—	—	—	六	一四三	三〇
三年末	朝鮮人	三六	七一	六	—	—	—	七	九	—	—	—	—	—	—
昭和	内地人	一、三三二	一五三	七九	二〇	四	四	四九	三	—	—	—	—	—	—
九年末	朝鮮人	一、三三三	四二	七	五	—	—	三七	—	—	—	—	—	—	—

備考 司法職員總數には辯護士を含まず。

監獄 司法制度の改善と共に監獄の設備も漸次整頓し、行刑事務一段と進歩し、受刑者の職業訓練と改過遷善の實を擧げつゝある。現在刑務所は京城・西大門・公州・大田・咸興・清津・平壤新義州・海州・大邱・釜山・光州・木浦・全州・開城・金泉の十六の本所と、春川・清州・元山鎮南浦・金山浦・瑞興・安東・馬山・晋州及群山の十支所あり、その内の開城は十八歳未満、金泉は十八歳以上二十三歳未満の受刑者を收容し、特に體育智育に重きを置き青少年に對する行刑を目的とする特設少年刑務所である。

民事事件比較 (昭和九年)

督 和 民 事 抗 告 解 促	民事訴訟事件			民事争訟調停事件		朝鮮	内地 <small>(樺太を含む)</small>	臺灣	關東州及 鐵道附屬地	南洋群島
	第三審	第二審	第一審	終局	新受					
10,184	641	694	2,581	43,833	656	10,933	30,195	22,351	1,094	56
338	338	338	2,475	43,581	653	10,927	30,747	61	337	135
130	130	130	1,751	43,833	656	10,933	5,477	74	13	1
641	641	641	1,853	209,951	1	9,659	3,474	338	23	1
694	694	694	1,707	209,951	1	9,659	3,330	338	37	1
2,581	2,581	2,581	1,880	117,994	1	10,927	3,474	338	234	2
43,833	43,833	43,833	2,123	117,994	1	9,659	3,474	338	183	2
43,581	43,581	43,581	2,233	117,994	1	10,927	3,474	338	100	135
43,833	43,833	43,833	1,880	96,590	1	9,659	3,474	338	968	133
653	653	653	1,707	209,951	1	10,927	3,474	61	8	2
656	656	656	1,853	209,951	1	10,933	5,477	74	8	2

終局事件

假差押假處分	一五、一八七	五八、六〇八	二、三六八	四一七	七
強制執行	一三、四一八	二六、三六八	一、二九八	一五一	一
不動產競賣	六、六六四	五五、二〇〇	一、九一九	一九九	一
破產	三三	三、四七九	六八	七	一
禁治產準禁治產及失踪宣告	六三	七八	六三	二	一
小作調停	一、六一八	四、八四三	一	一	一
非訟事件	七五、〇三三	六六、六一九	一、三二六	四六五(除登記)	一
民事共助	一、七五六	一、三三七	二九六	一三〇	八一
執達吏	二七三、五二九	一	八〇〇六二	一	二、三八九
事務取扱	六一、八五四	一	二〇、一七二	一	二二
公證	三、八〇四	一	六、〇六五	一	一七九
確定日附	一	一	一	一	一
公示催告	一	一	一	一	一
其他事件	一	一	一	一、八八四	一

登記事件比較 (昭和九年)

司 法

	總 數		地 物		建 物		船 隻	
	件數	個數	件數	個數	件數	個數	件數	個數
朝鮮	一、七六七、〇八六	五、五八三、五四四	一、六七二、七七三	五、三八九、九三〇	八二、七五六	一九三、一三三	四四〇	四九一
内地(樺太を含む)	六、〇〇六、一三六	二二、五三八、〇三六	五、二一八、〇四〇	二〇、二八、九六〇	五八五、一五六	一、三二一、〇〇八	六、七八七	八、〇六八
臺灣	四、〇七六	九六五、六二六	—	九二九、〇二六	—	三六、一九四	三二八	四〇六
關東州及鐵道附屬地	一三、四六一	—	一八、六二〇	—	三、六二二	—	二三八	—
南洋群島	二三四	—	—	—	九九	—	—	—
營利を目的とせざる法人	二、五四八	四、三三三	—	—	—	—	—	—
商社會社件數	七、八三六	八九、八〇〇	—	—	—	—	—	—
其他の件數	七三三	九八、一四五	—	—	—	—	—	—
備考	營利を目的とせざる法人中には、	産業・漁業・金融・輸出・工業・商業・森林組合並	其聯合會等を含む。					

刑事事件比較 (昭和九年)

刑事事件	檢察搜查事件		豫審事件		關東州及鐵道附屬地	南洋群島
	第一審	第二審	第三審	第四審		
	新受	終局	新受	終局		
朝鮮	一三、四七四	一一三、五二六	一、六五五	一、六四三		
內地 <small>(樺太を 含む)</small>	五四五、八一五	五四六、五七二	六、一七八	六、三八一		
臺灣	二六、一五二	二六、一五〇	二八六	二七二		
關東州及鐵道附屬地	二、五四九	二、二六八	一、五七一	一、一〇		
南洋群島	五七一	五三四	三四八	八		
	終局	新受	終局	新受		
朝鮮	一、九三二	一、七九六	四七、六六五	四七、八三六		
內地 <small>(樺太を 含む)</small>	一、七九六	一、七九六	一一三、八三三	一一三、三九七		
臺灣	四四	四四	六、八九四	六、九三七		
關東州及鐵道附屬地	四八	三八	一、五七一	一、五六一		
南洋群島	一	一	三五二	三四八		

民事新受件數表

司法

第一審	明治四十三年	昭和九年	明治四十三年	昭和九年
第二審	二四、三六三	四三、八二	強制執行	三七四
第三審	一、五〇五	二、四六一	不動產競賣	一四九
抗告	二〇六	六九四	破產	二
再審	二二	二二八	禁治產準禁治產	一
和解	一〇六五	二六	小作調停	一七〇七
督促	一、六六五	三三九	非訟事件	三〇三
假差押假處分	二、六五五	一〇二、八三四	共助	五二六
		一五、一八七	民事爭訟調停	一
				六五六

第一審民事訴訟新受件數種類別表

人	明治四十四年	昭和九年	明治四十四年	昭和九年
土地	一九〇	一、三九八	借地借家	一、〇三三
建物	四、四三〇	八七六七	小作關係	一
	五二六	一、一五〇	船舶	一八
				二一〇

證物	米	金	錢	穀	品	券	墳墓	其他	計
			一〇、〇五〇	一、五九七	四六五	二六三	八八四	一一二〇	三、七三七
			二四、九一四	一、三五六	六七一	二七一	二九、六三三	四三、八三三	—

第一審刑事事件罪名別件數 (昭和九年)

總計	刑法犯	放火	失火	通貨偽造	文書偽造	受理		裁決				其他	未濟		
						前年	本年	總數	刑の言渡	無罪	刑の免除			公訴棄却	略式命令
四、三三三	一四、七三〇	一八〇	五五四	四三	三六一	七七	四七、六五五	四七、八六六	一〇、九六七	一〇三	一〇	四	五、四三三	三三	五五
五四	三、八六六	三	一	三	三三	五四	三、八六六	三、八六六	九、六六七	六	五	三	三、九四三	三三	四七
一、〇七〇	一六〇	一	一	一	一	一	一、〇七〇	一、〇七〇	一、〇七〇	一	一	一	一、〇七〇	一	一
三三	一、〇七〇	一	一	一	一	一	三三	三三	三三	一	一	一	三三	一	一
三三	三三	三三	三三	三三	三三	三三	三三	三三	三三	三三	三三	三三	三三	三三	三三
三三	三三	三三	三三	三三	三三	三三	三三	三三	三三	三三	三三	三三	三三	三三	三三
三三	三三	三三	三三	三三	三三	三三	三三	三三	三三	三三	三三	三三	三三	三三	三三

有價證券偽造	一六	一	一七	一八	一八	一	一	一	一
印章偽造	八	一	八	七	七	一	一	一	一
猥褻姦淫	八〇	九	七	七	七	一	一	一	一
姦通	六	二	六	六	五	一	一	一	一
賭博及富籤	四七	五	四七	四〇	一七	一	一	一	一
禮拜所及墳墓に關す	四	一	四	四	五	一	一	一	一
殺人	六九	一	三	三	五	一	一	一	一
窃盜	五、四三	一	五、三九	五、三二	五、三〇	一	一	一	一
強盜(強盜傷人)	五、三三	一	五、三九	五、三二	五、三〇	一	一	一	一
強盜(強盜殺人)	五、三三	一	三	三	三	一	一	一	一
強盜(強盜致死)	五、三三	一	三	三	三	一	一	一	一
詐欺	一、六〇	四	一、六六	一、〇二	一、〇七	一	一	一	一
恐喝	六	七	七	六	六	一	一	一	一
横領	一〇一	七	五	五	五	一	一	一	一
其他	四、七〇	一	四、五三	四、六〇	一、四九	一	一	一	一
特別法犯	四、〇三	一	三、八九	三、六六	一、三九	一	一	一	一

朝鮮阿片取締令規	七五	七五	七六	二四三	一	一	一	一	四
モルヒネ・コカイン及 其鹽類取締 に關する件	一七	四	一三三	一四	一〇一	一	一	一	三
警察犯處罰規則	九	一	九	九	六	一	一	三	一
森林令規	四、五六	一三	四、五五	四、五五	九四	七	一	一	三
酒稅令規	一〇、九〇	空	一〇、九五	一〇、九五	四	一	一	六	四
煙草專賣令規	一一、七〇	一〇	一一、六六	一一、七五	一一	一	一	三	一
其他	五、八〇	八	五、七六	五、七六	八六	三	三	四、八〇	四

登記記 (昭和九年) (一)

普通	件數	個數	登録稅	謄本抄本の件數	手数料
不動産 及船舶	一、六五、四〇二	五、一七九、六四〇	八、五五、一〇五	三六、六二	二四、三九
普通	三七、四三	九九、二九八	一	一	一
政府自己の爲 にする登記 其他の登記	一三、一五	三〇、六〇六	一	一	一

司法

營利を目的とせざる法人登記

商社會社登記

商號、未成年者、妻、法定代理人及支配人登記

計

登 記 (一)

登録税を課せざるもの

政府自己の爲にする登記

其の他の登記

計

備考	船		建 物		土 地		普通	政府自己の爲にする登記	其の他の登記	計
	個數	件數	個數	件數	個數	件數				
括弧内の數字は土地建物を合併し一件として登記したるものにして内書なり。										

二、四八	三	六、六一〇	四、六一〇
七、八三六	—	三、〇五五	六、八五〇
七三三	—	三、四六六	四、〇五八
一、七六七、〇八六	五、五八三、五四八、八七五、一〇九	二、九〇〇、四三九	二、九〇〇、四三九

監獄 (昭和十年)

總數	入所	出所	年末現在
受刑者	三五、八〇五	三五、三八	一八、四四〇
刑事被告人	一五、五五三	一四、八二四	一六、四三三
勞役場留置者	一四、二二九	一四、四〇八	一、四八六
携帶兒	五、八七八	五、九六三	五〇五
	一四五	一四三	二六

新受刑者 (昭和十年)

總數	總數	男	女
內地人	一一、七五七	一一、四二三	三四四
朝鮮人	三三六	三三〇	六
外國人	一一、二八七	一〇、九七三	三二四
總數	一五四	一三〇	二四

刑名別

拘禁懲死  
留銅役刑

司  
法

一九四  
一九一  
二三五八  
一四

一七六  
一八三  
二〇三八  
一四

三八

一六八  
三〇  
一

## 六 警 備

國防 陸軍常備隊は、第十九師團司令部が咸鏡北道羅南に、第二十師團司令部が京畿道京城龍山に配置してあり、聯隊は咸興、會寧、平壤、大邱、龍山、羅南に分駐して居り、又飛行第六聯隊が平壤に、陸軍要塞が鎮海灣(釜山を  
含む)及永興灣に設けられてある。これ等の陸軍部隊はすべて朝鮮軍司令官の統率する所であつて、朝鮮軍司令官は兼ねて、朝鮮防衛の任務を有し、陸軍大將又は陸軍中將を以て之に親補せられる。別に朝鮮憲兵隊司令官があつて、憲兵司令官に隸して軍事警察を司る。朝鮮に於ける陸軍諸官衙には朝鮮軍軍法會議、朝鮮陸軍倉庫、朝鮮衛戍刑務所、軍馬補充部雄基支部、陸軍造兵廠平壤兵器製造所、陸軍兵器本廠平壤出張所、陸軍運輸部釜山出張所同上清津出張所等がある。鎮海は日露戰役當時我が艦隊の根據地たりし所であるが、現に海軍要港部が置かれて居る。鎮海要港部司令官は海軍中將又は少將を以て之に補し、天皇に直隸し部下艦船部隊を統率し、又海軍大臣の命を承けて軍政を掌り、作戰計畫に關しては軍司令部總長の指示を受く。海軍燃料廠平壤鑛業部は平壤郊外寺洞に在り、徳山海軍燃料廠の一部にして、吳鎮守府に屬し、石炭及煉炭の生産に關することを掌る。平壤鑛業部の製品は軍用の外、民間にも拂上げて一般の需要を充して居る。

警察 併合後の警察機關は統監府より幾多の變遷を經、警察官、憲兵の統合制の時代もあつたが大正八年以後は現在の警察制度となり、朝鮮總督府に警務局を置き警察及衛生の事務に當り、地方に在りては道に警察部を置き、その下に警察署を置く。

警察署の管轄區域は行政區劃を基礎とし、一府郡に一警察署設置を原則とせるも、地方の事情に依り二警察署以上を配置せるものあり、昭和十年末現在二百三十四府郡島に對し二百五十二の警察署を配置し、警察署管内には派出所、駐在所を設く。派出所は警察署所在地に、駐在所は警察署所在地外に置き、駐在所は一面一駐在所主義に據れるも、地方の事情に依りては一面に二箇所以上を設置せるところあり、現在二千四百二十九邑面に對し二千三百三十六箇所の駐在所及二百七箇所の派出所を設置し、又國境警備其他臨時特に警戒を要する地點百六十七箇所に警察官出張所を設置して居る。

警察官養成機關としては、京城に警察官講習所、各道に巡查教習所ありて、警察官若は警察吏たるべき者に對して學術及實務を教授する。

警察官署 (朝鮮は昭和十年他は昭和九年末現在)

朝鮮 臺灣 樺太

關東州及  
鐵道附屬地

南洋群島

警察署

二五二

一〇

二三

一五

警察官駐在所 二、三三六  
 警察官派出所 二〇七  
 警察官出張所 一六七

二七〇〇

一五三〇

一五四

三八七

二二

警察職員 (朝鮮は昭和十年末他は同九年末)

	朝鮮		臺灣	樺太	關東州及 鐵道附屬地	南洋群島
	内地人	朝鮮人				
警視部	四八	九	五七	二四	三	一四
警部補	三三九	八七	四二六	二四四	一五	四六
巡查	六〇五	一五五	七六〇	二三五	二二	一八
警手其他	一〇、二四四	七、九二六	一八、〇七〇	六、八五五	四九三	二、四七六
犯罪件數及檢舉件數 (昭和九年)	—	—	—	—	—	—
		警手二、八八八			巡捕 九二七	巡警 四九

總數	犯罪件數		檢舉件數		總數	檢舉人員		
	犯罪件數	檢舉件數	内地人	朝鮮人		外國人		
總數	一九五、〇三五	一八六、七五四	二〇、二六三〇	六、四九五	一九五、二五四	九八一		

發備

四一



朝鮮阿片取締令規則	一二四六	一二八七	二二八〇	一〇	二〇五三	一二七
警察犯處罰規則	四、九九二	四、九九二	五、〇八〇	二九五	四、七八四	一
森林令	二二、二五	二二、二六五	一三、九九八	四三	一三、九五四	一
酒稅令規	一一二	一一二	一、六九五	一	一、六九五	一
朝鮮煙草專賣令規	三二、二九四	三二、二九四	六、一六七	八三	九、九四二	一四二
其他	三三、五九四	三三、五六四	三六、九三五	一、五三八	三五、二六七	一三〇

犯罪檢舉件數比較 (昭和八年)

總數	一七六、七九五	二六六、四九七	三〇、一六九	一一、二二三	三四、五六二	一、五七九
刑法犯	一三三、六八四	一五〇、三七八	三〇、一六九	七、一八二	二二、九四九	七六
放火及失火罪	二、四五九	一四、五一	—	一九二	五九	七
通貨文書有價證券印草偽造罪	四、四〇五	二六、七五〇	—	一八五	一〇二	一〇
猥褻姦淫重婚の罪	九一八	五、一三〇	—	三五	二〇	一〇
賭博及富籤に關する罪	三、六八七	三五、九二	—	四二六	三三九	二五
警備					四三	

關東州及鐵道附屬地

南洋

殺人罪及未遂罪	五二	二、六七二	一	二二	五三	※四八
竊盜罪	五、八五四	五四七、二二四	一六一六六	二、二七二	八五五九	四〇八
強盜罪	八三七	二、〇六一	六四	一六	一、二二三	一六
詐欺恐喝罪	二五、四五三	四八〇、二〇六	七、九九二	二、〇八七	一、二〇六	一六
横領罪	二二、二四四	二九七、四二八	五、九四七	一、〇〇四	八三七	五九
其他	三二、三〇六	九一、九五四	一	九五四	五四八	四三
特別法犯	四三、一一一	一一六、七三九	一	三、九四〇	二、六三三	八五三

備考 ※印は傷害罪、同致死罪及暴行罪を含む

## 七 財 政

財政 併合に依り明治四十三年八月、朝鮮總督府特別會計を設置して以來、財政獨立計畫を實行する爲、諸般制度の整理を行ひ、行政費を節約し、諸税の増徴新設を行ひ、大正八年に於ては全く中央政府の補充を仰がざるに至つたが、警察制度の改革、其他諸般行政の刷新に伴ひ再び補充金を要するに至り、其金額には年に依りて大小あるも、昭和十年度には千二百八十二萬五千八百二十二圓の補充を受けて居る。明治四十四年以降、道路修築・海關工事・鐵道建設改良等、朝鮮開發に必要な繼續事業費は、朝鮮の一般歳入を以て支辨する餘裕なかりしを以て、その財源を總て公債又は借入金に依ることとし、事業公債金特別會計法に基き、その限度を六億一千五百八十萬圓とされて居る。租税制度も數次の整理改正に依り體系整ひ直接税は地稅・所得稅・相續稅營業稅・資本利子稅・取引所稅・鑛稅、間接税に酒稅・砂糖消費稅・清涼飲料稅・關稅・噸稅・出港稅・骨牌稅、交通稅は登録稅・取引所稅・印紙稅・朝鮮銀行券發行稅の十八種となり、内地の稅種と比較すると、織物消費稅を缺き、關稅の一種として移入稅を存する點を除いては全く同一である。併合以來、文化、産業等の發達に伴ひ財政の膨脹は著しきものあり、併合當時の明治四十四年度の豫算額四千八百七十四萬一千圓に比すると、昭和十年度の二億九千二十六萬七千四

百十四圓は約六倍に當つて居る。

朝鮮總督府特別會計歲入歲出豫算

年 度	歲 入			歲 出		
	總 數	經 常 部	臨 時 部	總 數	經 常 部	臨 時 部
同 八 年 度	三三,〇三六,九四九 <sup>四</sup>	一八四,四八一,五七六 <sup>四</sup>	四七,五四五,三七一 <sup>四</sup>	三三,〇三六,九四九 <sup>四</sup>	一七〇,〇九七,三九六 <sup>四</sup>	六二,九九六,六五三 <sup>四</sup>
同 九 年 度	二七,二八四,四三二	三三,五六八,三八	五,六六,二三四	二七四,六三四,六四三	一五,三五五,三九	七九,二七九,三三
同 十 年 度	二六,二六七,四四	二四〇,四三三,四三七	四九,八〇三,九八七	二九〇,二六七,四四	二二〇,九九一,〇七〇	七九,二七六,三七四

決算比較 (昭和九年度)

地 域	歲 入			歲 出		
	總 數	經 常 部	臨 時 部	總 數	經 常 部	臨 時 部
朝 鮮	三〇〇,九四三,〇六〇 <sup>四</sup>	二六,五六六,七二四 <sup>四</sup>	六四,四一五,四六六 <sup>四</sup>	二六,五六六,四一三 <sup>四</sup>	一九三,〇三四,五六六 <sup>四</sup>	七六,〇四四,八三六 <sup>四</sup>
內 地	二,四四六,六一,六〇五	一,四四一,三三〇,三六六	九〇五,〇〇〇,六〇〇	二,二六三,〇〇三,九五	一,三四七,七二,五四	九六,三三,五一
臺 灣	一四一,六七,五九五	一一〇,六四,五三〇	三一,〇〇三,〇七五	一一二,一七六,六八三	八七,二六八,六六八	二四,九〇八,〇一五

樺太	四〇、三九、五七七	三三、三五、八八七	六、七八三、七〇〇	二四、七〇〇、一四六	一六、一九六、〇六一	八、五〇四、〇八五
關東州	三九、一七〇、四〇〇	二〇、一七三、八三〇	一八、九九七、六〇〇	三、六五九、四六七	一五、七五〇、一八五	六、九〇三、二八一
南洋群島	八、〇九八、二九五	五、二八、四六六	二、九九八、八二九	五、三九三、七六二	二、九二四、八三七	二、四七八、九三五

國稅收入額 (昭和九年度決算額)

朝鮮内地	五、三九、二四六	八四三、一八三、四九六	一九、四七、八六六	一、八二二、一六〇	五、九二〇、五六	二、七九九、七三五
臺灣	一九・三%	三七・五%	一三・七%	四・五%	一五・二%	三〇・六%
樺太	二・六	二二・三	三・七	五・八	三・九	一・二
關東州						
南洋群島						

備考 人口一人當負擔額中南洋群島は出港税及鑛區税を除きて算出す。

税種別金額 (昭和九年度)

朝鮮内地	五、三九、二四六	八四三、一八三、四九六	一九、四七、八六六	一、八二二、一六〇	五、九二〇、五六	二、七九九、七三五
臺灣	一九・三%	三七・五%	一三・七%	四・五%	一五・二%	三〇・六%
樺太	二・六	二二・三	三・七	五・八	三・九	一・二
關東州						
南洋群島						
總計	五、三九、二四六	八四三、一八三、四九六	一九、四七、八六六	一、八二二、一六〇	五、九二〇、五六	二、七九九、七三五
內國稅總計	四三、二七五	六九六、一〇一	一六、七三八	一、八〇九	五、九二八	二、七六五

財政

地租	一四、七六	五七、六四六	五、八四三	一〇	二七	
所得稅	五、二四	一九六、三八二	四、〇五六	二四〇	三、三三一	
鑛業稅	一、三九〇	四、三四七	一九五	一五三		(鑛業稅) 一
營業收益稅(營業稅)	一、五六三	四八、六四八		三九二		
資本利子稅	四四七	一四、八七三				
漁業稅				二四		
人頭稅						三
取引所稅	四九七	一四、五四八			一五	
銀行券發行稅	五		二四七			
酒稅	一六、五八三	二二八、四三三	三、三六八	八九	五九	
砂糖消費稅	二、六四三	七四、九六七	三、〇一八			
織物消費稅		三五、六九六	二			
煙草稅					一、二二	
出港稅	九一					二、六九二
其他の稅	二四一	三〇、六九五			四三	

關	稅	三、七六	一四、四三三	三、六一	三	—	三
噸	稅	三三	二、五〇〇	五九	一	—	三

一戸當租稅負擔額比較 (昭和九年度)

國	朝鮮	一〇、八一九	國	內地	一八、五六九	臺灣	一八、五六九
道	五、〇五二	道府縣	一八、〇〇五	州及地方廳費	二、三九七		
府	三七、九七三	市	三五、五六〇	市	一四、二八三		
邑	三、八六七	町	二四、二〇四	街庄區	九、二二〇		
面	〇、九三九	合計	一三三、四四三	合計	五四、二六九		
學校費	二二、〇六〇						
學校組合	八〇、七一〇						
合計							

國債及借入金比較 (昭和九年度決算)

朝鮮	臺灣	樺太	南洋群島
四九八、八三〇、五四	二二九、五五、四五〇	三八、二二、三六九	七三、八八〇

財政

國債	四八九、四八〇、五四	一二九、五二五、四五〇	三七、六二二、三六九	七三、八八〇
借入金	九、三五〇、〇〇〇	—	六〇〇、〇〇〇	—
人口一人に 付國債額	一一三・二六	一一四・九三	一一一・〇三	〇・八一

國庫補充金比較 (決算額)

朝鮮	自明治四十三年度 至昭和九年度	二九二、四〇一、〇一八	臺灣	自明治二十九年 至明治三十七年度	三〇、四八八、六八九
樺太	自明治四十年 至昭和八年度	二六、九四五、七〇六	關東州	自明治四十年 至昭和九年度	九四、九四八、六六五
南洋群島	自大正十一年 至昭和六年度	二二、一一二、四一九			

地方財政の財政は道税を主とし、國庫補助金、使用料、手数料等を以て其歳入に充て、各般の事業費を支辨する。府の經濟は之を一般經濟と特別經濟とに區分し、特別經濟は更に第一部特別經濟と第二部特別經濟とに區分せられ、一般經濟に於ては、府税、使用料、手数料其他の收入を財源として都市的施設に充て、第一部特別經濟は府内の内地人教育に關する經濟を分別したもので、小學校、高等女學校、實業學校、實業補習學校、幼稚園を經營し、之に屬する府税は内地人の負擔する戸別税で一戸當平均額は昭和九年度二十二圓六十錢である。第二部特別經濟は主と

して府内の朝鮮人教育に關する經濟を分別したもので、普通學校及實業補習學校を經營し、其主要財源たる府税は戸別税及家屋税附加税で一戸平均負擔額三圓五十八錢一厘である。邑面は其邑面に屬する收入を以て、邑面の必要なる費用及法令に依り邑面の負擔に屬する費用に充て、仍不足あるときは邑面税及夫役現品を賦課徴收し得、國税及道税の附加税並に特別税を賦課する。學校組合は内地人の教育に關する事務を處理し、營造物の使用には使用料を徴收する外、組合財産より生ずる收入、組合に屬する收入を以て其經費を支辨し、仍不足する場合は組合費及夫役現品を賦課徴收し、其一戸當平均負擔額は二十二圓六錢になつて居る。學校費は普通學校、其他朝鮮人教育に關する費用を支辨する爲め各郡島に置くもので、賦課金、使用料、補助金、財産收入及び其他の收入を以て財源とし、一戸當平均賦課金は九十三錢九厘となつて居る。

地方財政 (昭和十年度豫算)

歳出		歳入	
經常部	臨時部	經常部	臨時部
計	計	計	計
一七、六三九、九四四	四、七五四、〇四五	二五、八八二、九六三	三、五七五、六八三
円	円	円	円



## 八 專 賣

煙草・煙草專賣令は大正十年より實施したるが、漸次制度の完璧を見、製造設備及販賣機關も亦整頓し、今や其收入は半島に於ける重要な財源に屬して居る。毎年煙草を耕作すべき地域・面積及煙草の種類は豫め公示するものにして、現在の耕作地域は平安北道及咸鏡南北道を除きたる十道、七十郡、一邑、三百七十九面に亘り、煙草の種類は大別して内地種・朝鮮種及黄色種の三種である。煙草製造工場は京城・全州・大邱・平壤の各專賣支局所在地に、印刷工場は京城に設置し従事職工は男女工を通じ二千八百餘名を算する。現在製造の煙草は口付紙卷煙草に、敷島・朝日・松風、兩切紙卷煙草に、ジージーシー・コンゴウ・カイダ・ピジョン・銀河・蘭・マコー・メープル・牡丹、細刻煙草に、さつき・あやめ、荒刻煙草に、不老煙・長壽煙・五福草・壽煙・福煙の十九種である。販賣官署は、專賣支局四、出張所二十二、販賣所數三百十八箇所に及んで居る。

紅蔘 人蔘は朝鮮に於ては殆んど到る處に産出するが、古來人口に膾炙し有名なるものは京畿道開城附近に産する高麗人蔘である。政府は此の附近を人蔘耕作地に指定し、此の地域より産出したる人蔘中紅蔘原料に適するものゝみを買収して紅蔘を製造するのであるが、その以外の人蔘は

民間に於て全部白蔘に製造せらるゝのである。人蔘は一般作物と異なり播種後五・六年を経ざれば收穫すること能はず、而も耕作中は病害や虫害に罹り易いので、之が耕作には多大の苦心を要するのである。紅蔘は専ら支那に輸出せられ其の價極めて高きものであるが、白蔘は殆んど國內に於て消費せられ其の價は廉價である。

鹽 古來朝鮮に於て消費する鹽は専ら沿海各地に於て製造する煎熬鹽を用ひたのであるが、併合以來政府は官營鹽田を築造して製鹽を行ふと共に、鮮内の製鹽を保護し且は鹽政の統制を期する爲め輸移入鹽の管理を行つて居る。現在鹽田の實効面積は二千六百五十八町歩あり、鮮内鹽消費年量五億八千萬斤に對し鮮内の天日鹽供給額は平年大體二億五千萬斤内外にて、之に在來の煎熬鹽六千萬斤の生産を見込むも尙多量不足し海外よりの輸入に俟たねばならぬので、政府は鹽田の擴張計畫を有し、其産額増加に努めて居る。

阿片 麻藥中毒者を根絶する目的を以てモルヒネ類の製造販賣を政府事業とし專賣局内に工場を設けて製造して居る。尙中毒者を登録して救療を爲すと共に、登録を受けたる者に對しては治療に必要程度のモルヒネ類の使用を許して居る。昭和九年度の麻藥賣下高は二百六十一吨餘である

## 製造煙草賣渡高

大正十四年度  
昭和九年度

總價額		鮮品		輸入品	
三三、六三七、八八九	口付兩切細刻荒刻	紙卷葉卷刻	數量	數量	價額
三九、〇三五、六七六	八八、五五三、三八一	三二、四六、一五七	五、六	二、六	八四、〇三〇
	九六、八三三、五三三	三、八三三、七三三			
	一九九、六六四、四〇三	三、二四六、九六九			
	三九、四一、一六七	三〇七、〇九七			
	二六、五七六				

葉煙草耕作及收納

大正十四年度	昭和九年度	人員	面積	總數	內地種	朝鮮種	黃色種	賠償金額
九六、〇三〇	三、八二五、一〇一	三、八二五、一〇一	三、八二五、一〇一	七、二四三、八九六	一、八二一、三〇三	三、八三三、七三三		
八五、六九五	一四、六三三、一五〇	九四〇、二六三	二、二六四、一四六	三、一九九、九六五	五、三三二、九五七			

製造煙草及製造煙草輸入

專賣

五五

製造煙草數量

輸入數量並金額

大正十四年度	兩切	口付	細刻	荒刻	紙卷	葉卷	刻	金額	
	千本	千本	百	百	千本	千本	百	円	
昭和九年度	三,五七,九七九	九七,七四〇	八六,一八五	三九,三六八	二,七四七	四〇	一七,五五〇	六,三三五	
大正十四年度	三,五七,九七九	九七,七四〇	八六,一八五	三九,三六八	二,七四七	四〇	一七,五五〇	六,三三五	
昭和九年度	四,五九,三三三	一七,四〇〇	三〇,七五	一六,四三六	九五	五三〇	二四〇	四,九六六	四六,四三三

人蔘耕作及水蔘收納

大正十四年度	耕作人員	耕作面積	收穫高	收納高	賠償金額
	千	坪	斤	斤	円
昭和九年度	二六八	一,五三三,四〇二	四,五五二	一一,六三四	九,七八四〇
大正十四年度	二六八	一,五三三,四〇二	四,五五二	一一,六三四	九,七八四〇
昭和九年度	二八九	一,八四六,五九三	七,七六四六	一四,二五七七	一〇,八七,九四八

紅蔘製造高

大正十四年度	總數	天蔘	地蔘	雜蔘	尾蔘
	斤	斤	斤	斤	斤
昭和九年度	四二,三三九	一五,六八三	一五,三四五	六〇一	九,六九〇
大正十四年度	四二,三三九	一五,六八三	一五,三四五	六〇一	九,六九〇
昭和九年度	四九,八八五	一八,一七七	一七,八〇六	一,三三〇	二,六三六

天蔘、地蔘、雜蔘及尾蔘は紅蔘の品質區分名稱にして、天蔘は甲、地蔘は乙、雜蔘は丙に該當し、尾蔘は紅蔘の「ヒゲ」の部分なり。

紅 蔘 拂 下 高

尾 小 雜 地 天 總	蔘 蔘 蔘 蔘 蔘 數	昭 和 九 年 度		大 正 十 四 年 度	
		數 量	價 額	數 量	價 額
		三七,三二	一,五三二,五四六	四〇〇,〇六一	二,六五八,八六四
		一四,八九六	九六三,一〇四	一九,八四〇	一,七二四,九五二
		一四,六三七	五三三,四一九	一九,一〇〇	九二七,四二五
		二九一	四,五一	五三六	一〇,七三五
		一	—	七五	三,〇〇〇
		七,三九七	三二,五〇二	五一	二,七六三

人 蔘 輸 移 出 入

大 正 十 四 年 度	紅 蔘		白 蔘		水 蔘	
	輸 移 出	輸 移 入	輸 移 出	輸 移 入	輸 移 出	輸 移 入
數 量	四,三六	—	六,七七	—	—	—
價 額	三,三六三,三七二	—	四三,七三三	—	—	—
數 量	—	—	—	—	—	—
價 額	—	—	—	—	—	—
數 量	—	—	—	—	—	—
價 額	—	—	—	—	—	—

專 賣

五 七

昭九年度 五、五五 二、〇四九、七四四 七、〇五六 三、五〇、七二一 二七、八三三 八一、〇八六 一三、六四五 二八、〇八三

官鹽製造高(天日鹽)

面積 積 生 產 高

大正十四年度

二、四四六 八四、九九三

昭和九年度

二、六五八 一三七、八六三

私製鹽(煎熬鹽)

製造者數 釜數 鹽田面積 製造高 價額

大正十四年度

七、一九三 一一三三二 二、五〇五 五〇、六一〇 一、二九五、九九九

昭和九年度

七、八八〇 一、三〇〇 一、九五七 六八、二四九 九九六、三八五

同 上(再製鹽)

製造者數 釜數 製造高

大正十四年度

七〇 一七四 四六、七三四

昭和九年度

六五

一六三

四六〇六〇

鹽販賣高

數量

價額

百斤當平均價格

大正十四年度

八二〇四七・二五

一、二八三・三三

一・四四二

昭和九年度

五八三四〇〇・二五

六、四八六・三六一

一・二二二

鹽輸移出 入

輸

移

入

輸移出

政府購買鹽

民間輸移入鹽

計

數量

斤

價額

圓

數量

斤

價額

圓

數量

斤

價額

圓

數量

斤

價額

圓

大正十四年度  
昭和九年度

二八三、二四四、七九三、二七三、三六八

二七、一六、五五、二、七九、七、二六、二七、一、六、五五、二、九七、二、六

六三、七、七三、一、五、九、六三、四、三三、六、六、五二

專賣收入支出

專賣

五九

專賣

六〇

大正十四年度		昭和九年度	
總額	四九四,四三三	總額	四七〇,〇〇〇
煙草	四八三,三三七	煙草	四七〇,〇〇〇
人蔘	二六六,五七六	人蔘	一,七五七,六一
鹽	一一九,〇〇〇	鹽	六〇〇,〇五九
阿片	—	阿片	—
其他	—	其他	—
支	—	支	—
出	—	出	—
差	—	差	—
益	—	益	—
金	—	金	—

專賣收入比較 (昭和九年度決算額)

品名	朝鮮		內地		臺灣		關東州	
	金額	比例	金額	比例	金額	比例	金額	比例
總數	四七〇,〇〇〇	一〇〇・〇〇	三,〇〇〇,〇〇〇	一〇〇・〇〇	四六,〇〇〇	一〇〇・〇〇	六,七六,三三九	一〇〇・〇〇
煙草	四七九,三三九	八二・五七	二九三,三六〇	八三・二	一五,二四〇,一五三	三三・九一	—	—
鹽	六〇〇,八三五九	一二・五九	五,一七九,六四五	一四・七	二,七〇三,九七〇	五・八四	—	—
阿片	一八三,三三三	一・三三	—	—	二,五五六,三七一	五・五三	六,三七六,三三九	一〇〇・〇〇
人蔘	一,五七,〇六一	三・三六	—	—	—	—	—	—
樟腦	—	—	六,九〇一,七〇九	一・九	八,六〇一,二七五	一八・五八	—	—

(樟腦及樟腦油)

酒類

雜收入

一七五、三三三	—	—	—	—	—
〇・函	—	—	—	—	—
六九六、三六一	—	—	—	—	—
〇・三	—	—	—	—	—
	—	一七、一九八、四〇一	—	—	—
	—	—	三七・二四	—	—
	—	—	—	—	—
	—	—	—	—	—

備考

樺太に於て煙草の專賣が行はれるがそれは國館專賣支局の所管に屬す。

朝鮮の鹽は專賣ではないが、鹽の輸移入管理等總てそれに關する事務は專賣局の所管に屬し、更に天日鹽の製造は專賣局自らが經營する。

## 九 農 業

耕地 朝鮮は到る處農業に適し殊に南部地方は氣候温暖にして農作物の發育最も佳良である。冬季は寒氣強きも麥類の如き冬作物の枯死する虞なく、年中概ね空氣乾燥せるを以て收穫物の品質良好なるも、夏作物中水稻の如きは氣候の關係上生育良好なるべきに拘らず、從來用水不十分なるを以て屢々旱害を被ることがあつた。併し乍ら、灌漑の設備年々發達せるを以て、漸次其度を減じつゝある。産米増殖は初め大正九年度より約十五箇年に亘り土地改良事業を施行することとなり、大正十五年更に計畫の一部を更新し同年度以降十四箇年を期し三十五萬町歩の土地改良を施行することとなりたるが、昭和九年五月内外兩地に於ける米穀事情の變遷に鑑み、本計畫は窮迫せる米穀事情の解消するまでこの計畫の遂行を中止する方針を採ることにした。

### 耕地面積 (昭和九年末)

耕地面積		畝(町)			川(町)
總數	一毛作	二毛作	一毛作	二毛作	
四, 五五, 四〇・八町	一, 六九二, 七三三・七町	一, 二七七, 五三三・〇町	四, 五, 三三〇・七町	二, 八三, 七四八・一町	

土地臺帳登録耕地	四、四三、四二・七	一、六二、三九・一	一、三五八、四六・〇	四三、九七・一	二、七〇、〇九三・六
土地臺帳未登録耕地	七三、九八・一	二、三四三・六	一九、〇五〇・〇	二、二九三・六	五三、六五四・五
火田	四三、三三・一				

備考 耕地面積總數には火田を含まず。

自作、小作別耕地 (昭和九年末) (單位町)

	自作		小作	
	總數	畝(田)	總數	畝(田)
土地臺帳登録耕地	一、三七一、五八・四	五〇、〇二二・〇	一、三六七、九一・四	二、五七、五四・四
土地臺帳未登録耕地	一、八七、五七・八	五三、九三・三	一、五三、六七・五	二、五四、八四・九
農業者中小作農大部分を占め、年々其數増加し自作農の減少を見つゝあり、當局は之を防止する爲め自作農創定、其他小農保護政策を實施して居る。大地主は多く都會に住居し、土地所在地に土地管理者を置いて小作地を管理し、小作料を徴收するを普通とする。小作料徴收の方法は概ね、(一)秋收期に於て検見を行ひ、生産額の二分の一を標準として小作料額を定むるもの	四、三六六	六、二七七	四、三四・九	三、六五・五
				一、五、三五九
				一、八、四三六

(二)收穫に際し其收穫物を折半し、其一を小作料と爲すもの、(三)年の豊凶に拘らず一定の小作料を定め置くもの、三種とし、小作契約は大地主、會社、農場等に於て成文契約をなすものあるも、一般には口約を以て之を定むるを普通とするが、小作農保護の目的を以て農地令を施行して居る。

農業者戸數表 (昭和九年)

自作	自作兼小作	小作	火田民	被傭者	總數
五四、六三七	七二、六六二	一、五四四、二九四	八、二八七	一〇三、三三五	三、〇一三、一〇四
内地人	朝鮮人	滿洲國人及 中華民國人	計		
八、七〇三	三、〇〇一、八三九	二、五五三	三、〇一三、一〇四		

備考 本表中被傭者とは耕地を所有並に占有せず、他人に履傭されて農業に従事し、獨立の世帯を構成せる者を謂ふ。

耕地面積及農業戸口比較 (昭和九年末) (單位陌)

朝鮮	内地	臺灣	樺太	關東州及 鐵道附屬地	南洋群島
四、八八七、三七九	五、九八七、七四七	八三五、七〇九	三二、五九七	二〇三、七三二	一七、七五〇
總數	× 四九、一三二				

農業 戸數	耕地面積	
	田	畑
總數	一、六七八、七四四	三、一九一、八四三
自作	三、二〇八、六三三	二、七九五、九〇六
自作兼小作	三、〇二三、一〇四	五、六七七、四八六
小作	五四三、六三七	一、七四〇、二一九
(火田民)	七三二、六一	二、三六八、九四八
(被備者)	一、五四四、二九四	一、五八八、三一九
	八一、二八七	一、五六一、九〇七
	一〇三、三三五	一、七七三

備考 朝鮮の總耕地面積中には火田面積(×印)を含む、

### 農業狀態比較 (昭和九年)

農業者人口	朝鮮	内地	臺灣	樺太	關東州及 鐵道附屬地	南洋 群島
總面積に對する耕地(%)	—	—	二、七〇〇、九九〇	五八、五二四	二五四、九四七	三、七二六
耕地面積に對する田(%)	三三・一	一五・七	二三・〇	〇・九	五四・〇	八・三
	三四・三	五三・三	五四・四	—	〇・六	七八

	昭和九年	明治四十二年
耕地面積に對する畑(%)	六五・七	四六・七
農家一戸に付耕地(畝)	一・六	一・一
人口千に付耕地面積(畝)	一八・九	八四・六
總戸數千に付農家戸數	七五・三	四〇〇・〇
人口千に付農業者人口	—	—
農産物	米は農業生産物中首位を占め昭和九年に於ては、生産高一千六百七十二萬石、輪移出九百九十三萬石、價額二億二千四百二十七萬圓に達した。農産物としての大豆・麥・粟・甘藷・ 鈴薯・果實・蔬菜・棉花・繭、畜産としての牛・馬・騾・驢・綿羊・豚・家禽・養蜂等も有望であるが、特に棉花、綿羊は一大獎勵が加へられ、養蠶と相俟つて將來重要生産品となるであらう。 朝鮮の農業發達の大勢を窺ふ爲、試みに明治四十三年と昭和九年に於ける主要農産品生産價額を比較して見やう。	五九・九
植産物總額	一八六・九	一七〇・〇
總額	一、〇一〇、一四七、八二二	三三、一〇九、一五五
昭和九年	明治四十二年	
植産物總額	八三〇、八二七、六〇〇	二〇〇、五八、四七三

農業生産價額表

米	四、五、五、五七	五、六、六、五七	果實總額	九、〇、五、四二	?
麥	八、六、五、五八	三、七、三、三〇	藁類	五、六、四、五二	四、四、三、七〇
豆類	五、三、五、八三	一、八、二、〇、四四	桑苗	八、五、三、〇三	?
雜穀總額	三、八、六、三六	三、三、三、六五	蠶業生產品	一、二、四、三、五五	四、七、六、三〇
特用作物總額	四、四、四、三六	三、六、六、三二	畜產物並同副產物	四、〇、五、四、〇〇	一、三、四、四、三六
棉	(三、五、七、八、一、三)	(一、三、七、五、六、〇)	植產物加工品	三、九、〇、六七	?
棉以外の纖維作物	(九、三、三、八、五)	(一、六、六、六、五〇)	蠶業生產物加工品	三、七、五、〇〇	?
其の他の特用作物	(九、四、九、四、五)	(三、三、七、七、七)	畜產物加工品	三、三、一、〇〇	八、六、五
蔬菜總額	五、八、三、二五	?	自給肥料	二、三、六、三三	六、六、三、二五

主要農産物生産高

昭和九年		明治四十三年	
作付段別	收穫高	作付段別	收穫高
一段高	一、七、一、九、四、〇、一 <sup>町</sup>	一段高	一、三、五、三、七、六、八 <sup>町</sup>
一段高	一、六、七、七、二、八 <sup>石</sup>	一段高	一、〇、四、〇、五、六、一、三 <sup>石</sup>
一段高	〇、九、七、七 <sup>石</sup>	一段高	〇、七、六、九 <sup>石</sup>
總數	一、七、一、九、四、〇、一 <sup>町</sup>	總數	一、三、五、三、七、六、八 <sup>町</sup>
	一、六、七、七、二、八 <sup>石</sup>		一、〇、四、〇、五、六、一、三 <sup>石</sup>
	〇、九、七、七 <sup>石</sup>		〇、七、六、九 <sup>石</sup>

備考 明治四十三年の植産物總額の内容と符合せざるは所屬不明の金額を除外せるによる。

	米			麥			豆類總數	大豆	小豆	綠豆	落花生	菜豆	豌豆	其他
	粳米	糯米	陸米	總數	大麥	小麥								
	一、六二〇、九八・三	五三、四三八・八	三七、五九三・〇	一、三五三、七八三・九	八八七、九五三・九	三三五、六三三・〇	一、〇八七、四八七・一	七九五、〇四・八	二二三、五七三・九	三八、八五三・六	二、四六四・九	五、七二一・〇	四、八八二・六	六、九六〇・三
	一六、〇〇三、〇二二	四六九、〇九二	二四六、一三四	二、一一六、九四三	七、九九三、九六九	一、八三七、七八一	四、九二九、八三二	三、八一三、三七七	八七三、三六七	一三三、六三三	四五、九二三	一九、〇四〇	二二、五一九	二二、九九三
	〇・九八七	〇・八七八	〇・六五五	〇・八二二	〇・九〇〇	〇・五六四	〇・四五三	〇・四八〇	〇・三七四	〇・三四一	一・八六三	〇・三三三	〇・四八二	〇・三三〇
	一、二五五、三〇九・九	八三、六九八・四	一三、七八八・五	八五七、五九三・六	五七五、九五七・五	二四三、八九四・三	七〇七、五五六・〇	四八八、〇五二・〇	二一九、五〇四・〇					?
	九、七五五、〇七三	五八二、六〇二	九七、九四〇	六、二〇七、六三三	四、七四六、九三六	一、二〇五、九七二	三、六三三、六八四	二、七四六、三五八	八八九、三三六					?
	〇・七七五	〇・六九六	〇・七〇〇	〇・七四四	〇・八二四	〇・四九七	〇・五一四	〇・五六三	〇・四〇五					?

雜穀

粟 七九一、六六一、<sup>町</sup>三、七七一、七三〇 〇・四七六 五三八、一六七、五<sup>町</sup>三、四六六、六〇〇 〇・六三三

稗 七七、八九・五 四〇六、九四六 〇・五三三 一三三、七〇一、四 八四一、三三三 〇・六八〇

黍 一四、六七三・〇 六四、五六九 〇・四四〇 一六、九九一、四 九八、七五五 〇・五八一

蜀黍 八四、七〇・五 四九一、四〇二 〇・五八〇 六四、四八三・三 四〇〇、九五六 〇・六三三

玉蜀黍 一一七、六三・二 五一六、二三三 〇・四三九 六五、八五六・〇 四〇〇、九七八 〇・六九

燕麥 一一九、三七・六 四五三、六五〇 〇・三七九 二九、七四八・二 一八七、三七三 〇・六三〇

蕎麥 一二六、三八・三 四八四、九八七 〇・四一七

特用作物

陸地棉 一三三、三六七・<sup>町</sup>四 一三〇、七三三、八八九 九二斤

在來棉 六〇、一四七・四 三四、二六一、一八五 五七斤 一、二六八・一<sup>町</sup> 六六八、一五二斤

人蔘 二二三・三 九三六、四六六 四三九斤 五八、八九三・〇 二〇、四〇〇、六八五

大麻 二六、七六・一 四、八二七、五〇六 一八貫 一八、六三三八 一、七四九、七四〇 一、九貫

苧麻 一、四三・六 一三九、〇八八 一〇斤 八六四・二 四七、五三九

青麻 四〇五・八 五九、四九六 一五斤 ? ? ?

農案

農 業

作物	昭和九年	一段高	一段歩高
煙草	一四、六三・三	四、一〇七、八三	二六
杞柳	一五三・八	一七、九九	二〇
除蟲菊	一五・九	一、六七	二
薄荷	六九・三	六四、九七	一〇三
莞草	四、六三・四	一、三〇二、一五〇	三
楮	七、三八・一	一、八二二、三三六	二五
花	一三、一五・三	四九、八三	〇・三七九
胡椒	一〇、〇八・〇	三七、四七六	〇・三七三
蓖麻	二、三四・一	二二、二八	〇・五四六
蔬菜	作付段別	收穫高	一段高
甘藷	二、七四・八	四、三六七、三五五	二〇四
馬鈴薯	九六、三四・八一	九三、三二八	二六
蘿蔔	六三、二八・五一	六〇、七〇五、七〇七	二五四

七〇

作物	昭和九年	一段高	一段歩高
白菜	二六、六四・三	二、三七八、八三	二八
藍	四、一五三・三	一〇八、五九、二五三	三五
葱	九一〇・〇	一、五三五、一七四	一六
其他	三、〇七一・七	六、二七、一八二	二〇〇
蔬菜	作付段別	收穫高	一段高
甘藷	四、一五三・三	一〇八、五九、二五三	三五
馬鈴薯	九一〇・〇	一、五三五、一七四	一六
蘿蔔	三、〇七一・七	六、二七、一八二	二〇〇

茄子	二,二〇・二	四,六八,〇九一	二三	大蒜	八,〇九〇・九	九,七六,七四一	一三〇
胡瓜	七,八八・五	一九,三三二,〇三一	二四七	コンニャク芋	二・二	四,一〇七	一八七
南瓜	四,一三・八	一〇,九五,三三一	二六五	蕃椒	一四,三九・五	九,九二,九八一	七〇
甜瓜	一四,二四・八	三四,一六,九三六	三四三	芹	九六四・六	三,三五九,一〇六	三四八
西瓜	二,七〇・四	六,九五,一七六	二五四				

果樹

昭和九年

昭和九年

苹果	二,〇八七,二四	一四,四三四,〇三〇	三四	桃	二六七,二五三	九六四,三五八	三四
梨	八七二,三五一	三,五六三,四七三	三四	葡萄	二五〇,一六三	七〇一,七六九	三四
柿	九四七,八五四	六,二八九,六四〇	三四				

家蠶

昭和九年

明治四十三年

飼養戶數	一,三九八,〇三六	八元,八二四	五五八,三三	總數	?	七六,〇七	?
蠶種掃立枚數(枚)	一,〇八〇,四七	六〇,〇〇〇	四〇〇,〇四七	總數	八九,九八〇	八四,五六六	五,三九四

繭 產 高(尺) 三、九九、〇八八 一五、八八三、三四七 一〇六、七八四 一三、九三三 二二、九六〇 九七一

製造戶數 釜數 生產高 製造戶數 釜數 生產高

家 蠶 絲 三六、三三八 三六、〇五〇 二、二六、一六二 五二、〇一五 ? ?

柞 蠶 總數 昭和九年 春 蠶 秋 蠶 總數 明治四十三年

飼養林面積(畝) 二四一 一 一 一六六三

飼養戶數 五〇 四四 六 一〇一〇

放養蛾數(千蛾) 二七六 二五六 二二〇 ?

繭 產 高(千顆) 三、一六一 二、八九八 二、二六三 三、五七五九

蠶業

蠶 種 製 造 昭和九年 大正二年 共同飼育 戶數 九、七七七 六七三

製 造 人 員 二六六 八九、八八三 蠶種掃立枚數(枚) 九、九三七 七九六

製 造 枚 數 一、二〇、〇四七 一、九〇、八三三 繭 產 高 (尺) 二、〇九二、一九五 二〇六

稚蠶共同飼育 昭和九年 明治四十三年 平均 繭產高(尺) 三、〇三三 三〇

一個所 三、二七三 三〇 平均 繭產高(尺) 〇、九八 五、三三

昭和九年末 明治四三年末

昭和九年 明治四三年

桑 田

桑 苗 生 産

桑苗生産業者數 九九七 一四八

本 段 別(畝) 二七、九六・三 八四四・二  
見 積 段 別(畝) 四七、二六・一 二、四三三・六

生 産 成 苗(千本) 一〇三、二七三 六、五三三

養 蠶 比 較 (昭和九年)

桑 園 面 積(畝)

朝 鮮

臺 灣

內 地

飼育戶數

春 蠶 八三九、八一四  
夏 秋 蠶 五五八、三三二

一、二三七 一、八六六、五五二  
一、九四二 一、八一〇、七八七

掃立枚數

春 蠶 六八〇、〇〇〇  
夏 秋 蠶 四〇〇、〇四七

四、四二二 四、四三三  
四、三八三 八三、四五一、七四六

産繭高

(畝) 農 業

春 蠶 一五、八八二、三〇四  
總 數 一三三、九八九、〇八八

二三八 三九七  
一八一、四六四、二四四

價	總額	夏秋蠶	七,一〇六,七八四	一六九	一四五,二七八,三二一
		春蠶	一〇,〇二七,八五一	七六,四二六	二〇三,八四九,一七八
		夏秋蠶	七,二〇〇,一三〇	五二,二六一	一七二,三四〇,三七八
		春蠶	二,九〇七,七三二	二四,一五五	八六,五〇八,八〇〇

畜產物產額 (昭和九年)

總價額	數量	價額	畜產品總價額	四〇,七五三,三三二	數量	價額	豚總價額	九,一五九,八五九
			牛總價額	四〇,七五三,六六九			一八,八六七,五〇七	八,九二一,八七三
馬	其他	價額	牛	三,七六九,五九三	數量	價額	其他	二七四,九六六
			牛	二,一六六,三四三			綿	一八,一三七
			牛	一八,一五五,五一			山	一三五,六三〇
			牛	八三二,八三三			犬	八〇一,七〇六
馬	其他	價額	牛	三三五,二七七	數量	價額	兔	二六,七四七
			其他	一四,六〇三			雞總價額	八,〇九三,七七八

鶏肉	四、六五五、一七〇 <small>千類</small>	三、三七、五三三
鶏卵	三七、四六六	四、八六六、二〇五
其他の家禽	—	二、三、一五一
蜂總價額	—	七九八、八四四
蜂蜜	八三〇、七四〇 <small>庄</small>	七〇七、二四
蜜蠟	八八、三七三 <small>庄</small>	九一、六三〇
加工品總價額	—	二四一、二九二

ハム	四、五〇、〇〇一 <small>庄</small>	五三、五五三 <small>円</small>
ベーコン	七、八三三	八、四七七
バター	二、一五五	四、三〇四
ソーセージ	二〇、五三〇	二三、五九九
鳥獸肉罐詰	一五八、〇〇七	九三、一九七
其他	—	四九、二二三

主要畜産物産額比較

	昭和九年			明治四十三年		
	數量	價額	單位價	數量	價額	單位價
牛						
總數	三、七八九、五九五 <small>庄</small>	二、二六、三四三 <small>円</small>	—	二、六三九、二〇五 <small>庄</small>	一、八九二、四三〇 <small>円</small>	—
改良皮	一、八九七、七八八	一、二〇、八二六	—	—	—	—
在來乾皮	一、八九一、七七七	九〇五、五二七	—	二、六三九、二〇五	一、八九二、四三〇	—
骨	三、八〇六、八八九	一六五、八一	—	一、〇八七、五〇〇	二二、五七六	—

農業

牛馬豚驢山綱

牛豚豚

農

業

家畜及家禽

脂毛脂

八四二、一九三  
一七四、二六四  
六七八、三三七

一六五、一六二  
三七、七三八  
一三七、二四八

七三五、九七七  
七七、一六一  
五、四〇五

一三〇、七九三  
一六、六五〇  
九、八三

七六

昭和九年末

明治四十三年末

飼養戶數

頭數

飼養戶數

頭數

一、三二九、三五〇

一、六七一、一八五

?

七〇三、八四四

三六、九八八

五三、八〇四

?

三九、八六〇

一、一〇三、二四

一、五八三、五二三

?

五六五、七五七

四、五四七

四、七三五

?

八、二六四

一、三〇七

一、四三六

?

八二二

二〇、七四三

三三、二七七

?

七、三三一

一五一

五、四七三

?

四七

飼養戶數

總羽數

飼養戶數

總羽數

羊 羊

雞	一、六三九、七〇四	七、一七八、七二五	二、七九六、二五九
鶩	九、二二八	三六、二六九	?
七面鳥	三〇三	一、〇五六	?

其他養兔及養蜂

養兔	昭和九年末	昭和四年末	養蜂	昭和九年末	昭和三年末
飼養戶數	一三、二四〇	一三、八八五	飼養戶數	九七、七一一	八一、二六九
頭數	四五、九一九	四、二六〇	飼養箱數	二〇、一〇八三	一七〇、七五五

屠場數及屠場內屠畜數

屠場數	昭和九年	明治四十三年
屠場內屠畜數	一、三九五	一、〇八九

總數	昭和九年	明治四十三年
	頭數	頭數
總數	價額	價額
	一、〇、四、四、〇、六、四	四、一、五、三、三、〇、九

牛	二四三、九〇九	一五七九五、八二四	一七五、九四七	三八八一、六八六
馬	六一八	一三、〇五四	一九	一八八
豚	三六九、〇二四	四、五九四、八三〇	八六、一〇一	二七一、四三五
驢	二五	一八二	—	—
騾	九	一八四	—	—

家畜及家禽比較 (昭和九年未現在)

牛	朝鮮	內地	臺灣	樺太	關東州及鐵道附屬地	南洋群島
馬	一、六七二、一八五 <small>頭</small>	一、六四、七九八 <small>頭</small>	三九四、八六五 <small>頭</small>	五、三三三 <small>頭</small>	二二、六四三 <small>頭</small>	五、一五三 <small>頭</small>
驢	五三、八〇四	一、四六四、二八九	四二一	一三、四二五	一〇、九四一	六
騾	四、七三五	—	—	—	二二、九〇四	—
山羊	一、四三六	—	—	—	二八、五八四	—
綿羊	三二、一七七	二五三、七五八	八三、六九九	七六	二五、三七	三、三五
豚	一、五八三、五三三	九八〇、七三八	一、八三六、一六九	八、六〇六	二八、七九四	一八、七五三

七	鷺	鷺	鷺	鹿
面				
鳥				
	1,056	36,269	7,178,735 <small>羽</small>	
		560,044	53,35,730 <small>羽</small>	
	15,144	36,807	6,198,693 <small>羽</small>	771
	287	418	86,503 <small>羽</small>	
	131	3,294	358,491 <small>羽</small>	
	809	6	4,919	90,346 <small>羽</small>

一〇 林業

林野面積 朝鮮の林野面積は一千六百三十四萬六千二百歩を有し、全土の約七割四分を占む。朝鮮の林業上の位置は、これを植物地帯上より水平的に觀察するときは、その大部分即ち北緯三十五度乃至四十一度に亘る區域は溫帶林に屬し、アカマツ・ビヤクシン・テウセンマツ・テウセンモミ・コノテカシハ・エノキ類・ナラ類・ケヤキ・クヌギ・アベマキ・クリ類・トネリコ類・サクラ類・白楊類・シデ類・ニレ類・カヘデ類・ハンノキ類・ハリギリ等を産し、その北方鴨綠豆滿兩江上流地帯は寒帶林にして、タウヒ類・タウシラベ類・カラマツ類・カンパ類・ヤマナラシ類・ドロノキ類・クルミ類・ナラ類等を産し、北緯三十五度以南は暖帶林にして、濟州島・莞島・大黒山群島の森林はこれに屬し、クロマツ・アカマツ・カヤ・カシ類・シヒ・アキニレ・エノキ・ムクエノキ・ツバキ・コナラ・シデ類・タブ・クス類等を産する。又これを垂直的に觀察するときは、濟州島漢拏山には暖帶・溫帶・寒帶林の森林景を、また智異山脈・金剛山脈には溫帶・寒帶林の森林景を併備して居る。

森林行政 森林保護の爲めには、國有林に對しては森林保護區を設けて森林主事を配置し、民有林に對しては森林保護職員を置きて森林保護の完璧を期し、殖林事業としては官公營の殖林植樹

を行ひ、種苗の無償下付、造林貸付、造林補助等を行ひ、砂防事業としては、荒廢山野の治水上復舊を要すと認むる地域に對し復舊造林を行ひ、更に窮民救済砂防事業として、昭和六年度より同八年度に亘り繼續事業として、大規模の砂防工事が行はれ、治水と窮民救済とが同時に實施されたのである。國有林の經營に對しては營林署を設け、營林、伐木運材及流筏、製材、販賣、立木拂下、森林土木、森林鐵道等が經營されて居る。

北、鮮、開、拓、事、業、と、し、て、は、鴨、綠、江、・、豆、滿、江、の、上、流、地、帶、の、山、地、帶、八、郡、に、對、し、森、林、の、利、用、開、發、火、田、民、の、指、導、森、林、保、護、等、を、行、ひ、其、他、林、業、關、係、官、廳、及、試、驗、場、あ、り、て、監、督、指、導、試、驗、調、査、等、を、行、つ、て、居、る。

所有別林野面積 (昭和九年末)

總數	國有		林業	
	有	要存豫定	不要存豫定	計
一六、三、四六、〇〇三 <small>町</small>	五、八、四四、七三二	三、四〇六、四九六 <small>町</small>	三、五、九〇〇 <small>町</small>	三、四三三、〇八八 <small>町</small>
	公 有	營林署管轄		
	八七五、七六六	三、四〇六、四九六 <small>町</small>	三、五、九〇〇 <small>町</small>	三、四三三、〇八八 <small>町</small>
	寺 刹 有	道 管 轄		
	一八三、七六六	一、二、四八、二八〇	一、二、七三、三三三	二、四三一、六三三
	私 有	計		
	九、四三、七六七	四、六、四四、七七八	一、二、〇九、九四三	五、八、六四、七三二
	林 業			
				八 一

林相別林野面積 (昭和九年末)

總數	一六三,四六〇 <sup>町</sup> 〇二	開墾適地	二四八,八六六 <sup>町</sup>
立木地	一一三,三二,一〇六	放牧適地	一四四,八八五
散生地	一一三,一〇,一七一	採草適地	一一三,五七三
未立木地	一一三,三三,三五二	除地	三九〇,一九二
火田	四九四,九五七		
立木地	一一三,三二,一〇六 <sup>町</sup>	針葉樹林	五,五二〇,四三〇 <sup>町</sup>
		潤葉樹林	三,二四五,三二七
		針潤混淆樹林	二,五五〇,八〇八
		竹林	四,五五一

林野面積比較 (昭和九年末) (單位陌)

朝鮮	一六,二一〇,九〇一	內地	二,三六五,七三三	臺灣	二,四四四,三六七	樺太	二,九〇四,一九四	關東州	九三,一〇七
總數		(御料林)	一,四一三,八八五						

森林	16,210,911	210,555,913	1,891,909		
原野		3,069,818	55,478		
國有	5,816,248	9,071,495	2,183,035		
森林		8,661,157	1,680,203		官有 7,493
原野		40,388	503,833		
公有	868,500	4,431,606	13,061		
森林		3,441,711	10,931		
原野		989,885	2,130		
私有	(寺刹有を含む) 9,536,153	10,143,630	248,300		
森林		8,473,035	200,774		民有 15,37
原野		1,669,595	47,526		
總面積に對する 林野面積(%)	73.8	61.8	67.97		
造林面積	9,640	350,333	2,164		3,871
備考	内地の分は昭和八年末				1,483

林産物産額 (昭和九年)

種別	數量	價格	種別	數量	價格
總額	—	一〇六,〇三〇,六八四	木炭	二五,七三〇,三九四	二,八六三,一七一
用材	二,二九八,八三三 <small>立方米</small>	一七,八五三,九七五	種實	一五四,四三〇	一,八三三,三六三
竹材	一,九七,九〇一 <small>束</small>	三三〇,〇九六	菌草	九七,八〇四	一三,七八一
薪	一,三三六,四六六 <small>千貫</small>	二四,五〇七,五二六	筍	二九,一七	一〇,九七五
枝葉及 其他の林 産物 肥料 堆肥原料	四,〇五九,四七七	四,五六七,七三〇	漆液	一,〇三三	一九,七八
飼料	一,二二六,三六四	一〇,三四二,一八五	松脂	四九八	七元
	三七七,四〇八	三,七九三,八八九	アペマ キ樹皮	五九五,九三四	二八,〇五六
					其他
					土石類
					五倍子
					染料
					山野菜
					竹皮
					竹葉
					藥草
					其他

林産物比較 (昭和九年中)

總價	數量	金額	種別	數量	價格
總價	—	一〇六,〇三二 <small>千円</small>	朝鮮	—	—
用材	—	二,二九八,八三三 <small>立方米</small>	内地	—	—
竹材	—	一,九七,九〇一 <small>束</small>	臺灣	—	—
薪	—	一,三三六,四六六 <small>千貫</small>	樺太	—	—
其他	—	四,〇五九,四七七	南洋群島	—	—
飼料	—	一,二二六,三六四			
		三七七,四〇八			





造 林 事 業 (昭和九年)

國費經營造林

施業面積 總數	種 苗		種 苗		種 苗	
	種	數	種	數	種	數
九, 五七〇	—	—	—	—	—	—
二, 三〇三	—	—	—	—	—	—
三, 四四・八	—	—	—	—	—	—
一, 三三・五	—	—	—	—	—	—
四七五・〇	—	—	—	—	—	—
四九〇・〇	—	—	—	—	—	—
八六〇・二	—	—	—	—	—	—
九, 五七〇	—	—	—	—	—	—
二, 三〇三	—	—	—	—	—	—
三, 四四・八	—	—	—	—	—	—
一, 三三・五	—	—	—	—	—	—
四七五・〇	—	—	—	—	—	—
四九〇・〇	—	—	—	—	—	—
八六〇・二	—	—	—	—	—	—
九, 五七〇	—	—	—	—	—	—
二, 三〇三	—	—	—	—	—	—
三, 四四・八	—	—	—	—	—	—
一, 三三・五	—	—	—	—	—	—
四七五・〇	—	—	—	—	—	—
四九〇・〇	—	—	—	—	—	—
八六〇・二	—	—	—	—	—	—

地方費其の他民營造林

林 業

施業面積	新植		補植		新植		補植	
	數	千本	數	千本	數	千本	數	千本
總數	一六三、四〇九	六五、九二七	五一、九八九	五、	六四六、四六一	一六、二四六	五三、二四九	五、
アカマツ	一〇、〇八四		四、五二三		二三五			
クロマツ	一〇、九七九		四、三七七		一七九			
カラマツ	三四、四三四		七、二〇七		一三四			
テウセンマツ	八、七三二		一、六八三		一三一		一四六	
ク	一一、五二九		三、六八一		六、五六五		一、四二四	
クヌギ	二六、三八四		一八、八七七		四九八、六七四		四九、四〇〇	
ハンノキ類	二六、八二八		六、九八二		一一、九八二		一六一	
ポプラ類	一九、三九三		二、九五七					
ニセアカシヤ	九〇五		六四		四、九二三		一〇〇	
其他	一三、〇〇九		一、六四八		一一三、六五八		二、〇二八	
竹	一一三三							

營林署事業

買收材及賣却材

年度	買收材			賣却材		
	材積 <small>立方米</small>	價額	單價	材積 <small>立方米</small>	價額	單價
明治四十三年度	四、三五四	二四、七九四	五、七六一	九一、三六三	一、一四、三六二	一三、五三六
昭和九年度	—	—	—	一七〇、八六二 (素材)	二、一六〇、九八〇	一三、六四八
				一七七、三〇九 (製材)	四、四一六、二四六	二四、九〇七
						二〇六、七五二

斫伐及製材

(單位立方米)

年度	伐木山地		市場著材		製材	
	材積	價額	總數	著材	製材	製材副產物(層積)
明治四十三年	五、二二三	五、二二三	六、七九〇	六、七九〇	—	八九、六四四
昭和九年	四九、七五〇	四七、九二六	三、七、六九	三、七、三三〇	三三、二七一	五〇、一八八、一八五
						一八、六三三

林業

## 一一 鑛業

主要鑛産物 朝鮮は各種の鑛産物に富み、就中、金(砂金)、鐵、石炭(無煙炭)、黑鉛は四大鑛物に算へられる。金鑛は到る所に分布し、平安北道、忠清南道、江原道、咸鏡南道等最も多く、砂金も各道に分布して居る。鐵鑛は赤鐵鑛、褐鐵鑛、磁鐵鑛にして、赤鐵鑛は咸鏡南道利原、黃海道安岳の鐵山、赤褐兩鐵鑛の混合せるものに平安南道价川及黃海道載寧、銀龍、下聖、南陽、黃州、兼二浦等の鐵山あり、これ等の内兼二浦鐵山を除く外は主として褐鐵鑛を産し、赤鐵鑛は少い。將來有望なるは各地に豊富に埋藏せらるゝ磁鐵鑛で咸鏡北道茂山に埋藏量四億越以上のものあり優に南滿洲鞍山鑛床に匹敵する。この外咸鏡南道端川、忠清北道忠州、慶尙南道金海、江原道襄陽等の磁鐵鑛床も豊富なる埋藏量を有して居る。石炭中の褐炭は、吉州、明川、鏡城、會寧、慶源、慶興の各炭田最も賦存量多く、其外、安州、鳳山、咸興炭田あり、近來之を低溫乾留して液體燃料製造の新工業が勃興して居る。無煙炭は全埋藏量十三億五千萬越と稱せられ、平壤炭田を始め、文川、開慶、和順等の炭田及平安南道北部炭田の一部にて稼行し、將來有望視さるゝものに三陟、寧越、高原等の各炭田がある。黑鉛には鱗狀及土狀の二種あり、鱗狀黑鉛は平安北道・

咸鏡北道を、土狀黒鉛は慶尙北道・忠清北道・咸鏡南道を主要産地とし、品質孰も良好である。鑛山の主なるものは鱗狀黒鉛に在りては江界鑛山・新溪里鑛山・伏木鑛山・城干鑛山・城津黒鉛鑛山等にして、土狀黒鉛に在りては山野月明鑛山・小宮黒鉛鑛山・永興鑛山・長興鑛山・价川第一鑛山等がある。

亞鉛鑛床は平安北道寧邊郡蘇民洞・咸鏡南道端川郡檢徳に於ける鑛床は其の主要なるものにして現在稼行しつゝある鑛山は、前記蘇民洞の蘇民鑛山・黃海道載寧郡の銀積鑛山・平安南道成川郡の成川鑛山等にして何れも三成鑛業株式會社の經營に係るが、將來頗る有望なる鑛物である。

タングステン鑛は軍事上必要なるものにて内地に無き貴重鑛物なるが現在稼行中の鑛山は大華・百年・箕洲・谷山・九來里等にして、既知鑛床中江原道金剛山附近・忠清北道忠州郡・黃海道谷山郡及忠清南道青陽郡に存するものは其の主要なるものに屬し、其他諸所に發見せられたるものが少くない。

水鉛鑛も亦軍需鑛物として必要なものであるが近來製鋼事業の盛んなるに伴れ、採掘者多く、其主なるものは全羅北道の長水鑛山・江原道の金剛鑛山・黃海道の天惠鑛山等にして、其産額の殆んど全部を内地へ移出して居る。

鑛産物の分布 右の諸鑛物の外にも各種の鑛物を埋藏して居るが、最近各道に於ける主要鑛産物の

種類を示すと左の通りである。

- 京 畿 道 金・銀・銅・鉛・タンゲステン・砂金
- 忠 清 北 道 金・銀・銅・鉛・タンゲステン・水鉛・黒鉛・蠟石・砂金
- 忠 清 南 道 金・銀・銅・鉛・砂金
- 全 羅 北 道 金・銀・銅・鉛・水鉛・砂金
- 全 羅 南 道 金・銀・銅・鉛・石炭・蠟石・明礬石・珪砂・砂金
- 慶 尙 北 道 金・銀・銅・鉛・タンゲステン・水鉛・砒・黒鉛・石炭・砂金
- 慶 尙 南 道 金・銀・銅・鉛・硫化鐵・水鉛・高嶺土・珪砂・砂金
- 黃 海 道 金・銀・銅・鉛・タンゲステン・水鉛・亜鉛・鐵・石炭・高嶺土・珪砂・砂金
- 平 安 南 道 金・銀・銅・鉛・安質母尼・亜鉛・鐵・石炭・高嶺土・雲母・砂金
- 平 安 北 道 金・銀・銅・鉛・亜鉛・タンゲステン・黒鉛・石炭・雲母・砂金
- 江 原 道 金・銀・銅・鉛・硫化鐵・タンゲステン・水鉛・石炭・石綿・高嶺土・砂金
- 咸 鏡 南 道 金・銀・銅・鉛・鐵・黒鉛・石炭・雲母・砂金
- 咸 鏡 北 道 金・銀・銅・鉛・黒鉛・石炭・雲母・高嶺土・砂金

鑛種別鑛區數及面積 (昭和九年)

鑛種	鑛區數	面積 (千坪)	鑛種	鑛區數	面積 (千坪)
鐵	二、三五四	一、五五四、七〇五	鑛	一	九〇
金	一五	四、六〇三	燐	二四	三、八七四
銅	六	一、七四七	黑	三九	四六八、八七五
水銀	三	四、四	石	一六	六、〇六五
亞鉛	一五	三、六五七	雲	六	二、七一九
鐵	八	四、三三七	石	五	九、四三七
硫化鐵	二	二、九四	高嶺	三	三、五五七
滿侖	一六	九、一八二	砂	八	三、一九〇
タンゲステン	二	四、七七一	石	三	五、一〇八
水鉛	一	一、二四	石	四	五、三三
タンゲステン水鉛	一	五、三三〇	品	四	五、三三
金銀銅鉛亞鉛其他	一	九六	重	三	九三、八七八
砒	一	九六	砂	三	九、九六〇
鑛業	九三		一切	三	九、九六〇

合 計 四、三五四 × 二、七九・九〇〇 = 二、八二一、〇七六

備考 本表には雲山特許鑛區の一切鑛物一件は鑛區數のみを計上せり、×印は河床の延長に依り許可したるものにして、單位は里町間とす。次表亦同じ。

鑛種別稼行鑛區數及面積 (昭和九年)

鑛種	鑛區數	面積 (千坪)	鑛種	鑛區數	面積 (千坪)
金	一、五六七	一、〇三六、九五八	水	九	二、七五〇
銅	二	八七四	鉛	四	三、五〇一
鉛	一	一	タンクステン水鉛鑛	三	一、二五二
水	一	八五	砒	三	一、一五三
銀	一	八五	鑛	三	一、一五三
亞鉛	一四	五、九八二	金銀銅鉛亞鉛其他鑛	一五六	九八、一六七
安質母尼鑛	一	一	鉛	四	一一、五七四
鐵	七	一六、八三三	黒	一五	七三、八八一
鐵	七	一六、八三三	石	七	三、八四二
硫化鐵鑛	七	三、三六六	雲母	七	三、八四二
石	二	一、八二二	炭	七	三、八四二
高嶺土	三	四、八五九	母	七	三、八四二
タンクステン鑛	三	一三、四四五	石	二	一、八二二

蠟	石	一、八八四	重	三、一〇一
螢	石	五、四六六	砂	一七、〇八五
明礬	石	一、二七七	一切	九、九六一
矽砂	砂	一、六三三	合計	二、二二二

鑛 產 額 (昭和九年)

種 別	數 量	價 額	種 別	數 量	價 額
金 銀	一〇、七〇、五四 <small>瓦</small>	三三、二四、九一四 <small>円</small>	銑 鐵	一七五、五〇 <small>ワ</small>	七、七三、〇八八 <small>円</small>
金	二七、九六 <small>瓦</small>	二、五二、四八一 <small>円</small>	銅 鐵	五九、六六 <small>ワ</small>	四、七八、八六〇 <small>円</small>
銀	三、二八七、八一 <small>瓦</small>	一、四八八、〇七九 <small>円</small>	硫 化 鐵	四〇、〇四 <small>ワ</small>	二四三、〇七七 <small>円</small>
銅	一、四三三、三六 <small>瓦</small>	九三三、〇三三 <small>円</small>	タン Gusten 鐵	三六八、四三〇 <small>ワ</small>	七四、二一〇 <small>円</small>
鉛	一、八〇五、七〇 <small>瓦</small>	三〇六、三三九 <small>円</small>	水 鉛	一〇三、五三 <small>ワ</small>	二六三、四五〇 <small>円</small>
亞鉛	二、八八三 <small>瓦</small>	八五、四〇〇 <small>円</small>	安質母尼	—	—
水銀	—	—	砂 金	一、七七、〇六一 <small>瓦</small>	五、三三、三四四 <small>円</small>
鐵 鑛	一七六、〇〇八 <small>瓦</small>	八五、八一〇 <small>円</small>	亞 砒 酸	三三、九七一 <small>瓦</small>	三、〇〇九 <small>円</small>

九五

鑛業

雲母	一〇三、九五〇 <small>註</small>	三七、八九一	矽	七三、二七九 <small>註</small>	一一〇、六五五
黑鉛鱗狀	三、四三三	一三一、三五四	明礬	五、三三〇	二五九、九一〇
土狀	三八、八六三	四〇三、四四〇	螢石	一三、〇九九	一三三、〇七五
石炭有煙	七〇六、二七七	三、七六三、八二〇	石綿	一四	二〇八
無煙	九八三、七〇〇	六、一七六、七四六	石晶	九、六二四	四〇、二一八
高嶺土	三三、四三二	一四七、三二一	重晶	五、九三五	八〇、六二六
マグネサイト	三、一六六	三、六四三	合計	六九、一七三、八四〇	

鑛業出願

昭和九年

明治四十三年

總數	出願受理件數	鑛區數	稼行區數	出願受理件數	鑛區數	稼行區數
砂金	八八六三	三五〇五	一九四五	七八九	四六三	一一一
銀鑛	五七三一	二、三九四	一、五六七	四八九	二四二	四二
金鑛	二四〇	二四六	一三二	二七四	一七八	七九

金・銀・銅・鉛・亜鉛其他鑛

二、八九一

八六五

一五六

二六

四三

—

金 産 額

總 數

金

砂

金

金銀鑛

汰

鑛

明治四十三年

五、〇七六、一八九

三、七四四、九五七

八二、六〇九

二、三六二、九九二

二、四六六、三二

昭和九年

四、〇四九、七三九

三、三二四、九二四

五、三三三、三四四

二、五二一、四八一

(金銀鑛に含む)

備考 明治四十三年の金は鑛業権者の報告を其儘集計したるため銀を含む。

鑛 産 額 比 較 (昭和九年)

(主要なるものみ掲出す)

朝 鮮

内 地

臺 灣

樺 太

關東州及鐵道附屬地

南洋群島

總生産價額(円)

六、一七三、八四〇

四三、三〇七、八二一  
八、九四七、六七九  
二、九一六、二六五  
七、八四四、四九九  
一、七七八、七五〇

主要鑛産物

金

數量(五)

一〇、七一〇、五六一

一五、〇九四、〇九四

一、〇三三、九二八

價額(円)

三三、二四、九二四

四四、九〇六、七〇八

三、一六九、三九三

鑛 業

九七

備考	鋼鐵		銑鐵		鐵鑛		石炭		砂金	
	金額(円)	數量(噸)	金額(円)	數量(噸)	金額(円)	數量(噸)	金額(円)	數量(噸)	金額(円)	數量(五)
朝鮮の鐵鑛産額は五七〇、四六四噸なるも右表の數字は銑鐵原料に供したるものを含まず。	四、一七八、八六〇	五九、六九八	七、七三三、〇八八	一七五、五〇二	八七九、八二〇	一七六、〇〇八	九、九四〇、五五六	一七六、〇〇八	五、三三三、三四四	一、七二七、〇六一
	一三、三四〇、三〇六	一八六、〇四六	一五、〇三九、九六二	三五三、一五〇	—	—	二四五、五五一	—	一三四、八九五	五三、四九一
内地の鐵の生産額は鑛山及砂鐵の製鍊所並に主として内地産鑛を處理するものゝ産額にして八幡製鐵所、再製銑製鐵所及他産銑を原料とする製鋼所の生産額を包含せず。	—	—	—	—	—	—	八、四七〇、三七五	—	九九、〇六八	四三、二六九
	—	—	—	—	—	—	九、二一九、一六五	—	—	—
又銑鐵産額中には本表鋼の原料に供せられたるものを含まず。	—	—	—	—	—	—	九、二一九、一六五	—	—	—
	—	—	—	—	—	—	七、七四〇、五九九	—	—	—

内地の鐵の生産額は鑛山及砂鐵の製鍊所並に主として内地産鑛を處理するものゝ産額にして八幡製鐵所、再製銑製鐵所及他産銑を原料とする製鋼所の生産額を包含せず。

又銑鐵産額中には本表鋼の原料に供せられたるものを含まず。

## 一一一 工業

工業の勃興 朝鮮の工業は往時相當の發達を遂げたることありしも、世政の結果漸次衰退し、李朝の末期に在りては纔に機業・窯業・製紙業・皮革業・醸造業・金屬工業等の家内工業等小規模工場工業に其の片影を留むるに過ぎず、日常必需品の多くは之を輸入に俟つ状態なりしが、始政以來銳意之が改善と發達に努めたる結果、在來工業品の品質は漸く改善せられ、産額も亦増加し來れると同時に、朝鮮人の工業に關する知識開發せられ、工場經營を試みんとする者増加し、且内地資本家の朝鮮進出を爲す者多きを加へ、紡織・製絲・製鐵・精糖・パルプ・硬質陶器・セメント・製粉・製油・硫安・硬化油等各種の大工場設立せらるゝに至り、殊に最近滿洲國の建國、日滿新交通路の開通以來、滿蒙に對する經濟進出上朝鮮の地位有利なるを認め、或は朝鮮に於ける各種工業資源の開發に着目し各種事業を目論むもの益々増加して居る。昭和九年に於ける工産額は四億三千八百四十萬圓に達し、此の内一億六千七百十三萬圓は家内工業又は副業の所産である。朝鮮は地理的に有利なる位置に在る上に各種の原料及動力資源も豊富であり、勞力過剩し勞銀低廉なるを以て、製造工業の經營は將來頗る有望である。

主要工産物 家内工業としては、機業に木綿織物、麻織物、絹織物あり、陶磁器、朝鮮紙、酒類(藥酒、酒、燒酎)、金屬品(鐵鑪、製食器、金具、火鉢、便器、鋸、鋸、農具、指輪、斧、鋸)、莞草蓆及莞草スリツパ、竹細工、硝子珠、繩込等は主要

なるものである。工場工業としては、製絲、綿紡織、綿織物、絹織物、人絹織物、靴下、繰綿、金屬製鍊、金屬製品並機械器具、陶磁器、硝子、セメント、煉瓦、石炭液化、石鹼、油脂、硬化油、護謨製品、製紙、硫酸アンモニア、皮革、醸造品(日本酒、麥酒、燒酎、醬油、味噌)、製粉、澱粉、精糖、精米等がある。

種類別工場数

	工場数		従業者数		生産品價額		加工及修理料
	昭和九年	明治四十四年	昭和九年	明治四十四年	昭和九年	明治四十四年	
紡織工業	三三六	二五二	一三、八〇九	一四、五七五	四八〇、二八五、五八五	一一、一五、六一八	一四一、六三一
金屬工業	一三一	二九一	二六、〇二六	四六、六三九	四六、二四五、六〇〇	一三四、一四〇	一、九一九、五〇一
機械器具工業	二九一	三二二	五、八四二	七、六一一	五、〇五三、五〇五	九、九六九、五三九	—
窯業	三二二	九〇一	七、六一一	二九、一六九	九、九六九、五三九	六八、二三三、四八二	—
化學工業及製材工業	九〇一	二〇六	二九、一六九	五、一八一	六八、二三三、四八二	一一、五六六、〇四三	六七、九〇九
木製品工業	二〇六		五、一八一		一一、五六六、〇四三		

印刷及製本業	二五八	六五九四	一〇、六九六、三四	五、三〇三
食品工業	二、二六八	四七、二九八	二五九、二六一、四七三	八、五八〇、七四七
瓦斯及電氣業	五二	一、三三八	二二、八三二、一六五	—
其の他の工業	二六八	五、二二二	六、七四七、七二〇	一六六、三八六

工産物價額 (單位円)

總額	紡織工業	金屬工業	機械器具工業	窯業	化學工業	製材及木製品工業	印刷及製本業	食品工業	瓦斯及電氣業	其他の工業
一九三九、六五五	—	—	—	三〇、六三三	—	—	—	—	一、三七一、三三〇	—
昭和九年	四六、四〇一、七六六、五七九、四六六、六〇六、三九四、四三三、三四七、二六九、五九七、七七一、〇六二、三三〇、六三三、三三三、三六六、八六八、四九一、四九一	—	—	—	—	—	—	—	—	—

主要工産物 (昭和九年)

紡織工業	數量	價額	生絲	數量	價額
		一七、三〇三、二五五			二、〇〇七、七九
製絲	數量	價額	紡績	數量	價額
		—			—

工業

綿 絲 九、八元、一六〇<sup>正</sup> 八、九七、四九<sup>四</sup> 一、陶磁器 二、七〇三、一七三<sup>四</sup>

三、織物 三五、三二、七七 七メメント 三六、五八<sup>正</sup> 五、五二五、〇〇〇

綿織物 二〇、七六、三五 化學工業 一、藥劑 九一、一五〇、九一七

絹織物 五、〇〇、八〇九 一、藥劑 四、一五二、六〇三

麻織物及 七、三六、九九 賣藥及賣 二、八三一、八五〇

麻交織物 三、四六、七五一 二、植物油脂 四、三九一、〇九〇

四、莫大小製品 二、九一六、五六 三、動物油脂 六、四九〇、〇三〇

靴 下 九、六〇、九三一 鱈油 六四、二五、六三<sup>正</sup> 六、〇〇四、四六三<sup>正</sup>

金屬工業 二、五三、七四 四、加工油 五、三六三、一八九

一、鑄物 二、五五、七三三 五、護謨製品 八、一九九、七五八

銑鐵鑄物 二、〇五六、一七 靴及其他の 二五、七三〇、一八<sup>正</sup> 八、〇八九、〇四三

鋼、釜、鐵瓶 九、四八、四三三 六、製物 一六、三三、五七<sup>正</sup> 五、五四九、〇九一

及其他 三、九六、六八 包裝用紙 一四、九五<sup>正</sup> 二、六〇五、五一五

機械器具工業 二、六四〇、七六 朝鮮紙 二、五〇九、五八一

一、車輛 二、四七三、一七八 七、肥料 四一、五五八、〇五一

鐵道車輛 一二、四七三、一七八

工業	植物質肥料	—	二,〇八三,四三八 <sup>四</sup>	食糧品工業	—	一三七,六〇〇,二七八 <sup>四</sup>
	動物質肥料	—	九,五九九,四六四	一、酒類	—	五五,二四九,四五三
	魚絞精	一二四,五四六 <sup>六</sup>	九,四四〇,六二八	清酒	一八三,九二一 <sup>煩</sup>	五,五六七,八二二
	鐵物質肥料	—	二九,六四五,九七九	燒酒	七六八,八三三 <sup>〃</sup>	一七,六二五,六三二
	磷酸アムモニヤ	—	五,〇六二,七九三	藥酒	二四五,一四三 <sup>〃</sup>	五,七三七,八一
	硫酸アムモニヤ	三〇七,四四七 <sup>〃</sup>	二四,二七三,五五二	濁酒	二,四七六,三九四 <sup>〃</sup>	二四,三六九,三三
	八、其他の化學製品	—	八,五五八,八二一	二、醬油及溜噌	二,八五〇,四九 <sup>〃</sup>	一九,六六六,四一八
	コークス	二四七,六五五 <sup>〃</sup>	二,八七一,八八八	三、味噌	六三,〇三九,四六三 <sup>証</sup>	五,四六八,九三四
	煉炭	一九九,三九九 <sup>〃</sup>	二,五五〇,五八〇	四、製粉	—	八,〇三六,二三九
	木炭	九三,〇七〇 <sup>〃</sup>	二,五二〇,九九五	小麥	四三,六五八,八八九 <sup>〃</sup>	六,四四八,三三〇
	木製品工業	—	七,七七一,〇九八	五、澱粉	—	二,三五九,八二八
	一、木製品	—	七,七七一,〇九八	六、砂糖	—	六,一九四,八七五
	家具	—	三,六七八,八三三	精製糖	三,三四九,七〇〇 <sup>〃</sup>	六,三三八,八〇八
	印刷及製本業	—	一一,三三七,六三三	七、菓子	—	七,八五〇,二七三
	一、印刷	—	一一,〇九八,二三八	八、水産品	—	一〇,五二四,二四六

工業

食

鹽 六七、〇九九、九六六証

一、九二四、七二三四

繩

六〇、一〇三、三五三枝

五、四九五、一八〇四

海

苔

二、八四七、一八五

叭

六〇、一〇三、三五三枝

六、六五六、五六六

九、麵子

五、九七〇、三三四

二、皮革製品

二、五二二、七二七

十、精穀製粉

二、九八五、二二六

三、裁縫品

九、八〇九、六八三

瓦斯及電氣業

三、八三三、一六五

洋服及外套類

五、八四三、三七九

電

氣 一、五三七、八三三、四三八キロワット時

四、煙草

四一、七九〇、七四三

其他の工業

六、八四三、六四九

卷煙草

二二、五八三、三三〇

一、葉製品

一四、七九一、五五五

刻煙草

一八、二〇七、四二五

工場數比較 (昭和九年末)

朝鮮

内地

臺灣

樺太

關東州及鐵道附屬地

南洋群島

工場總動力有する工場數

五、三六

七、九〇〇

六、七四九

一、六

一、二八三

四

原力機馬臺動力

一

七、六四、九七五

四〇九、九〇三

一、五、六一

一

五、九三三

職工	總數		生產品價額(円)	職工一人に付生産額(円)	備考
	男	女			
總	一三,三六	一,九〇,〇九一	四〇,六五,五七七	四,三九七	内地は昭和八年末現在、關東州の職工數は昭和六年六月一日労働統計實地調査
男	四,四四	九七,六五九	一五,四四四	四,二七・九	
女	六,九七	九三,四三二	二五,二一三	三,一一一	
總	六,八三六	四九,九四一	三二,〇一五	一〇,六五・八	
男	五,五三〇	四三,九四九	二二,〇八四	三,九〇・五	
女	一,三〇六	三,九四二	一〇,九三一	二,七五・〇	

工 産 額 (昭和九年)

總 生 産 額	朝 鮮	内 地	臺 灣	樺 太	關東州及 鐵道附屬地	南 洋 群 島
四六,四〇七,三六七	四六,四〇七,三六七	二五,四三,三六	七,〇五,五一	一五,三三,八四	一四,〇六,五九	

備考 内地の分は昭和八年

## 一三 水産

概説 朝鮮は本土及び島嶼を合せ、海岸線の延長一萬七千五百八十軒に達し地勢、氣候、潮流等の關係上水産物頗る豊饒にして、有利の漁場が多く、併合以來當局に於て銳意斯業の發達を圖りこれが保護取締を周密にし、且つ年々相當の經費を投じて各種の調査及試験を行ひ又斯業に關する傳習、講習等を爲し、その他有望なる事業に對しては金品を補助貸與してその發達を助長し、漁港及避難港の修築の爲め年々工費の一部を補助し、水産組合及び漁業組合の發達を圖り、製品の改良、漁村の振興を期し、輸移出水産製品の検査を行ひ、その改良統一を圖る等各種の施設を講じたる結果、漸次發達の域に進み、明治四十四年には水産業者戸數八萬七千八百六十九戸であつたものが、昭和九年末には十五萬五千四百六十一戸に増加した。

主・要・水・産・物 明治四十四年の水産物生産高は九百四十一萬八千圓に過ぎなかつたが、水産業の發達に伴つて其産額を増加し、昭和九年には實に一億六百十五萬六千圓の巨額に達したのである。漁獲高中一箇年百萬圓以上に達するものは、さば、まいわし、ぐち、めんたい、かたくちいわしにしん、たち、えび、たい、たら、さわら、かれい、あじ、にべ等であつて水産製造物中百萬圓以上のものには、いわし搾粕、いわし油、素乾めんたい、煮乾いわし、乾のり、鹽藏ぐち、鹽乾

ぐち等がある。沿岸地方には内地人の漁村も多くまた季節的に内地漁夫の朝鮮沿海に通漁するものも尠くない。

### 水産業者戸口

区分	明治四十四年末		昭和九年末	
	戸數	人口	戸數	人口
總數	四、三三九	二七五、〇二六	一、五二、一六一	三三九、〇八三
漁撈	八三、五三〇	一八二、三三九	一、二四、五九〇	二三四、七七一
養殖	一四、二三五	一一、〇四三	三〇、三一一	七六、六六三
製造	一四、三三九	三三、八四六	一〇、六六〇	二七、六四九
水産物 販賣業	一五、八元	四六、八二八	—	—
外国人	—	—	五	—
内地人	—	—	一、五一、一六一	—
朝鮮人	—	—	—	—

水産

水産

水産業者用船舶

漁船及運搬船

昭和九年末  
 漁船 運搬船

總

數

總

數

大正元年末

漁業及水産物製造  
 養殖用 運搬販賣用

動力を有せざるもの  
 動力を有するもの

不登簿船

登簿船

汽船 發動機船

朝鮮型 内地型 其他

四三、一五六 四、八六〇

一九、七二五 二、〇四九

二、五九六 一、九五五

四二八 一七七

一〇四 六

一、三三三 六一

一

一三、二八四 一、五四六

九、六四四 一、一五三

三、六〇三 二三八

登簿船 一五二

石油發動機 五

汽船 一

其他 一

水産物生産高

明治四十四年	總數	九,四二八,〇七九	漁獲高	六七,七三三,一六〇	養殖生産高	二六,五四,九一九	水産製造高	二六,五四,九一九
昭和九年		一〇六,一五六,五七八		五七,七七七,九〇一	二,八四五,六六〇	四五,五三三,〇一七		

從業船及漁獲高

昭和九年

大正元年

從業船	總數	七六,三五三	內地人	五,六五三	朝鮮人	一〇,五〇二
乘組人員		四七八,六七八		二二,四八八		一六〇,八〇九
漁獲高		一三,九三,四八八,五四七		—		—
價額(円)		五七,七七七,九〇一		三,三六六,三三八		四,八一九,八五三

主要漁獲高 (昭和九年)

あ	數量	價額	あ	數量	價額
な	五,〇一〇,八八四	六三,三五五	じ	一五,七八,四八一	一,九三,一八〇六
水産					

え	い	四、四三九、五一	五三三、六六	に	に	七、四〇五、六一九	一、〇七八、一九四
え	び	三六、六四〇、六〇〇	一、八八〇、五〇九	に	し	四九、五三九、一五八	二、五四八、六四八
か	かたくちいわし	四七、八七七、二四一	四、一八三、七三三	は	も	四、三四〇、一三二	六三七、三八一
か	れ	一八、六六四、五八五	一、二六三、九六四	ひ	め	三、一四〇、三五八	六八二、五八五
ぐ	ち	五九、六三三、七七〇	三、六三二、一五四	ぶ	り	三、三四一、四九三	六六六、六〇〇
さ	ば	八八、二三四、八〇六	五、七二六、八九一	ふ	か	六、六五五、七九三	五三四、三四六
さ	わ	五、〇九三、九五一	一、二五五、三三八	ふ	り	一、五五一、九三三	五二七、四九六
た	い	二、四五四、五〇九	一、二九八、〇六二	ぼ	ら	三、三五七、〇七九	五五六、一〇六
た	ちのうお	二六、〇八八、三〇五	一、九三二、八〇六	ま	し	五八〇、三二一、九六五	九、一七〇、四九六
た	ら	二二、六〇〇、三八〇	一、五四〇、九六六	め	い	一八七、四七〇、四三〇	四、〇四九、八六四
な	ま	三、四六四、三三八	五〇四、二四七	わ	か	三〇、一四九、一六七	七三四、九七八

備考 本表は漁獲高五十萬圓以上のものを掲上す。

水産製造物 (昭和九年)

種別	數量	價額	種別	數量	價額
總數	—	四五、五三、〇七	さば	九、六八、五八	九六、一五〇
食用品	—	二六、一六、四四六	にしん	三、七九、七二五	三七三、〇一八
節類	一四、五九	四、七七六	たち	四、六六、〇七三	五三九、九三九
素乾品	四八、三八七、八九一	五、二九九、〇〇九	其他	一一、四七、五二六	一、四一、八六三
めんたい	四〇、六六八、八六〇	三、五五四、八五八	罐詰品	—	二、〇七五、六〇三
其他	七、六九、〇三一	一、七四四、一五一	櫻干品	四七、六六一	四三三、一〇〇
鹽乾品	八、〇九三、〇九二	一、九七六、五六三	海藻	四七四、四一三、六三五枚	三、三四、四一四
其他	四、一九六、七三七	一、〇〇三、一九七	乾のり	四三、二八六、一一枚	二、四七六、八〇六
其他	三、八九六、三五五	九七三、三六五	其他	三三、二六、五〇五枚	八五七、六〇八
煮乾品	一七、五八九、五〇七	五、七〇〇、七三九	瓶詰品	八、一六五、八〇一瓶	四三、三四五
いわし	一一、五九二、〇五〇	三、五九九、八二九	鹽辛品	一一、二六八、八六二	一、九五九、〇八四
其他	五、九九七、四五七	二、一八〇、九〇〇	めんたい卵	三、九三六、三四三	八五三、一八五
鹽藏品	三五、五〇三、五九八	四、三七五、八六〇	其他	八、三三三、五九	一、一〇六、八九九
其他	五、七三〇、七三六	一、〇六九、五一一	冷凍品	六九五、二四〇	一〇五、三八七

水産

水産

一二一

其の他 二、七六三、七九九 八五五、五七八 魚 油 六七、五〇〇、二九三立 七、三五、四八〇

蒲 銚 三、三四一、五九〇 六四、八三二 いわし 油 六四、六三三、〇三三 六、八〇〇、四六四

其の他 五三三、二九九 一九〇、七五七 其の他 二、八七、二六八 四五五、〇一六

非食用品 一九、三七〇、五六一 工 藝 品 一 五二、二三八

壓搾肥料 二五、四七七、〇七九 九、八四、二六六 藥 用 品 一 三四、一七七

いわし 搾粕 二三、三四六、八四四 九、七六、三八八 海 藻 五、一八三、三九八 一、二九、七七七

其の他 二、一三〇、二四五 二七、八九八 其の他 一、五二、七二一 一八、六三〇

乾製其他の肥料 三四、三四八、四四五 一、〇四六、二五三

水産養殖

總 數

養殖個所 養殖面積 數 量 價 額

大正七年 六五 二四、七二六、〇四六平方米 六四六、〇〇〇尾 一七四、四四四尾 一〇四、三五六円

昭和九年		大正元年	
昭	一、四六〇	三、九七五、七〇肆	二、八四五、六六〇
和			
九			
年			
總	一、四六〇	三、九七五、七〇肆	二、八四五、六六〇
數	二、五、三二、四〇三	(四四二、二八六、二〇枚)	二、四七六、八〇六
の	五八五	(一、三一九、九三八)	三、一、三六九
り	二九六	二、五五五、九二肆	九、〇〇〇
か	二	二五、五〇〇	六四、三五一
な	二	二六〇、六八八	六四、三五一
ぎ	二	二六〇、六八八	六四、三五一
き	二	二六〇、六八八	六四、三五一
う	二	二六〇、六八八	六四、三五一
な	二	二六〇、六八八	六四、三五一
ぎ	二	二六〇、六八八	六四、三五一
き	二	二六〇、六八八	六四、三五一
の	二	二六〇、六八八	六四、三五一
他	二	二六〇、六八八	六四、三五一
其	二	二六〇、六八八	六四、三五一
の	二	二六〇、六八八	六四、三五一
他	二	二六〇、六八八	六四、三五一

魚市場

市場數

昭和九年

二八

大正元年

二六

昭和九年		大正元年	
總	三八、三〇六、七〇四	一三、二四九、〇八八	二、一九〇、六六六
賣			
上			
高			
朝鮮	三四、九七八、一三六	一二、四二六、九五五	二、〇五一、六九一
内			
消費			
高			
輸	二、六八四、三三七	六六一、四一〇	一〇六、六一四
出			
高			
移	六四四、三三一	一七〇、七三三	三、三六〇
出			
高			
水	一〇八、六六四		
産			

捕鯨

年次	捕鯨船數	捕鯨高		捕鯨平均高	一頭平均價額
		頭數	價額		
明治四十三年	一四	三三六頭	二六八、六六二圓	二四〇頭	八〇〇圓
昭和九年	二六	一一七	三五五、六六一	五〇	三、〇三元

水產業者比較 (昭和九年末)

業種	朝鮮	內地	臺灣	樺太	關東州及鐵道附屬地	南洋群島
水產業者戶數	一五、四二	—	—	五、八九二	八、九三	一、二六
漁業	二四、五九〇	—	—	五、八九二	八、九三	—
養殖業	三〇、三二一	—	—	—	—	—
水產物製造業	一〇、六六〇	—	—	—	—	—
水產物販賣業	—	—	—	—	—	—
水產業者人口	三三九、〇八三	一、五三二、九六六	二八、三七二	二五、八七	三三、三六	二、三六

漁業	養殖業	水産物製造業	水産業者戸數	水産業者人口	水産業者人口に付	備考
二四、七七一	七六、六三三	二七、六四九	三、七六	一六・五	二一・五〇	内地は農林省統計による、尙内地の總人口に對する割合算出に當り總人口は昭和九年末現在の人口による。
一、二〇三、三四六	一五二、〇〇七	二六七、五三三	—	—	—	
八六、九九九	二六、九一九	四、四六三	—	三・七九	八二・四三	
三五、八〇七	—	—	—	九六・五六	—	
三三、三三八	—	—	—	三五・一三	一五・五六	
—	—	—	—	五七・三	二四・六六	

### 漁獲物比較 (昭和九年)

總價額(円)	朝鮮	内地	臺灣	樺太	關東州及鐵道附屬地	南洋群島
數量(疋)	五七、七七七、九〇一	一七三、一七三、二三三	一一、四五三、三六一	六、八二二、七三三	五、〇六、四四二	六、四四、八〇三
價額(円)	三、四一九九、二八八	三、七二七、三三、八二〇	—	四、五三、三〇一	三、七九八、五八〇	九、八四五、九八二
數量(疋)	四九、九〇、七三五	二八、一四三、九三三	一〇、六九九、二七五	五、八二二、八七八	四、二八二、五二五	二、四九九、一八一
價額(円)	三、七五九、七四〇	一、八〇、〇三三、〇六六	五、八、一八三	三、三〇三、七九七	—	—
價額(円)	二、〇四一、五六一	一〇、〇九四、〇三一	五、二、五〇七	三、三、一四八	—	—
水産						一三五、二六七

水 産

其他 數量(担) 四,一三八,三〇五  
 動物産 價額(円) 三,五八,一六五 二五,六二七,三九七 六五五,八三一 五七,一九四〇 三三三,四五三 四〇,三五五

海藻 數量(担) 八〇,八〇三,三六一 六五七,〇四三,三四四 三三三,九三三,七三三 六四五 一,六五〇  
 類 價額(円) 二,三三七,四三〇 九,二八二,七七三 五四,七二八 四〇三,七六九 四七七

備考 内地の漁獲高は沿岸漁獲物のみを掲上せり。内地の沖合遠洋漁業漁獲高は總數七二六、九一九、四四四担、六九、四二八、二六一圓(農林省統計年報による)

水産製造物比較 (昭和九年)

	朝鮮	内地	臺灣	樺太	關東州及 鐵道附屬地	南洋群島
總數	數量(担) 一	數量(担) 一	數量(担) 一	數量(担) 一	數量(担) 三,七六三,五六三	數量(担) 一
	價額(円) 四五,五三三,〇一七 一六七,〇四七,六四一	價額(円) 二九〇,九三三 一一,三六三,〇三〇	價額(円) 一,〇三三,二〇四	價額(円) 一,八〇,八三八	價額(円) 一,〇二二,二〇四	價額(円) 一,八〇,八三八
節類	數量(担) 一四,五一九 二二,三九七,五六六 一,〇三七,八八三	數量(担) 四,七七六 一五,八三三,八五九 五四六,六六五	數量(担) 一四,二八七,八八一 一三二,〇八〇,〇五六 六〇九,四八三 一三,六三八,〇六三	數量(担) 四八,二八七,八八一 一三二,〇八〇,〇五六 六〇九,四八三 一三,六三八,〇六三	數量(担) 五,二九九,〇〇九 二二,三五〇,三九三 四〇七,二二四 二,七七五,九八二	數量(担) 四八,二八七,八八一 一三二,〇八〇,〇五六 六〇九,四八三 一三,六三八,〇六三
素乾品	價額(円) 五,二九九,〇〇九 二二,三五〇,三九三 四〇七,二二四 二,七七五,九八二	價額(円) 四八,二八七,八八一 一三二,〇八〇,〇五六 六〇九,四八三 一三,六三八,〇六三				

備考	鹽乾品		煮乾品		鹽藏品		肥料		魚油		その他		
	數量(疋)	價額(円)	數量(疋)	價額(円)	數量(疋)	價額(円)	數量(疋)	價額(円)	數量(疋)	價額(円)	數量(疋)	價額(円)	
内地の數字は農林省統計表による。	八、〇九三、〇九二	五、六、四九、九四一	一七、五八九、五七	六、五、九六〇、五八五	三、五、五〇三、五八	四、三、七五、八六〇	一四、八二五、五四四	一〇、八八〇、三七九	六、七、五〇〇、三九三	一、五、六一、七二	一、八、六三〇	五、九、五二、三五	
	八、八二〇、八一	八、八二〇、八一	一九、七八一、五〇九	六、四、〇三七、九四六	九、七、七〇四、一七七	四、三、四〇、一七	二、八、九一三、〇三〇	八、三、六三八、八五五	八、七、〇二、五一	—	—	—	
	三、二七、四七	三、二七、四七	六、三、二八六	六、三、二八六	七、三、五八七、八一	七、三、五八七、八一	八、一、三九	二、二、八八七	一、二、六三三	—	—	—	
	四、四、九、九九六	四、四、九、九九六	一、三、三、三〇	一、三、三、三〇	九、九、九九、九六三	九、九、九九、九六三	七、一、八五、五三七	七、九、八、〇六五	七、九、八、〇六五	—	—	—	
	三、四、三〇、三七八	三、四、三〇、三七八	—	—	九、四、二、四四	九、四、二、四四	—	—	—	—	—	—	
	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—



用必需品の賣買は殆んど市場のみに於て行はれ、市場は生活上、及び經濟上極めて大切なる機能を有して居る。昭和九年末現在の調査に據ると、市場規則第一條に規定されてある第一號市場(場屋を設け又は設けざるも區劃したる地域に於て毎日又は定期)が一千四百三十四、この一箇年の賣買取引高二億一千二百七十三萬圓、第二號市場(二十人以上の營業者一場屋に於て主と)が二十、賣買取引高一千二百五十九萬九千圓、第三號市場(委託を受け購買の方法に依り貨物の販賣を行ふ場所)が四十一、賣買取引高一千三百四十六萬一千圓になつて居る。開市日は主要市街に設置されて居る公設市場、魚菜市場は毎日開市さるゝが、在來の普通市場は大抵一・六、二・七、三・八、四・九、五・十と云ふやうに五日目毎に開市され、中には毎日開市又は月三回或は附近市場と交互に定期開市のものあり、藥令市の如きは秋期又は冬期に一箇月乃至二箇月一回開市される。市場は概して交通の便利なる地に設置され、河原、路傍等の空地を利用して居るものも今尙ほ尠ならず、中には墓地の附近などに設けて居るものもあるが、郡廳の所在地に開かれて居る市場の數が甚だ多い。市場の分布は一郡四、五箇所より十箇所内外に及ぶものもあり、市場の大小並に季節に依りて、商人及び購買者の出場數は一定しないが、數百人より數千人の多きに達し、秋の收穫後は市場の最も繁昌する時で、春より夏に掛けては一般に取引閑散の時である。市場の利用地域の範圍は三、四里より七、八里に及ぶ。

商業組織 以上は主として朝鮮商賣の状態を述べたのであるが、各市街地には内地人の商店も多

く、近年百貨店の進出も眼覺ましいものがあり、また支那商人の市街及村落に於ける活躍も著しい。市場の外に、取引所及正米市場もある。商業組織としては會社組織の經營が次第に發達し、最近の會社數は二千三百二社、其公稱資本金七億一千三百八十一萬圓に達し、内地又は外國に本店を有し朝鮮に支店を設くる會社數も百六十九を算して居り、また保險業の發達も見るべきものがある。

會社

昭和九年

明治四十四年末

業種	朝鮮に本店を有する會社		朝鮮に本店を有する會社	
	社數	資本金 千円	社數	資本金 千円
總數	二,三〇三	七三,八一四	一,五三三	三九,七六六
農林業	一七	四八,四〇五	三	一三,四五五
商業	七四	五九,九四六	三六	三,三五二
工業	三六	五三,五八五	一	六,一〇三
鑛業	五七	一五,五三〇	二七	二,九八〇
其他	一五	一五,五五七	一	七五
合計	二,三〇三	七三,八一四	一,五三三	三九,七六六

内地又は外國に本店を有し朝鮮に支店を設くる會社數

内地又は外國に本店を有し朝鮮に支店を設くる會社數

水産業	二六	三、六九七	二、六〇〇	五	一	二〇	五	四
銀行及金融業	一四九	一、二六、五五四	六九、四〇七	一五	一九	一五、七七〇	七、三三六	四
運輸業	二三三	一、〇五、六四四	五三、九九九	二一	一九	一、三三二	七九八	二
瓦斯及電氣業	七〇	八五、三四七	四三、五四三	二	七	一、一四〇	四三八	二
土木請負業	一三五	二一、〇七〇	一五、四二二	八	—	—	—	—
其他	一八	五三、〇〇四	二六、五二二	三	—	—	—	—

會社組織別比較 (昭和九年末) (金額單位千圓) (株式合資會社は株式會社中に含む)

株式會社	總數		朝鮮	內地	臺灣	樺太	關東州及鐵道附屬地	南洋群島
	公稱資本金	拂込資本金又 は拂込出資額						
株式會社	數	數	二、三〇一	八八、五三三	一、〇六一	三九五	一、四六九	三五
公稱資本金	七三、八四四	二、三三八、四七四	四六、四三二	六三、一四四	—	—	—	二九、六七六
拂込資本金	四三、五〇七	一、五、五七、一七三	三五、八三三	四、七五一	—	—	—	一八、五六六
拂込出資額	—	—	—	—	—	—	—	—
株式會社	數	數	一、〇三四	三三、一三〇	四四八	一四四	三七七	一五
公稱資本金	六五、九九五	—	—	—	—	—	—	—
拂込資本金	三七、七五八	—	—	—	—	—	—	—
拂込出資額	—	—	—	—	—	—	—	—

會社名	會社資本		會社出資額	
	數	額	數	額
拂込出資額	一、〇九七	四九、六一	五三	三二七
出資額	三、七九三	—	一六、八五四	三、四八〇
拂込出資額	三、六三三	—	一六、八五四	三、四八〇
出資額	一八一	一五、七三	八二	四
拂込出資額	三〇、二六	—	八、三四九	一、二九三
出資額	—	—	八、三四九	—
拂込出資額	三〇、二六	—	八、三四九	—
出資額	—	—	—	—

備考 内地の株式會社中には株式合資會社並相互會社を含む。

會社營業別比較 (昭和九年末) (單位千圓)

總數	朝鮮		内地		臺灣		樺太		關東州及鐵道附屬地		南洋群島	
	數	額	數	額	數	額	數	額	數	額	數	額
拂込資本	七三、八一四	二、三〇八、四七四	四九、四三	一、〇六二	三九五	—	—	—	—	—	—	—
資本	四三、五〇七	一五、五七六、一七三	四六、四三	三、五八三	四一、七五二	八六、九五	一八、五六八	—	—	—	—	—
拂込資本	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
資本	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—

農業

拂込資本	三、六七八	一三三、二三	一三、八四九	三四五	九、八七〇	三、三三三
資本	四八、四〇五	一六、九五五	二、四五六	—	—	—



市場	運輸業		其他	
	社	資	社	資
市場	數	金	數	金
	二三三	一〇五、六四四	三八〇	一五九、四三二
開市	額	額	額	額
	六、二七五	二、三三七、三六三	二、六九五	一、八二五、六〇〇
賣	農產物	水產物	織物	畜類
	一四七	一七、〇四七	—	—
買	農產物	水產物	織物	畜類
	六	—	—	—
高 (單位圓)	其他	其他	其他	其他
	八	—	—	—
總	數	金	數	金
一	二〇〇〇	—	一	—

市場數	開市		總額		買		高 (單位圓)	
	回	數	額	額	買	買	高	高
明治四十四年	一、〇四	七、八四	五、二二、六四	四、八六、八三	五、二〇、八〇	二、三〇、三三	三、九一〇、三三	六、六
昭和九年	一、四五	二九、六三	三、七〇、六三	三、七二、八七	三、六九、〇五	三、八九、五五	一、六、四三	三、〇
種類別 (昭和九年)	總數	總額	農產物	水產物	織物	畜類	其他	其他
一、四五	二九、六三	三、七〇、六三	一、九、三三	一、九、三三	一、九、三三	一、九、三三	一、九、三三	一、九、三三

第一號市場	總數	總額	農產物	水產物	織物	畜類	其他
一、四四	一〇、七〇	三、七〇、〇〇	一、九、三三	一、九、三三	一、九、三三	一、九、三三	一、九、三三

第二號市場	三〇	七,一七〇	二,五九九,一四三	五,二〇一,〇五七	三,七四,九八八	六九,四四六	一〇九,三五六	二,六四四,四四四
第三號市場	四二	一三,一七七	三,四八六,四九九	二,九〇一,一〇〇	一〇,七三三,五五一	—	—	七,八六八

保 險 (昭和九年)

社 數

支店支部分張所及代理店數

件 數 金 額 } 年末現在契約高

收 入 保 險 料

仕 保 險 金 拂

生命保險	三〇	二,一九七	三三〇,一六三	三五六,四三三,九四一	一三,六九七,三七九	三,五一,七〇三
損害保險	四	三,三三七	二七六,七六〇	六四一,三三三,四八八	四,八二〇,六三二	一,八八五,四五〇
火災保險	四		二六七,九三五	六〇五,〇八〇,八九二	四,〇三〇,八六五	一,二六九,七三三
海上保險	一六		九,五三一	二六,九〇九,二一九	七三七,七一九	七〇九,九三六
運送保險	一五		八四〇	八,三〇七,〇九九	四四,八五七	四,六三三
傷害保險	九		三四六	七三三,三九五	二,五三三	七五三
自動車保險	四		六七	一四四,一八〇	一,九三一	—
硝子保險	一		二	九〇七	六七	—

商 業

信用保險  
森林保險

— 一

— 完

— 一四、七〇

— 一、六二九

— 四三

# 一五 貿易

貿易の躍進 日韓併合前に於ける朝鮮の貿易状態は極めて貧弱なるものであつたが併合後政府の産業上に於ける諸般の施設と民間の企業の勃興とに依り漸次増進の趨勢を示し、殊に歐洲戦亂以來急激の伸張を見るに至り、更に滿洲事變の影響とインフレ景氣の刺戟は、一層貿易の躍進を招致して居る。

## 貿易品價額比較

年次	輸出			輸入		
	輸出	移出	計	輸入	移入	計
明治四十三年	四、五三三 <small>千円</small>	一五、三七八 <small>千円</small>	一九、九二三 <small>千円</small>	一四、四三四 <small>千円</small>	三三、三三八 <small>千円</small>	三九、七八三 <small>千円</small>
昭和十年	六四、九〇三	四八五、八九三	五五〇、七九六	一〇〇、五八九	五五八、八一三	六五九、四〇三

即ち明治四十三年に比較すると、昭和十年に於ては、輸移出に於て二十七倍強、輸移入に於て十六倍強に達して居る。貿易の相手國は時代に依りて異なるも、内地との關係最も密接であつて、

昭和十年に於ては輸移出の八割七分、輸移入の八割五分は實に對内地貿易である。

開港 朝鮮に於ける開港は仁川・釜山・新義州・元山・鎮南浦・群山・木浦・清津・羅津・雄基・城津・龍巖浦の十二港にして、京城・大邱・平壤には税關支署を置いて開港及陸接國境地方より保税運送に依る貨物の輸移出入を取扱ふ。貿易額は釜山港第一位を占め、仁川港之に亞ぎ、此の兩港は實に朝鮮の二大關門にして、釜山港は内地朝鮮間貿易の樞要となり、仁川港は關東州・支那其他歐米諸外國貿易の中心となり、其他輸移出に在りては鎮南浦・群山・新義州・木浦・清津等、輸移入に在りては新義州・鎮南浦・京城・清津・元山・群山・平壤等を主たるものとす。

重要貿易品 朝鮮に於ける輸移出品は農産物が最も重要な部分を占め、鐵産物及水産物も多いが、特にその大宗たる米は總輸移出高の五割強を占め、肥料・鐵これに亞ぎ、この三者は三大輸移出品に屬し、この外銅・大豆・生絲・練綿・鮮乾鹽魚・木材・石炭・金鑛・魚油・牛等は何れも重要な輸移出品である。産業は農業を主とし、工業は尙幼稚なるを以て、輸移入品は多く工業製造品に屬し就中綿織物は實に輸移入貿易品の大宗を爲し、其他絹織物・粟・鐵・機械類・肥料・石炭・練綿及打綿・毛織物・礦油・木材・綿絲・砂糖等之に亞ぎ、輒近企業の發達に伴ひ、各種原料品の輸移入益々増進の趨勢を示して居る。

主要輸移出品價額 (昭和十年)

品名	價額	品名	價額
米	二四四、〇八三	大豆	一七、五七一
鮮乾鹽魚	一二、三九八	海苔	二、一九七
砂糖	三、一四六	牛皮	一、八一二
魚油	五、五一九	綿	一三、四七五
生絲	一四、一八九	鉛	二、二四六
石炭	六、七二三	鍍	六、四八一
鐵鑛	一、二三一	銅	二一、六〇七
鐵	二三、二九一	牛	四、六三一
洋紙	三、七七六	木	八、一二一
肥料	三二、一五二	材	

主要輸移入品價額 (昭和十年)

貿易



國別外國貿易額 (昭和十年)

國別	輸出	輸入	合計
滿洲國	五〇、〇三四 <small>千円</small>	四九、〇一五 <small>千円</small>	九九、〇四九 <small>千円</small>
關東州	八、〇〇九	四、九三三	一二、九四二
中華民國	三、三一一	一六、四四八	一九、七六一
香港	四九九	七	五〇六
英領印度	三四三	五六五	九〇八
英領海峽殖民地	二二四	一、七二四	一、九四八
蘭領印度	二〇〇	三、五一一	三、七一一
比律賓諸島	一一八	二、三七九	二、四九七
露領亞細亞	五八七	五三八	一、一二五
暹羅	一一三	四	一一七
英吉利	一九七	三、三〇九	三、五〇六
佛蘭西	五一	二八一	三三二



移	入	四三九、六三三	七〇三、五六五	一七六、九九一	三七、二一九	一二、六三五
出超(△入超)	△	三三、九一九	七四、三二六	一〇二、四二〇	五九、五二九	三、八二五
輸	移	出	四六五、三六七	二、八〇一、一七四	三〇五、九二九	九六、六七〇
輸	移	入	五一九、一五〇	二九八、二六七	二二五、〇三二	三七、五三八
差引超過(△入超)	△	五三、七八三	△一八四、九九三	九〇、九〇七	五九、一三一	五、四五四

備考 (イ) 内地の内國貿易額は内地と南洋群島、臺灣及朝鮮間の貿易額を掲上す。

(ロ) 合計と内容と符合せざるものあるは四捨五入の關係による。

金融機關 現在朝鮮に於ける金融機關は、中央金融機關として朝鮮銀行券を發行する資本金四千萬圓の朝鮮銀行、不動産金融機關として資本金三千萬圓の朝鮮殖産銀行及東洋拓殖株式會社、貯蓄銀行業務を營むものに資本金五百萬圓の朝鮮貯蓄銀行、商業金融機關として普通銀行の朝鮮に本店を有するもの七、内地に本店を有するもの四あるが、朝鮮銀行及朝鮮殖産銀行も亦其特殊銀行業務の傍ら普通銀行業務を兼營して居る。尙信託業務を營むものに資本金一千萬圓の朝鮮信託會社、地方民の小金融機關としては各地に金融組合(都市金融組合)あり、其の總數六百九十二にして地方金融上非常なる活動をして居る。而して之が中央機關として朝鮮金融組合聯合會あり、各道に其の支部がある。この外、無盡會社・質屋・契等も下層金融機關として利用され、重要都市には手形交換所も設けられて居る。

通貨 現に朝鮮に流通する通貨は内地の各種鑄造貨幣及朝鮮銀行券である。朝鮮銀行券は朝鮮銀行法に依り發行せらるゝ兌換券にして、關東州及南滿洲鐵道附屬地に於ても亦無制限通用を認められ、其保證準備發行制限額は五千萬圓であるが、昭和十年十二月の最高發行額は實に二億二千九百八十三萬五千圓に及んで居る。

銀行	昭和十年末		明治四十三年末		昭和十年末		明治四十三年末	
	本店	支店	本店	支店	聯合會	聯合會支部	金融組合	金融組合支所
總數	10	187	2	55	1	1	1	1
朝鮮銀行	1	3	1	3			1	1
朝鮮殖産銀行	1	3	1	3			1	1
朝鮮貯蓄銀行	1	5	1	7			1	1
普通銀行	7	120	4	30	無盡會社	支店	3	3

備考 朝鮮殖産銀行の明治四十三年末は農工銀行の計數を掲げず。以下凡て同じ。

銀行營業狀況 (朝鮮外の計數は含まず)

年	年 末				年 中			
	本店	支店	出張所	公稱拂込積立金	入金	出金	年末金	純益金
明治四十三年	2	55	1,350	千円	千円	千円	千円	千円
昭和十年	10	187	9,175	千円	千円	千円	千円	千円
朝鮮銀行	1	3	10,000	千円	千円	千円	千円	千円

金 融

一三六

朝鮮殖産銀行	一	三〇,〇〇〇	三五,〇〇〇	一三,六三三	八,五三,四七八	八,五〇,一六〇	四,四四四	三,〇〇五
朝鮮貯蓄銀行	一	五	五,〇〇〇	二,〇〇〇	四〇	三,九,七〇七	五〇,五一一	四三三
普通銀行	七	一一〇	四,一七五	三,四八	四,〇〇五	七,六八,二三三	七,六八,一五〇	一一,四五五

朝鮮銀行券發行高及朝鮮殖産銀行債券發行高

内 譯

朝鮮銀行券發行高總數	三〇,一六三	千円	正貨準備發行高	七,〇三五	千円	保證準備發行高	一三,一三六	千円	保證準備制限額	一〇,〇〇〇	千円	制限外發行高	—	朝鮮殖産銀行債券發行高	九六〇	千円
明治四十三年末	三〇,一六三	千円	昭和十年末	一七,五二八	千円	明治四十三年末	四,二五六	千円	昭和十年末	五〇,〇〇〇	千円	明治四十三年末	—	昭和十年末	二七八,六五四	千円

明治四十三年の朝鮮殖産銀行券發行高は農工銀行の農工債券發行高を揚上す。

銀行預金及借用金並に貸出高 (朝鮮外の計數は含まず)

預金	借用金	貸出金
× 五,〇〇〇	千円	總額
一八,三三五	千円	普通貸付
—	千円	割引手形及荷爲替手形
—	千円	三七,九二三
—	千円	二五,一八八
—	千円	一三,七三四

明治四十三年末

昭和十年末	四〇四、四五〇	二四三、七一〇	六九四、八三五	六七、五八九	七七、三三六
朝鮮銀行	七三、六〇五	一八〇、九九四	一〇五、三九七	八二、七四三	三三、六五五
朝鮮殖産銀行	二七、七八六	二五、一五七	四二、三三三	三六四、一七一	二八、一六三
朝鮮貯蓄銀行	四三、七二四	—	一九、五三五	一九、五三五	—
普通銀行	一五、三四五	三六、五九九	一五七、五七〇	一三二、一五一	二六、四一九

備考 ×印は政府預金を示し外書なり

銀行貸出金擔保別

總額	一六、六四五 <small>千円</small>	四、四七四 <small>千円</small>	九四六 <small>千円</small>	二、一八〇 <small>千円</small>	—	—	九、〇四五 <small>千円</small>
不動産	六四四、八三一	二五〇、一六七	四三、七四三	一〇七、三五七	一三、一八六	四〇〇、一〇一	二四一、七七六
有價證券	一〇五、三九七	二〇、四六三	一五、五三三	三四、〇〇七	七、九三二	一一、二六二	一六、三三二
商品	四二、三三四	一六六、七八〇	一四、三六〇	四八、六七八	二、四七七	九、四三三	一七〇、六二六
財團船舶	一九、五三五	二、五二六	二、〇三六	—	—	九、八〇二	五、一六一
漁業權及	一五七、五七五	六〇、五九八	一一、三五五	二四、六七三	一、八二八	九、六八五	四九、六八七
債權	—	—	—	—	—	—	—
其他	—	—	—	—	—	—	—
信託	—	—	—	—	—	—	—
保證及	—	—	—	—	—	—	—
用	—	—	—	—	—	—	—

銀行比較 (昭和九年末、内地の分のみ昭和八年末)

	朝鮮	内地	臺灣	樺太	關東州及鐵道附屬地
本店	一一	六七	五	一	一三
支店及出張所	一八三	六三〇五	六一	一三	六七
公稱資本金	一〇〇、六七五 <small>千円</small>	一 <small>千円</small>	二八三〇〇 <small>千円</small>	二、〇〇〇 <small>千円</small>	一 <small>千円</small>
拂込資本金	六一、七三二	一、六四五、〇五六	二〇、六八〇	一、四七五	一一、九三二
積立金	二二、六七一	九八六、七三三	三、九一三	二〇二	二、二五一
預金	三四六、二二七	二二、三三九、一五二	二〇三、六四九	一三、三七〇	二九九、三四六
貸出高	六九一、七八	九、三〇九、二九六	三八、二七八	一八、六二五	三二七、四〇一
純益金	六、四三六	二〇、二六四	一、〇六三	—	一、二二九

銀行券發行高比較 (昭和十年末)

	朝鮮銀行券	日本銀行券	臺灣銀行券
兌換券發行高	一三〇、七七〇 <small>千円</small>	一、七六六、五五五 <small>千円</small>	七〇、一九〇 <small>千円</small>
正貨準備發行高	一七二、五二八	五〇四、〇六五	一八、八五四

保證準備發行高 四八,二五八 一,二六,二四九〇 五,一,三三六  
 餘 裕 高 一,七四一 (二六,四九〇) (三,三三六)

(制限外發行高)

金融組合業務狀況

明治四十三年度末	三〇	三,〇〇五	一	一,二〇〇	一	七九	七六	三	一〇一
昭和九年度末	六三	一,二六,七六六	一〇,七五九	四,一三三	一三,〇七七	一五,〇一〇	八,〇三三	一七,三三三	一,七三〇
	組合數	組合員數	拂込濟出資金	組合基本金	預り金	貸出金	現金及預け金	積立金	剩餘金

金融組合及信用組合比較 (單位圓)

朝鮮	臺灣	樺太	南洋群島
(金融組合)	(信用組合)	(信用組合)	(信用組合)
組合員數	組合員數	組合員數	組合員數
一,一七八,七六九	二四五,六〇一	六,四四一	一,一九九
一七,〇四五,一〇五	一五,七九五,七四一	一,六九九,五〇〇	一五六,五五〇
一〇,五七九,八四四	一三,八四三,四三一	一,四五五,六〇七	一三三,四二五
六九二	三七四	四八	八

金融

一三九

金 融

一四〇

準備金	—	七、八三八、七九九	—	—
政府下附金	四、一三二、〇〇〇	—	—	—
積立金	一七、七七九、一九〇	三、六七一、三八一	三四六、三八九	二、六七七
借入金	六〇、二二六、一八〇	九、〇七九、〇九九	五一五、二五八	九〇、〇〇〇
貯金	—	二六、九〇四、〇五五	一、八九二、五〇六	六八、四五三
預り金	一三九四二七、八六九	六五、五三八、六三九	—	一四三、三五二
貸出金	一五〇、一〇七、二〇一	六六、八三六、三七五	二、九二六、三七五	二、六三、一六九
剰餘金	一、七六〇、三七三	二、四二一、四九五	一四二、四九五	—
純益金	—	—	—	—

備考 朝鮮、樺太は昭和九年度末、臺灣は昭和十年六月末、南洋群島は昭和十年二月末現在なり。

金 利

朝鮮銀行平均金利

明治四十三年中	昭和十年中
預金	預金
定期	定期
(年利) 四分	(年利) 四分
當座	當座
(日歩) 八錢	(日歩) 三錢
貸付	貸付
(日歩) 三錢	(日歩) 二錢
當座貸越	當座貸越
(日歩) 三錢	(日歩) 二錢
手形割引	手形割引
(日歩) 三錢	(日歩) 三錢
出	出
年賦及定期貸付(年利) 一分	年賦及定期貸付(年利) 一分
七・三	七・三

朝鮮殖産銀行平均金利

明治四十三年中	昭和十年中
預金	預金
定期	定期
(年利) 六分	(年利) 四分
當座	當座
(日歩) 七錢	(日歩) 三錢
貸付	貸付
(日歩) 三錢	(日歩) 二錢
當座貸越	當座貸越
(日歩) 三錢	(日歩) 二錢
手形割引	手形割引
(日歩) 九分	(日歩) 六分
出	出
年賦及定期貸付(年利) 一分	年賦及定期貸付(年利) 一分
一・〇	一・〇

朝鮮貯蓄銀行平均金利

昭和四年中
預金
普通貯金
(年利) 四分
据置貯金
(年利) 五分
定期積金
(年利) 四分
積金擔保貸付
(日歩) 二錢
一四一

金 融

金 融

昭 和 十 年 中 三・三六 四・三〇 三・五四 二八

普通銀行平均金利

昭 和 十 年 中	支店銀行	定 期	預 金	貸 付	出
		昭 和 十 年 中	四・〇	〇・三	一・九
明 治 四 十 三 年 中	地場銀行	定 期	當 座	當 座	手 形
		四 十 三 年 中	四・六	〇・四	二・五
昭 和 十 年 中	支店銀行	定 期	預 金	貸 付	出
		昭 和 十 年 中	四・〇	〇・三	一・九
明 治 四 十 三 年 中	地場銀行	定 期	當 座	當 座	手 形
		四 十 三 年 中	四・六	〇・四	二・五

朝鮮金融組合會金利

昭 和 十 年 中	支店銀行	定 期	預 金	貸 付	出
		昭 和 十 年 中	四・一四	〇・七	二・〇
大 正 七 年 中	支店銀行	定 期	當 座	當 座	手 形
		大 正 七 年 中	六・〇	一・三一	二・四

金融組合金利

預金

貸出

大正十三年中	定期預金	貯蓄預金	當座預金	普通貸付當座貸	長期貸付
	八・五以下 <small>(年利)</small>	二・二以下 <small>(日歩)</small>	一・五以下 <small>(日歩)</small>	五・〇以下 <small>(日歩)</small>	一五・〇以下 <small>(年利)</small>
昭和十年中	四・六位	一・〇位	〇・四位	三・〇—三・四	九・六位

貸金業者金利 (單位分厘)

昭和九年	最高	普通	最低	明治四十四年	最高	普通	最低
	三〇	一九	一五		四八	三三	二三

金融	內地人	朝鮮人	內地人	朝鮮人	內地人	朝鮮人	外國人	朝鮮人	外國人
	三〇	三九	二七	一八	一五	四八	三三	二三	一三
融	三〇	二〇	一六	一八	一五	四九	三〇	一九	一三
	三四	二四	一七	一八	一五	五〇	三〇	一八	一三
融	三八	二四	一七	一八	一五	五〇	三〇	一八	一三
	三八	二四	一七	一八	一五	五〇	三〇	一八	一三

金融

一四四

内地	三五	二五	一七	一	一
外地	三五	二五	一七	一	一
市場	一〇九	八一	六二	八三	六〇
貸					四四

備考 明治四十四年の欄中市場貸は大正五年の調なり。

金利比較

中央銀行標準金利

國債を擔保とする貸付利子及國債を擔保とする手形割引歩合 國債以外のものを擔保とする貸付利子及國債以外のものを擔保とする手形割引歩合 擔保とする手形割引歩合 商業手形割引歩合 當座貸越及コールレ スポンドス貸越	朝鮮銀行 (昭和十一年四月十一日改定)	臺灣銀行 (昭和十一年四月十三日改定)	日本銀行 (昭和十二年四月七日改定)
	一錢三厘以上	一錢二厘以上	一錢以上
	一錢四厘以上	一錢四厘以上	一錢一厘以上
	一錢二厘以上	一錢三厘以上	九厘以上
	一錢六厘以上	一	一錢三厘以上

預金協定利率

定期	年三分六厘	年四分一厘	年三分三厘	年三分五厘	年三分三厘	年三分五厘
	日步二厘	日步三厘	日步一厘	日步二厘	日步一厘	日步二厘
當座	同	同	同	同	同	同
特當	六厘	七厘	五厘	六厘	五厘	六厘

無盡業比較 (朝鮮は昭和十年末、他は九年末)

本店	朝鮮	内地	臺灣	樺太	南洋群島
	三	二七三	三	六	
支店及出張所	一	七九七			
	四、〇一〇、〇〇〇	三六、五四、五〇〇	八五〇、〇〇〇	三九七、〇〇〇	
公稱資本金	一、七二〇、二〇〇	一九、三三〇、五七〇	三六七、〇〇〇	二五五、〇〇〇	
	一、七〇五	六七、〇三三	七九八	七〇	組合數
組込資本	九五、九一四	二、〇一四、九〇五	一	一、七六一	一四五
口數					
融					

京城組合銀行  
(昭和十一年四月二十日改定)

東京組合銀行  
(昭和十一年四月十日改定)

大阪組合銀行  
(昭和十一年四月十日改定)

金 融

給付金契約高	一七、五五、三〇 <sup>円</sup>	一、三〇三、四六七、七 <sup>円</sup>	二六、三三、〇〇 <sup>円</sup>	一、五三四、六〇〇 <sup>円</sup>	四、四三〇、三 <sup>円</sup>
掛金契約高	一五〇、九九、二 <sup>円</sup>	一、三七四、三三、八 <sup>円</sup>	—	—	—

## 一七 物價及勞銀

一般經濟界の不況の影響を受けて朝鮮に於ける物價及勞銀指數も一時下降しつゝあつたが、昭和七年の財界の最不況期を底に、其の後内地經濟界の恢復と朝鮮經濟の躍進と相俟つて昭和七年以來僅少乍ら毎年上昇傾向を示してゐる。

### 賃銀指數 (昭和十年)

年次	指數		月次	指數		月次	指數	
	内地人	朝鮮人		内地人	朝鮮人		内地人	朝鮮人
昭和元年	100.0	100.0	一	84.8	81.2	十一月	89.2	87.3
同二年	103.6	101.5	二	85.0	84.3	十二月	89.7	87.7
同三年	103.3	105.0	三	86.6	83.3	平均	85.8	83.1
同四年	101.3	103.5	四	87.1	83.0			
同五年	95.6	93.9	五	87.6	83.8			
同六年	87.3	83.9	六	88.4	84.1			

物價及勞銀

物價及勞銀

同七年	八六・〇	八〇・五	七	月	八七・六	八三・三
同八年	八四・六	七六・二	八	月	八六・一	八四・二
同九年	八四・〇	七九・五	九	月	八六・〇	八四・六
同十年	八五・八	八三・一	十	月	八九・八	九〇・七

賃銀調

昭和十年十二月平均賃銀

内地人 朝鮮人

指數總平均  
熟練勞働者  
1 建物に關するもの

家作	三・二八	四	一・九四	四
船造	三・二〇	〇	一・八三	三
左官	三・三四	四	二・二三	三
石工	三・四〇	〇	一・八四	四

昭和元年を基準とせる指數

内地人 朝鮮人

家作	八九七	八七・七
船造	八八一	八七・六
左官	八二八	八五・七
石工	八九三	九六・五
	八三一	七九・二
	八三五	九三・〇
	八四・二	七九・三

物價及勞銀	船員	下級汽船	×	三・八七五	×	二・三〇〇	九・五三三	七・二〇四	七・二〇四	
		帆船	×	四・一六七	×	二・二三五	二・二八二	二・二八二	九・二四四	
		3 交通に關するもの								
		木挽			二・七八		一・六二	七・五三		七・四七
		家根			三・二〇		二・〇〇	八・五九		九・五七
		瓦葺			三・〇八		一・八九	七・九六		八・五九
		煉瓦積			三・二四		一・九九	七・八一		八・四〇
		ペンキ塗職			二・七三		一・六九	七・七一		八・二八
		2 器具製造に關するもの								
		指物職			二・九五		一・八三	八・三一		八・六六
		建具職			三・二一		一・九二	八・九四		九・六三
		壘刺			二・七七		一・六一	八・二二		一〇・一一
		表具師			二・七一		一・四九	八・二六		九・二五
桶工			二・五三		一・四四	八・〇八		七・九三		
車製造職			二・六六		一・五〇	八・三六		七・七〇		
3 交通に關するもの										
						一〇・二四		七・七二		

物價及勞銀

一五〇

	其 他	× 三・六七	× 一・六六七	八三・八	六・六七
4	飲料及衣料に關するもの	—	—	九六・〇	一〇四・一
	染 物 職	二・二九	一・二〇	一〇二・七	九四・五
	洋服裁縫職	二・四四	一・五〇	八〇・八	七二・一
	杜 師	× 七七・二四	× 四〇〇・〇	一〇〇・二	二二九・七
	醬油製造職	× 五五・三八	× 二九〇・〇	一〇〇・一	二二〇・〇
5	雜	—	—	九一・五	八三・九
	靴 職	二・四二	一・五〇	九二・七	七二・五
	理 髮 職	一・九三	一・二〇	九六・五	九四・五
	活版植字工	二・二四	一・二六	八五・三	八四・六
	不熟練勞働者	—	—	九四・三	八七・八
	薦 人 足	二・七六	一・六八	八九・九	一〇〇・六
	平 人 足	一・四二	・七七	八三・〇	八九・五
	土 方	一・七一	・九六	八四・二	九三・二
	擔 軍	—	・七〇	—	八七・五

仲仕	二・二六	一・三二	八二・五	九三・一
下男	× 一三・八三	× 一・七五	一・六四	八八・七
下女	× 一四・一三	× 八・〇〇	七九・〇	八一・〇
農作夫	一・五〇	七・〇	一・〇〇	七九・五
女	九・〇	四・五	一・〇〇	八六・五
夫	二・二三	一・一五	一・三二	七八・八

備考 ×印は賄付月給とす。

小賣物價指數 (昭和元年平均小賣物價を基準とす)

年次指數	昭和十年	昭和十年			
昭和元年	一〇〇・〇	月次指數			
同二年	九七・四	一月	八〇・〇	十一月	九〇・四
同三年	九四・九	二月	八一・四	十二月	八三・二
同四年	九五・一	三月	八一・八	平均	八一・八
		四月	八二・四		

物價及勞銀

物價及勞銀

同	同	同	同	同	同
十	九	八	七	六	五
年	年	年	年	年	年
八・八	八・〇七	七・七五	七・四一	七・四二	八・六六
十	九	八	七	六	五
月	月	月	月	月	月
八・五	八・四	八・六	八・三	八・〇九	八・三

小賣物價

大豆	櫻麥	精米	1 穀類	指數總平均	品名	昭利十年三月中	昭利元年
同	同	一升	四	一	單位平均物價	を基準と	せる指數
・三	・二九	・三三	一	一	八三・二	九七・四	八八・六
九五・八	九〇・五	八八・六	九七・四	八三・二	八三・二	九七・四	八八・六
鶏肉	牛肉	粟肉	2 類	小	品名	昭利十年三月中	昭利元年
同	百匁	(精) 同	一升	一升	單位平均物價	を基準と	せる指數
・五八	・四〇	・三五	・三五	・八	・八	・八	・八
八一・七	九三・〇	八八・四	一一九・〇	九三・三	九三・三	一一九・〇	八八・四

物價及勞銀	朝鮮酒	藥酒	同	・六二	六九三	6	燃料類	石油(上松)	一升	・三二	八五八
		濁酒	同	・三二	六七四			荻(松)	一貫	・〇六	八五七
	清酒	酒	一升	一・六八	九四四	打綿	一貫	三八四	七九三		
		飲料類	同	—	八四二	綿縫絲(三合)	一棹	・〇五	四五四		
	醬油	朝鮮製	同	・五四	七九四	朝鮮麻布	同	三・九	七七二		
		內地製	一升	・六七	七五三	日本小巾白木綿	一疋	一・三六	五二一		
	味噌	朝鮮製(赤)	同	・〇七	七七八	5	衣料類	コンデンスド	一罐	・五七	一〇七五
		內地製(赤)	同	・〇八	七二七			ミルク(鷲)	一罐	—	七三一
	3	調味料類	鰹節	百匁	一・二五	六二二	正喜撰	一斤	・九〇	七八三	
			雞卵	十箇	・四三	一〇七五	シトロソ	同	・一九	八六四	
豚肉	百匁	・四一	九三二	麥酒(キリン)	一本	・三五	八五四				
		牛乳	一合		・〇八	六六七	葡萄酒(蜂)	同	一・三三	一〇二五	
4	飲料類	白糖	一斤	・二五	八九三	支那麻布(大夏香)	同	四・八七	八五四		
		砂糖	同	—	八四二	綿縫絲(三合)	一棹	・〇五	四五四		

7 石 雜	木			
	炭	根炭	同	〇・二
	白炭	同	〇・二	九五・二
	炭	一噸	一・三 四	九一・三
				八四・六
	神戶用紙(六寸)	同	〇・二	五三・八
	朝鮮紙(丈紙)	十枚	〇・四	一二・二
	和紙(半紙)	一帖	〇・五	八三・三
	燐	寸 一袋	〇・四	八〇・〇

## 一八 教 育

從來朝鮮に於ける内地人と朝鮮人との教育は其系統を異にしたるも、時勢の進歩は此の差別を撤廢するの必要を認め、普通教育に在りては國語を常用する者(内地人)と國語を常用せざる者(朝鮮人)との二種に分つも、特別の事情ある場合は相互に其入學を認むるの途を開き、實業教育・専門教育・大學教育及師範教育に在りては内鮮人の共學を原則とし、新に教育系統を立て之を統一するに至つたのである。

普通教育 國語を常用する者の教育は、小學校、中學校、高等女學校にして、官立小學校二、公立小學校四八九、公立中學校一二、公立高等女學校二七、私立高等女學校一ある。國語を常用せざる者の教育は、普通學校、高等普通學校、女子高等普通學校にして、官立普通學校二、公立普通學校二、二六九、公立高等普通學校一五、公立女子高等普通學校九、私立普通學校八七、私立高等普通學校一一、私立女子高等普通學校一〇ある。書堂は古來朝鮮に於ける少年子弟唯一の教育機關にして、部落又は個人或は教師自らの設立に係り、極めて不完全なる教育を施せるも、遽かに廢止し難き事情にあり、當局の指導監督に依りて改良せられつゝあるが、未だ尙ほ全鮮に總數六、八〇七あり、教員數七、二七一人、生徒數一四七、〇九五人に及ぶ。幼稚園は公私立併せ

て園數二九九、園兒數一六、七〇〇人ある。

實業教育及専門教育 實業教育、専門教育は内鮮人の共學を原則とし、實業學校は實業學校令及文部省令の當該規定に準據し、専門教育は専門學校令に依つて居るが、近來普通教育の普及に伴ひて實業及専門教育も亦勃興し、其教育機關たる諸學校は、官立専門學校(醫專、高工、高農、高商、法專)五、公立専門學校(醫)二、私立専門學校八、官立實業學校(工、業)、公立農業學校(農、林)三〇、公立商業學校(工、商)一六、私立商業學校七、公立水産學校三、公立職業學校五、私立職業學校二、官立實業補習學校一、公立實業補習學校九四、私立實業補習學校三ある。

大學教育 大學教育及其の豫備教育は内地の大學令に依り同令中文部大臣の職務は朝鮮總督之を行ふこととなり、京城に綜合制の官立大學を設置し、差當り法文學部及醫學部を置き大正十五年度より開設した。其の豫備教育としては内地高等學校同様修業年限三年の豫科あり、大學の組織内容は内地の帝國大學と殆ど同様にして、内鮮人共學なるも、各學部に於て其特長を發揮すべき使命あるを以て、法文學部に於ては朝鮮の法律・制度・經濟及言語・文學・思想・信仰・風俗・習慣・美術・歴史等に關する研究を爲し、其他社會百般の事象に關し特に其推移變遷に留意して之が研究に努め、又醫學部に於ては朝鮮特殊の疾病・藥物等の研究に關し、大に其特色を發揮せんとして居る。

師範教育 師範教育は内鮮人共學を本體とし京城の官立師範學校の外、各道に之を置きたるも、昭和四年四月師範學校は當分官立とするの方針を定め、同四年六月大邱及平壤に官立師範學校を設置し、各道地方費立師範學校は何れも同六年三月限廢止し現在官立師範學校は京城・大邱・平壤・京城女子の四である。

在内地留學生 内地に於て勉學する朝鮮學生は四千九百五十四名（昭和十年十月現在）にして、之を地方別にすれば、東京在學者三千五百四十二名、其の他の地方在學者一千四百十二名である。東京に朝鮮教育會の朝鮮留學生督學部を置き、其指導監督を行ひ、總督府は内地諸學校卒業の朝鮮人の就職に付便宜を計つて居る。

### 教育機關（昭和十年五月末現在）

學校數	學級數	職員數			生徒數		
		教員	兼務者	其他	總數	内地人	朝鮮人
小學校	四九一	一、九九〇	三、三六六	一〇一	八四、三六六	八二、八六四	一、五三三
普通學校	二、三五六	一〇、六六〇	一一、三七七	一〇五	七二、四〇六	七六、七三〇	七六、七三〇
簡易學校	五七九	五〇	六三	六	三、四三三	三、四三三	三、四三三
		五七九	五八四	六三	三、六九五	三、六九五	三、六九五

實業補習學校	九	一九四	三九	一六一	七	四、五七七	六〇八	三、九四九
中 學 校	三	二八	二五九	一五	三	六、七二四 (一)	六、三七八	三五五
高等普通學校	三六	二八五	五四一	三三	四九	一四、五〇五	一四二	一四、三六四
高等女學校	二八	二〇七	四〇六	一五	一三	一〇、五三五	一〇、〇〇五	五二〇
女子高等學校	一九	一三三	二六五	一九	一三	六、〇四七	—	六、〇四七
普通高等學校	六四	三九一	七七九	八〇	七四	一七、四九九	五、四三〇	一三、〇一九
實業學校	四	五五	一一五	一五	一〇	二、四三四	九五	一、四八三
師範學校	一五	九三	三三一	三三	五七	四、四九七 △三(三)	一、七七五	三、七三三
專門學校	一	八	二五	一一	一四	三〇九	一九七	一一三
大學豫科	一	七五	一一六	一五	四九	六七五	四七五	二二〇
大學	四三	一、三六	一、六六	五三	五	七二、八二〇	一、八三三	六九、九八八
各種學校	二九九	五三二	六三六 (二八)	一	二二	一六、七〇〇	三、二七六	一三、五三三
幼稚園	六、八〇七	—	七、七七一	—	—	一四七、〇二二	—	—
書 堂	—	—	—	—	—	—	—	—

備考 ×印は開島、瓊春内各學校を、△印は臺灣人を、括弧内は外國人を示し、孰も外書。

# 教育機關比較

初等教育 (朝鮮は十年五月末、内地は八年度末、他は九年度末)

朝鮮 内地 臺灣 樺太 關東州及 鐵道附屬地 南洋群島

學校 四一 二五、七〇三 一三四 三三六 六〇 八

小學校 教員 二、四〇二 二四五、七三三 九六八 一、一八七 一、一六七 七五

兒童 八四、三九五 一一、〇三五、二七八 四〇、〇三三 四九、三八二 四三、六五五 三、九三六

教員一人に付兒童 三五・一 四四・九一 四一・三五 四一・五二 三六・五 五二・五

普通學校 學校 二、三五八 (公學校) 七七〇 (土人教育所) 一 (普通學校) 一五七 (公學校) 二五

公學校 教員 一一、三九三 五、九六六 一 一、〇七九 九三

公學堂 兒童 七二七、四四四 三三三、九六六 三〇 五〇、〇一五 二、九八七

教員一人に付兒童 六三・〇 五五・八 三〇・〇 四六・四 三六・〇

中等教育 (朝鮮は十年五月末現在、他は九年度末、内地は八年度末、但し内地師範學校は七年度末)

朝鮮 内地 臺灣 樺太 關東州及 鐵道附屬地 南洋群島

學校 四 一〇三 四 一 一 一

教育

師範學校

生徒 教員

一四〇  
二、四四

二、四三九  
三六、八六七

一〇一  
一、三七〇

—

—

中學校

生徒 教員 學校

六、七五  
三〇五  
一一

三三、三五七  
三三、二四七  
五五四

二二四  
五、四三二

三  
一、九〇一

八  
二、三〇〇  
四、九九六

高普通學校  
中學校

生徒 教員 學校

一四、五〇五  
六三  
二六

—

—

—

八四七  
六五  
二

高女學校  
實科高等學校

生徒 教員 學校

一〇、五三五  
四四  
二八

九七五  
一五、三〇五

一三  
二四一

四  
六七

一五九  
三三三  
五、二四八  
× 六六二

女子高等  
普通學校

生徒 教員 學校

六、〇四七  
二九六  
一九

—

—

—

—

實業學校	實業學校			補習學校	補習學校		
	學校	教員	生徒		學校	教員	生徒
	六四	九三三	一七、四四九	四、五七七	三九七	一、二七二、五三〇	四、九四六
	一、〇四一	一六、一五七	三六、八四六	一、二七二、五三〇	二、九五二	二、二一〇	四、九四六
	六	一八七	三、三四	二、二一〇	一〇六	四三七	四、九四六
	七	一四七	三、三四	二、二一〇	八	四三七	四、九四六
	七	一四七	三、三四	二、二一〇	九	四三七	四、九四六
	一	二八五六	三、三四	二、二一〇	二五	四三七	四、九四六
	三	二八五六	三、三四	二、二一〇	二五	四三七	四、九四六
	一	二八五六	三、三四	二、二一〇	二五	四三七	四、九四六

備考 朝鮮の分は兼務者を含む。×印は家政女學校

高等教育 (朝鮮は十年五月末、内地は七年度末、他は九年度末)

朝鮮内地臺灣樺太關東州及鐵道附屬地南洋群島

高等師範學校	高等師範學校		臨時教員養成所	臨時教員養成所	
	學校	生徒		學校	生徒
	四	二、六二九	四	一五四	一六一
	四	二、六二九	四	一五四	一六一
	四	二、六二九	四	一五四	一六一
	四	二、六二九	四	一五四	一六一

水原高等農林  
附屬實業補習  
學校教員養成  
所の分は前校  
生徒中に含む

專門學校	高等學校	大學豫科	大 學	各種學校	盲學校	聾啞學校
學校	學校	學校	學校	學校	學校	學校
生徒	生徒	生徒	生徒及學生	生徒	生徒	生徒
一五	一	三〇九	六七五	七二、八二〇	—	—
一六	六三	×二、四三九	四九、八九一	二〇三、一三三	一三七 (盲學校)	八、九九八
四	一	五六一	二三八	三、六八〇	二 (盲學校)	二八八
—	—	—	—	三三二	—	—
—	—	—	一、〇四六	八、九六七	一 (盲學校)	五七
—	—	—	—	一、五八四	—	—

備考 内地の學校大學の學生中には各専門部、研究科、専攻科、大學院等の學生を含む。  
 ×印は高等學校尋常科生徒にして外書。

## 一九 宗 教

祭祀 高麗朝以前の殿陵に對しては、特に國家の儀制として從來の規格に依り享祀の典禮を行ひまた先賢の學徳、烈士の節義を追慕し、且其徳化を報謝する爲めに書院又は祠宇を設立して享祀を行ふ儀制を公認せるもの全鮮を通じ四十四箇所あり、この外にも地方儒林又は名門の建設に係る書院祠宇が尠くない。

神社 内地人の移住増加に伴ひ各地に神社を勸請するもの多く、成規に遵由して創立せられたる神社数は昭和九年末には五十二に達し、地方著名の都市には概ね其の存置を見るに至り、この外神祇を勸請して一般公衆の禮拜に供する小設備の神祠は二百四十箇所あり、いづれも他日神社となるべきものである。

官幣大社朝鮮神宮は、朝鮮の總鎮守として、天照大神、明治天皇の二柱を奉祀し、大正十四年十月十五日鎮座祭を執り行はせられ、爾來例祭を十月十七日と定め勅使を御差遣せらるゝことに御治定相成つた。鎮座以來十一年を經過し神徳彌々高く、參拜者の年と共に増加し行くは尊き極みである。

宗教 新羅・高麗時代には朝鮮の佛教は隆盛を極めたのであるが、李朝になつてから排佛崇儒の

政策を執り、寺刹及僧侶に對して抑壓を加へた爲め、教勢衰微し寺刹の荒廢に歸したものが頗る多い。李太王時代になつてから信教の自由を得、明治四十四年寺刹令の發布に依り、數百年沈衰したる佛教は茲に漸く蘇生の觀を呈し、現在朝鮮派の佛教としては本寺(山本)三十一、末寺一千三百三十八、布教所百八十、僧侶六千六十七、尼僧一千百、信徒十四萬六千餘人あり、宗旨は禪・教二宗である。

内地神道には天理教・神理教・金光教・神習教・大社教・扶桑教・神道・黒住教・實行教及御嶽教の十派あり、布教所二百七十五、布教者五百六十八、信徒十萬一千二百餘、内朝鮮人一萬八千六百餘人である。内地佛教の現在朝鮮布教に従事する宗派は眞宗・日蓮宗・淨土宗・眞言宗・曹洞宗・臨濟宗・黃檗宗及天台宗に屬する二十六派にして、寺院百四十三、布教所四百二十二、布教者六百十、信徒二十六萬八千餘、内朝鮮人九千五百餘人を算す。

基督教は現在外國人の關係ある教派に朝鮮耶蘇教長老會・基督教朝鮮監理會・聖公會・第七日安息日耶蘇再臨教・東洋宣教會・救世軍及東京四谷宣教會基督教會の七派あり、内地人側の新教基督教には日本基督教會・日本メソヂスト教會・日本組合教會がある。以上の外東洋宣教會ホーリネス教會及基督同信會あり。朝鮮人側には朝鮮基督教會・朝鮮會衆基督教會あり、以上新舊各派を通じ現在布教所四千四百九、布教者二千六百五十三、内外國宣教師三百九十、信徒内地人七千

三百餘、朝鮮人四十三萬三千七百餘、外國人二百八十餘、合計四十四萬一千四百餘人に達する。以上を見ても、朝鮮に於ける民衆の宗教信仰心は未だ盛んなりと稱し難いが、民間には天道教、侍天教、其他各種の宗教類似團體があり、民衆の大部分は今尙原始信仰たる巫覡の祈禱に依頼して居る。しかしながら、近來心田開發の運動が叫ばれ、寺院の淨化も行はれつゝあるを以て、今後朝鮮の社會には敬神信教の念が大に普及するものと期待される。

神社・寺院・寺刹・祠院 (昭和九年末)

神社及寺院

神社 五二 神 祠 二四〇 寺 院 一四〇

寺刹及祠院

寺 刹 一、三三八 祠 院 四四

僧 尼 七、二六七 } 僧 六、〇六七  
 尼 一、一〇〇

布教所・布教者及信徒數 (昭和九年末)

宗 教

一六六

宗 教	教 派 數	教會堂布教所及講義所	布教者數	信 徒 數
神 道	一〇	二七五	五六八	一〇一、二九五
佛 教	一六	四三二	六一〇	二六八、〇三三
佛 教	一	一八〇	一八一	一四六、七七
佛 教	一	六〇二	七九二	四二四、七五〇
計				四四一、四一九
基 督 教	一七	四四〇九	二、六五三	四四一、四一九

神社及神職數比較 (昭和九年末、内地は昭和八年末)

宗 教	朝 鮮	内 地	臺 灣	樺 太	關東州及鐵道附屬地
神 社	五二	一一、〇三七	二五	一一二	四四
神 職	五七	一五、五八六	三〇	三三	三五
神 祠 又 是 社	二四〇	一	一〇一	一	一

布教所・布教者及信徒數比較 (昭和九年末、内地は昭和八年末)



基督教	
布教所	四、四〇九
布教者數	二、五三三
信徒數	四四、四一九
布教者一人に付信徒數	一六・四
	一、九六六
	二五七
	二六
	一、二七一
	九七・六
	七、七四九
	七五・二
	四〇、八七四
	一六七
	一四三

## 二〇 衛生

醫療機關 併合以來總督府は總督府醫院(昭和三年六月より京城帝大醫學部醫院と改稱)小鹿島慈惠醫院(昭和九年十月より小鹿島更生園と改稱)の外、各道に道立醫院を設置し、警察醫及公醫を設けて一般に醫藥の便を與へ、大正八年各道に衛生技術官を配置し、飲料水改良方法としては諸市街地に水道を敷設し、或は敷設せしめ、又國費の補助を與へて共同井戸の掘鑿を獎勵し、傳染病及獸疫の豫防或は除穢事業等を常に勵行して、衛生機關の充實と社會衛生の進歩とを圖つて居るが、未だ醫療機關の普及は充分とは言へない。

飲用水 傳染病の流行と飲用水とは密接な關係があるが、朝鮮に於ては一般に飲料水不良なるを以て、之が改良の必要を認め、併合以來毎年國費及道費補助の下に、地方をして水道の敷設及模範的公共井戸の掘鑿を行はしめつゝあり。現在水道の設備あるは京城・仁川・光州・清津・咸興・新義州・晋州・釜山・平壤・木浦・鎮南浦・群山・羅南・會寧・元山・義州・鎮海・大邱・海州・公州・清州・全州・江景・統營・浦項・春川・平康・金泉・城津・高興・麗水・馬山・莞島・兼二浦・載寧・開城・大川・裡里・順天・羅老島・慶州・密陽・三千浦・東萊・金海・蔚山・鐵原・興南・永興・新高山・論山等である。

公共井戸の改良に關しては國庫補助又は地方費により掘鑿改修を行はしめつゝあるも、尙ほ地方

によりては河水、池水、灌漑用水等の不良水を飲用するものが尠くない。  
 傳染病 傳染病としては、コレラ、痘瘡、赤痢、腸チフス、猩紅熱、腦脊髄膜炎等の流行あり、當局は其豫防撲滅に力を盡しつゝあり、慢性傳染病中の癩及結核患者も多く、地方病には、肺チフス、十二指腸蟲、マラリア等の分布廣範圍に亘り、又家畜傳染病中其惨害の最も甚大なるものに、牛疫、牛肺疫、口蹄疫、炭疽、氣腫疽の流行も尠くない。

醫療機關表 (昭和十年十二月末)

病院		總數	内地人	朝鮮人	外國人
官公立	私立				
50	86	136			
計					
醫師					
官公署職數		總數	内地人	朝鮮人	外國人
奉職	開業				
246	640	886	115	134	23
178	94	272	65	105	18
其他					
			49	40	5

衛生	公醫	種痘	灸術	鍼術	按摩術	看護婦	產婆	入商營業	醫師	齒科	總數	限地	醫生
	道費	衛生	術	術	術	婦	婆	業	其	開業	職	業	生
	費	費	術	術	術	婦	婆	業	七	六九五	三七	七三九	二六〇
	四八	三三九	二二二七	七二七	九三二	一七八三	一八六九	二〇三	七	六九五	三七	七三九	二六〇
	二二	一〇二	一六八	四三四	三九〇	五六八	一四四五	八五	六	四九五	三三	五三七	七八
	三六	二七七	一九四九	二八三	五三二	二九七	四四	二一八	一	一九三	五	一九九	一七三
	一七一						二〇			三	三	九	四〇四四

醫師一人に對する人口 八、八九一  
 醫生一人に對する朝鮮人人口 五、二五四

醫療機關比較 (朝鮮は昭和十年末、其他は昭和九年末)

	朝鮮	内地	臺	灣	樺	太	關東州及 鐵道附屬地	南洋群島
病院	一三六	二、五五五	二二六	二四	二四	三三	一〇	
醫師	二、四六一	五、七九一	一、三九〇	二二〇	六四三	四一		
限地開業醫及醫生	四、三〇四	九一	四二六	八二	一	六		
齒科醫師	七三九	一七、九八四	二八九	五八	二〇九	一四		
藥劑師	三八六	二、八〇二	一五三	四二	一六〇	一〇		
産婆	一、八六九	五、五九〇	一、六三二	二四九	五九四	四八		
看護婦	一、七八三	九六、〇二〇	六八	一〇七	一、二二	三四		
藥種商	一、二〇七	二八、一五六	二、七三三	七六	一八一	八		
製藥者	九四	三、八三一	一三	一四	五五	一		
醫師一人に對する人口	三、二三五	一、三三八	二、八七六	一、五五〇	二、三二九	一、二九五		

醫師限地開業醫・  
醫生一人に付面積(方軒)

三・六三

七・三三

一九・九一

一七・八六

五・一〇

四五・七二

備考 樺太に於ける病院は病床十個以上のものを掲ぐ。

傳 染 病 (朝鮮は昭和十年中他は昭和九年中)

衛生	フ陽スチ		赤痢		總數		朝鮮	内地	臺灣	樺太	關東州及 鐵道附屬地	南洋群島
	死亡者	死亡率	死亡者	死亡率	死亡者	死亡率						
	二六・一	一八・一	二五・九	一五・五	一四・〇	六・三						
	一・二〇一	七・七三二	三〇・一	五・七	一一・八	二						
	七・四九六	四・六九五	一・二六一	三・六八	八・四五	三・三						
	二・〇・二	三・四・四	一・六・五	一・六・四	九・七	一〇〇・〇						
	七・四九	一・四・七・七一	三・六	九	二・三四	五						
	三・六七五	四・二・九・四一	二・二八	五・五	二・四〇七	五						
	〇・八一	二・〇	〇・六	三・〇	四・三	〇・九						
	一九・三	一・三・五	二・三・六	一・三・〇	二・五	一・四・三						
	三・四・二五	二・九・二・七	六・六五	一・三・一	八・七	二						
	一七・六・七三	一・三・八・四・五九	二・九・四・五	一・〇・五	六・五〇二	八・四						

熱猩紅			スチ發疹			痘瘡			膜脊性流行			スチパ			衛生
死	死	患	死	死	患	死	死	患	死	死	患	死	死	患	
亡	亡	者	亡	亡	者	亡	亡	者	亡	亡	者	亡	亡	者	
率	者	者	率	者	者	率	者	者	率	者	者	率	者	者	
二二七	一四三	一一二〇	一三四	一五三	一一三四	二五・四	三三四	一一七三	五二・六	二七二	五二七	六・九	四九	七〇七	
三・〇	五〇九	一六・六九一	一一・五	三	二六	一一・一	三六	三三三	五四・六	六五〇	一一・九一	七・五	三三七	四、四八一	
二・九	二二	四・八						五	六二・四	一七六	二七二	二・一	八	三八	
		二二							一〇〇・〇	一	一	二・三・六	三	三三	
七・九	八五	一、〇七三	一一・一	一	八六	一九・八	二六九	一一三五三	六七・八	五八	八五	二・〇	四	一九六	一七四
												一三・三	二	一五	

備考	其他			ヂテリフ		
	死亡者	死亡者	患者	死亡者	死亡者	患者
死亡率は患者百人に付死亡者數なり。	死亡者	死亡者	患者	死亡者	死亡者	患者
	率	率	率	率	率	率
	1	1	1	29.9	5.4	175.1
	1	1	1	16.9	50.89	301.10
	1	1	1	16.9	1.4	83.2
	1	1	1	3.9	6.2	43.8
	8.7	2	23	20	4.8	43.4
7.7	2	26	16.7	1	6	

## 二一 交通

鐵道 朝鮮の鐵道は國防並に統治上重要な使命を有し、殊に民度の向上、産業開發に密接の關係あり、半島を縦走する幹線は滿洲國の鐵道と連絡し、日滿交通の要路となり、尙ほシベリヤを經由して歐洲に達する國際交通の捷路を爲すものにて、其軌幅は概ね一米四三五耗の廣軌を使用して居る。

國有鐵道は、京釜線、京義線、湖南線、慶全線、京元線、咸鏡線、滿浦線、惠山線、白茂線、平元西部線、東海線、圖們線の諸線あり、咸鏡線清津會寧間、會寧炭礦線及圖們線は日滿聯絡の關係上滿鐵に委託經營せしめて居る。

右委託線の延長は三百二十八耗五分にして、之を除きたる朝鮮總督府直營線の現在延長は三千二百二十九耗五分である。

### 國有鐵道開業線 (昭和十年十二月末現在)

線	路	區	間	程	主要旅客 列車數
京釜線	京	釜	本線	釜	四五〇
	京	仁	線	永	三一〇
				登	一三
				浦	同
				仁	
				川	
				(海岸)	
				城	
				五	
				分	
				復	

交通線	京		慶全線			湖南線		京義線									
		咸鏡本線	元線	光州線	慶全北部線	鎮海線	慶全南部線	群山線	湖南本線	龍山線	新義州荷拔所線	博川線	平壤炭礦線	平南線	兼二浦線	京義本線	
	○輸城	元山	龍山	松里	裡里	昌原	三津	裡里	大田	龍山	西江	新州	孟中	大同	平壤	黃海州	京城
	會輸	元山	潭陽	谷城	鎮海	晉州	群山	木浦(海岸)	唐里	新州	新義州荷拔所	博川	勝湖	鎮南	兼二浦	安東	
	寧城	山	陽	城	海	州	港	(海)	里	村	所	川	里	浦	浦	東	
	八四·八	五三·七	二二·三	三六·四	一〇六·一	二〇六·一	一一〇·一	二四·七	二六一·一	六六·七	一六·八	九·三	二三·三	五五·二	一三·一	四九九·三	
	二	三	一	一	一	一	三									五	
	同	同	同	同	同	同	同									同	

東海線			平元	白茂	惠山	滿浦線			咸鏡線			交通		
東海北部線	東海中部線	東海南部線	西部線	茂線	山線	龍登線	价川線	滿浦本線	鐵山線	遮湖線	北青線		會寧炭礦線	川內里線
	安慶山	大邱	釜山	西浦	白岩	吉州	球場	新安	順川	羅興	曾山	新北	會龍	清潭
杆蔚山	蔚山	蔚山	長林	延岩	鳳頭	龍登	价川	价古	利原	遮湖	北青	新鷄林	川內里	輪城
一五〇	一四〇	一〇七	七三〇	九六五	五五九	九九七	二九五	一四〇	三〇〇	四〇九	九〇四	一一七	四〇四	九〇〇
七	四	四	〇	五	九	七	五	〇	〇	九	七	七	四	〇

圖	會	寧	雄	基	二二〇・四
們	上	三	峰	三峰橋中心(狹軌)	一・四
線	南	陽	圖們橋中心	一・二	
合	計				三、二二九・五

備考 (一)〇印は委託鐵道にして合計に含まず。(二)列車數は直通主要列車のみを掲げ、他は省略す。

下關、釜山間海上二百四十料の聯絡船は鐵道省の經營に係り、現在景福丸・德壽丸・昌慶丸(各三、六一九噸)の三艘を交替運航し、晝夜二回兩地發船、最短時間(晝航便)約八時間にして、尙新羅丸(三、〇三五噸)、多喜丸(一、二二七噸)の二艘は旅客輻輳の場合及貨物運送の爲め不定期に運航す。

私設鐵道及軌道の延長は、昭和十年十二月末現在の開業線一千二百五十料一分、未開業線三百九十四料三分、専用鐵道敷設線百五十九料に達して居る。

### 私設鐵道開業線 (昭和十年十二月末現在)

交通

經營者及  
主たる事  
務所在  
地

朝鮮鐵道  
株式會社  
（京城）

線名	區	間	料程	軌間	動力	敷設免許 年月日	公稱 資本額	拂込額又 は建設費
忠北線	烏致院、忠州	九四・〇	一・四三	米	蒸氣、輕油	六、八、一六	六、八、一六	
慶北線	金泉、慶北安東	二八・一	一・四三	同	同	八、一〇、一六	八、一〇、一六	
黄海線	沙里院、水橋	六四・一	同	同	同	八、一〇、一〇	八、一〇、一〇	五四、五四 千円
	上海、龍塘浦	六六・五	同	同	同	八、五、一〇	八、五、一〇	
	海州、土城	八一・五	同	同	同	八、一〇、一〇	八、一〇、一〇	
	花山、内土	二・一	同	同	同	八、一〇、一〇	八、一〇、一〇	
	新院、下聖	五・六	同	同	同	八、一〇、一〇	八、一〇、一〇	
咸南線	咸興、上通	三〇・三	同	同	同	八、六、一三	八、六、一三	一七、五〇〇 千円
	五老、咸南新興	二四・〇	〇・七六	同	同	九、三、二〇	九、三、二〇	
咸北線	豐上、長豐	二・三	同	同	同	九、三、一〇	九、三、一〇	五四・六
	古茂山、茂山	六〇・一	〇・七六	蒸氣	同	八、六、一三	八、六、一三	
小計								

經營者及主たる事務所所在地 區 間 料程 軌間 動力 敷設免許公稱拂込額又  
 年月日 資本額 は建設費

朝鮮京南鐵道 (天安) 天安、長湖院 六・八籽分 一・四三 蒸氣、ガソリン 八、九、三〇 一〇、〇〇〇 千円 一〇、〇〇〇 千円

小計 一・〇

金剛山電氣鐵道 (鐵原) 鐵原、金剛 二六・六 一・四三 電氣 八、八、三 一三、〇〇〇 七、八〇〇

新興鐵道株式會社 (興南)

蔚南新興、泗水 三三・二 〇・七六 蒸氣、電氣 五、一、一五 昭和  
 上通、舊津 六・八 〇・七六 蒸氣、ガソリン 六、九、一五 } 八〇〇 六〇〇  
 西咸興、天機里 一四・八 〇・七六 蒸氣、ガソリン

小計 一一・八

京東鐵道株式會社 (水原) 水原、驪州 七三・四 〇・七六 蒸氣、輕油 九、三、三 三、〇〇〇 一、二九〇

南朝鮮鐵道 (光州) 麗水、寶城、光州 九三・〇 一・四三 同 昭和 三、四、五 二〇、〇〇〇 八、〇〇〇  
 寶城、光州 七〇・〇 一・四三 同 昭和 二、八、一五 二〇、〇〇〇 八、〇〇〇

小計 一六〇・〇

朝鮮瓦斯電氣 (釜山) 釜山鎮、東萊 九・五 〇・七六 電氣 明治 四三、六、二九 六、〇〇〇 電燈瓦斯を含む 建(軌道費含む) 一、六四五

交通

環春鐵路股份有限公司	圖們江中心、訓戎	1,000,762	蒸氣輕油	昭和	九、九、一八	—	建築一六
南滿洲鐵道株式會社	雄基、羅津	1,521,145	蒸氣輕油	昭和	七、八、一〇	—	四、四〇〇
							五〇、八四三
							內建

私設鐵道開業線合計 1,250,907 106,300 六、〇六一

備考 一、此の外昭和二年十一月一日より國に於て借上げ運轉營業を開始せる川内里鐵道會

社線龍潭川内里間四籽三分、群山府營鐵道群山港海望町間一籽〇分あり。

二、私設鐵道の取扱を受くる北鮮鐵道管理局線三百二十八籽五分あり。

主要軌道開業線 (昭和十年十二月末現在)

經營者及主たる事務所所在地	區	間	籽程	軌間	動力	敷設免許年月日	建設費	摘要
京城電氣株式會社 (京城)	京城府内及郊外	三、五、一〇	米	三、六、一四、三九、一四	明治	三、六、一四、三九、一四	四、三九、一四	最近の決算を計上す
朝鮮瓦斯電氣株式會社 (釜山)	釜山府内	九、八、一〇	米	七、一〇、一四、三九、一四	明治	七、一〇、一四、三九、一四	四、三九、一四	私鐵欄に計上す

平壤府内及郊外	三、九一〇、七	同	二、七、三	九三、三〇〇	最近の決算額を計上す
咸平軌道株式會社	六、一〇、七	輕油	五、五、二	九三、六三	
京城軌道株式會社	九、一〇、七	同	六、九、一六	四八八、三三五	
華陽、廣壯	三、五	同	九、一、一六		
其他	一、一〇、六	同	九、一、一七	三、五〇〇	
軌道開業線計	七、〇		五、七、九、七八三		

道路 總督府設置の初、先づ道路の根本制度を樹つると共に道路網を確定し、此の道路網は昭和九年度末現在に於ては一等道路三十八線(市街地線二十)、延長三千二百二十一料、二等道路九十六線(市街地線九)、延長九千七百六十八料餘を主要路線となし、別に三等道路四百八十二線延長一萬三千七百十料餘を以て地方的脈絡を完うすることを期してゐる。以上總督府に於て直轄施行するもの外、總督府は地方廳に對し補助を與へ一、二、三等道路の修築改築を行はしめつゝあるが、尙別に國庫より補助を與へ、窮民救済土木事業として昭和六年度より工費三千三百八十九萬圓餘又時局應急施設土木事業として昭和七年度より工費百五萬圓餘を以て一、二、三等道路の改修及修繕工事を起したが、右實施の結果最近に於ける道路改修濟延長は、夫役施工に依るものを加へ一、二等道路一萬千四百八十五料餘、三等道路一萬六百七十三料餘、金山道路及林業道路延長百

七十三軒餘に達して居る。

朝鮮に於ける自動車運輸事業は輒近急速なる發達を遂げ、其の營業者數は乗合自動車二百三十四、貨物自動車二百三十六、貸貸（貸切）七百四十一、計一千二百一十一名に達し、營業路線延長（許可料）は乗合營業路線二萬九千四百九十一軒九分、貨物營業路線二萬六千七百四十一軒八分、計五萬六千二百三十二軒にして、鐵道延長軒數の約十二倍に達する。

港灣 港灣は統監府時代釜山・仁川・鎮南浦・平壤・元山・新義州・群山・木浦・清津・城津・馬山の十一箇所の應急施設を行ひしも釜山・仁川・鎮南浦の如きは工事半に併合となりしを以て總督府は更に規模を擴大し水陸連絡設備を大成するの計畫を樹て之を施行し、次で元山港・清津港及城津港の修築に着手し群山・木浦・多獅島及雄基港・仁川・鎮南浦の諸港の擴張を行ひ、城津港に貯木場、清津港に漁港の設備、雄基港の擴張工事を起工し、群山・元山・城津・木浦・多獅島及雄基の修築は既に施行を了し、目下清津・仁川・鎮南浦・城津港（貯木場設備）及雄基港の工事施行中なり、地方港灣の修築施設は主として地方公共團體に於て之を施行し、總督府は其緩急を計り相當國庫補助金を支給して之が完成に努めつゝあるが、尙普通補助工事の外昭和六年度より窮民救濟土木事業、又昭和七年度より時局應急施設土木事業として國庫より補助を與へ漁港の修築を行つて居る。羅津港は滿鐵の經營を以て、昭和十年十一月一日より開港したが之が完成の暁は日

滿交通上一大革命を來すものと期待されて居る。

鐵道線路料程及運轉成績

	昭和九年度		明治四十三年度	
	停車場數	營業料程(杆)	營業料程(杆)	停車場數
營業料程(杆)	四元	三、〇七四	一、〇八五・七	一〇五
開業線(杆)		三、〇七四	一、〇八六・一	
列車走行料程(杆)		一九、二四三、六四	三、三八三、〇三七	

	昭和九年度		明治四十三年度	
	總數	客車	客車	貨車
總數	一九七、〇九一、七〇九	六七、五三四、九三八	九、〇六六、二五三	一二九、四五六、七六一
客車	一九七、〇九一、七〇九	六七、五三四、九三八	九、〇六六、二五三	一二九、四五六、七六一
貨車				

鐵道收入及支出 (單位圓)

	收 入		支 出		差引金	
	總額	旅客貨物收入	總額	其他		
大正十四年度	四、三三〇、一六五、三四	五〇、五〇〇、一五八、五三	四、〇九一、九一五、一四二、七九三	九、九七三、九六七、〇〇〇	八、三三三、六六九	
昭和九年度	八、三三三、三三三、七六、八三三、〇三三、九三三、七三三、六五八、九五、六四三、四九、九八、五三、四三九、七六二、六九、六九	八、三三三、三三三、七六、八三三、〇三三、九三三、七三三、六五八、九五、六四三、四九、九八、五三、四三九、七六二、六九、六九	八、三三三、三三三、七六、八三三、〇三三、九三三、七三三、六五八、九五、六四三、四九、九八、五三、四三九、七六二、六九、六九	八、三三三、三三三、七六、八三三、〇三三、九三三、七三三、六五八、九五、六四三、四九、九八、五三、四三九、七六二、六九、六九	八、三三三、三三三、七六、八三三、〇三三、九三三、七三三、六五八、九五、六四三、四九、九八、五三、四三九、七六二、六九、六九	八、三三三、三三三、七六、八三三、〇三三、九三三、七三三、六五八、九五、六四三、四九、九八、五三、四三九、七六二、六九、六九

交通

鐵道比較 (昭和九年度)

國有鐵道

營業

百平方糎に付營業線(糎)

朝鮮

臺灣

樺太

内地

三、〇七七  
一、三三九  
二、七八  
〇、九五  
四、三三  
一六、五三五

運輸數量

旅客(人) 二五六、四八二五

一八、三四四、六五三

一、五一八、九五二

九三、五六四、五六六

貨物(噸) 七六八、七七六

五、七九六、一九八

七六五、五六三

七七、四七七、八三七

手小荷物(個) 五〇三、〇七六四〇

一四、九九六、九八七

七二〇、〇〇〇

六三、三六二、九〇三(個)

總數 五〇、二四八、五二四

二、二、六六、六三三

二、四五九、九七八

四九二、七七七、四四三

旅客 一二、四〇〇、二九五

七、五二六、七五〇

八六五、四六七

二五五、〇二六、八〇八

貨物 二五、七九〇、五二三

一三、五七三、九一七

一、五二二、三三六

二二八、六八一、一〇一

手小荷物 一九五七七、〇六

五、五五九、五五六

八二、一八五

一九、〇六九、五三四

營業費(千円)

六二、三三〇

一一、〇八八

二、四九五

三三四、二二六

損益(千円)

二二、六三二

九、五三九

七七

二〇四、五四一

地方鐵道比較 (昭和九年度)

營業線(行)	朝鮮		内地		臺灣		樺太		滿鐵	
	百平方料に付營業線(行)	〇・乘	一・八五	七、〇八八	五二〇	一・四〇	〇・六六	二九九、八九七	一三、七八六、四〇三	一、二九
運輸數量	旅客(人)	四、八六三、六六八	四六三、三六三、六〇〇	二四、八九九、五五〇	三、一八九、二八五	七七八、六三三	四〇〇、九一四	二二、六七一、三四三	二六、五五五、三七六	三〇、三三三、八七六
	貨物(噸)	一、四六〇、六六八	八〇、〇六一、五〇三	五九、〇六七、五九一	二、三二一、八三一	四五一、五九四	四三三、三三〇	二〇、三三三、八七六	一〇一、四八九、二七六	
運輸收入	總數	五、六二二、六四四	八〇、〇六一、五〇三	五九、〇六七、五九一	四五一、五九四	四三三、三三〇	二〇、三三三、八七六	一〇一、四八九、二七六		
	旅客	二、五九二、六四四	五九、〇六七、五九一	四五一、五九四	四三三、三三〇	二〇、三三三、八七六	一〇一、四八九、二七六			
	貨物	二、九四一、八二六	一九、三〇九、六一	一、六四三、三七七	九三四、七四三	一〇一、四八九、二七六				
	雜	九〇、八五五	一、六八四、三五一	二六、八六〇	七〇、二七四	四、七〇三、三三四				
政府補助金(円)		五、〇〇〇、〇〇〇	七、〇五三、六八八	七三、〇九一	一、一七二、三六六					

備考 内地は營業線、百平方料に付ての營業線、政府補助金のみ昭和九年度とし、他は昭和八年度なり。

南洋群島には鐵道無く軌道も一般交通用として敷設されたものは無いが、僅に官有としてアンガウル島に於ける燐鍍運搬用のものと、私設としてはサイバン島、テニア

ン島に於て南洋興發株式會社の事業用のものがある。

道路延長 (單位籽)

昭和九年度末

大正十四年度末

總數	道路網延長	既成延長	道路網延長	既成延長
	二六、七〇一・四六二九 <sup>籽</sup>	二二、一五八・九九六七 <sup>籽</sup>	二三、九八四・六八八 <sup>籽</sup>	一七、一一・七八〇四 <sup>籽</sup>

一 等 道 路	三、三二・八八一八	二、九八九・六六三二	三、二〇・八七二四	二、七四一・九九九八
---------	-----------	------------	-----------	------------

二 等 道 路	九、七六八・九三八八	八、四九五・四九七一	九、四一三・九九九二	六、五二七・七四四九
---------	------------	------------	------------	------------

三 等 道 路	一三、七一〇・六四三三	一〇、六七三・八三六三	一一、三五九・四二七一	七、八五二・〇三五七
---------	-------------	-------------	-------------	------------

面積一方里に付	—	一・五四八	—	一・二九六
---------	---	-------	---	-------

既成延長	—	—	—	—
------	---	---	---	---

船 水 運

昭和九年度末

明治四十三年度末

隻數	總噸數	隻數	總噸數
----	-----	----	-----

總數	一〇、四九七	一八三、〇二二	四〇四	一一、九五二
----	--------	---------	-----	--------

備考	不登簿			登簿船		
	帆船	汽船	總數	帆船	汽船	總數
帆船中には石數船を含み、石數船は十石を一噸として計上す。	八、九三一	四三〇	九、三六一	八六四	二七一	一、一三五
	九三、六三三	四、六二二	九八、三五五	二九、一七一	五五、六〇六	八四、七七七
	三〇〇	一六	三二六	四八	四〇	八八
	二、四一九	一五一	二、五七〇	一、五六七	七、八一五	九、三八二

關釜連絡船

昭和九年度

明治四十三年度

交通	昭和九年度			明治四十三年度		
	航海度數	乗客人員	貨物噸數	航海度數	乗客人員	貨物噸數
總數	二、二六四	七六、八九七	二〇八、一八二	一、〇八四	一三七、四九六	七九、九一五
朝鮮行	一、〇八三	三六、一二四	一五八、〇八三	五四二	七三、八五五	四六、七五五
内地行	一、〇八一	四〇、七七五	五〇、〇九九	五四二	六三、六四一	三三、一六〇
指數(明治四十三年度を百とする)	二〇〇	五六〇	二六〇	一〇〇	一〇〇	一〇〇

船舶比較 (昭和九年末)

航路	汽船		帆船		石數船	
	隻數	噸數	隻數	噸數	隻數	噸數
朝鮮	七〇一	六〇,二二八	二二,一〇二	一,六九一	—	—
内地	七,七二二	三,八六二,五八一	一,三三三,八三三	—	—	—
臺灣	二六六	一一,二三八	一一,八三七	—	—	—
關東州	一三八	二六,一六七四	一〇,〇〇九	—	—	—
南洋群島	二〇八	三,〇二七	一,四七三	—	—	—
航路補助額(円)	一八	一,三三七,一〇〇	二〇	—	—	—
航海度數(回)	一,四六五	七三八以上	一,〇六四	—	—	—

命令航路比較 (朝鮮・關東州は昭和九年度、他は十年度)

朝鮮

臺灣

樺太

關東州

南洋群島

(昭和九年度豫算)

(昭和九年度豫算)

航路	隻數	噸數	隻數	噸數	隻數	噸數
航路補助額(円)	一八	一,三三七,一〇〇	二〇	—	—	—
航海度數(回)	一,四六五	七三八以上	一,〇六四	—	—	—

備考	使用船舶	隻數	七八			
	噸數	五、四二六	一三〇、七〇〇以上	三三	三三一	九
南洋廳命令航路は群島の交通大系を成すと同時に唯一の郵便線を成してゐる。						一八
						三四、〇六九

## 二二 遞 信

通信機關 通信機關の配置は都鄙を通じて九百を超え、主なる地點には電信及電話を開始して舊來の面目を一新し、昭和十年三月末に於ては郵便局八十七、同分室及出張所十一、電信局七、電話局一、同分局二、郵便所七百二十四、同出張所六、郵便取扱所二十一、電信電話取扱所十、電信取扱所九十三、同出張所一、郵便切手賣捌所四千九百九十九を算するに至つた。

郵便爲替貯金 郵便爲替貯金業務に關しては常に朝鮮人特殊の風俗習慣に留意し、其改良發達を圖り、又郵便爲替貯金は地方に於ける一の金融機關たるを以て、近來一般に其利益を認めらるゝに至つた。

郵便振替貯金 大正七年、府又は府の區域を包含する學校組合公金受拂の爲に要する郵便振替貯金特別取扱を、同九年國債募集、賣出及元利金支拂郵便振替貯金特別取扱を開始して以來、之を利用する者漸次多きを加へ、郵便振替貯金制度開始當時即ち明治四十三年三月末に於ては僅に二百七十九人の加入者を有するに過ぎざりしが、昭和十年三月末現在に於ては三萬六百三十九人の多き上つて居る。

簡易生命保險 朝鮮に於ける簡易生命保險事業は昭和四年十月一日より之を實施し創始以來五年

五箇月を經過したる同十年三月末現在に於ける事業の成績は、契約件數六十五萬五千五百九件、保險金額一億二千一萬二千四百十圓にして當初の計畫に比し遙に良好なる成績を示し、殊に朝鮮人の加入は全加入件數の六割七分を占め、最初より意外の好成績を示したのである。

航空。世界大戰以來朝鮮の航空界も異常なる發達を遂げるに至つたが、國防及交通上より見て朝鮮の航空上の地位は最も重要性を有して居る。

### 朝鮮民間航空事業の概況 (昭和十年三月末現在)

日本航空輸送株式會社支所	出張所	一	
同	出張所	三	
同	營業所	一	
滿洲航空株式會社出張所		一	
飛行機	數	九	
操縱士	數	二一	(内地人 朝鮮人 七)
航空士	數	一〇	(全部内地人操縱士にし て航空士免狀を併有す)
機關士	數	一一	(全部内地人、内二名は操縱士に して機關士免狀の併有者とす)

逓 信

朝鮮に於ては前記定期航空に備ふる蔚山飛行場には航空用無線電信局並氣象觀測支所を設置し、又京城飛行場には滑走路の構築、連絡道路の改修、航空標識の設置及夜間照明設備等を施して實際飛行場としての面目を一新した。新義州飛行場にては滿洲航空株式會社の新義州奉天線に連絡し對滿洲國との空の連繫に遺憾なきを期し、更に航空路の安全の爲には蔚山・黃淵・大田・天安・京城・沙里院・平壤・定州及新義州の九箇所に航空標識をも設置せるが、尙將來に於ては既設航空路の一段の整備と共に、各主要都市に對する支線の設定も考慮されて居る。

電氣及瓦斯事業 昭和十年三月末現在に於ける電氣事業者數は營業用五十五(内開業五十四)、官廳用十七、家用九十五、合計百七十にして、又瓦斯事業者二ある。

近時北鮮地方には大規模の水力電氣會社が興り、西鮮及南鮮の電氣事業は合同せられ、電氣供給力に一段の力を加へて來た。

### 通信機關

#### 郵便電信電話局所

郵便局	電信局	電話局	郵便所	電信取	電話取
同分室及出張所	同分局出張所	同分局出張所	取投所出張所	取投所出張所	取投所出張所

郵便  
切手  
郵便筒

郵便  
私書函

公衆  
電話

明治四十三年度末

總數	一五	一	一三	×	二	五	一	八五	六五	三六	三	三
----	----	---	----	---	---	---	---	----	----	----	---	---

昭和九年度末 表三 六 七 三 七〇〇 三 九四 一〇四、九九 六五九、三、四、五 二、四三 八〇  
 ×印は郵便受渡所

通常郵便物

昭和九年度	引		受		通		數	
	總數	書狀	無封書狀	葉書	其他	無料	配達	通數
明治四十三年度	昭七、〇八三、七五〇	一五、四一九、九三三	三、〇〇一、〇〇一	一六、一三五、六四三	六、七五四、七三五	八、四七〇、一七〇	五、一八一、四七一	
昭和九年度	三、九四、三三、四四	六、九五、六六五	三、九九五、六四一	一〇七、六三三、三三四	五、八五、三三一	一一、八八九、六六〇	三三、八〇〇、六三三	

小包郵便物

總數	昭和九年度		明治四十三年度	
	引	受	引	受
個數	二、四一五、三三四	三、五七七、九一五	六六一、六三三	九一八、〇九七
書留個數	二、四二〇、四一七	三、五七三、五四二	六五九、五一一	九二五、九二四

遞信

價格表記

個數	四八〇七	四、三七三	二、二一四	二、一七三
金額(円)	九五六、八五七	六八九、五二〇	三九九、二五	四〇五、九九七

郵便爲替

振 出

拂 渡

明治四  
十三年

昭和  
九年度

總數	口數	金額	口數	金額
內國爲替	一、〇八二、九四三	二八、二八九、一九九	六〇二、五〇四	二二、五二八、九五九
外國爲替	一、〇八〇、九一六	二八、三三三、八八六	六〇〇、九五四	二二、四五一、四八九
總數	二、一〇二、八五九	五五、五三三、〇八五	一二〇、九五〇	七七、四七〇
內國爲替	三、八一五、九五九	一一三、五一九、八九四	三、四四七、五七一	一一一、九五三、六六四
外國爲替	三、八〇八、二六〇	一一三、〇六三、四九二	三、四〇四、二七二	一一〇、九〇九、八三〇
總數	七、七九二	四六六、四〇二	四三、二九九	二〇、四三、八三四

郵便貯金現在高 (昭和九年度末)

人 員 金

額 一人 平均

明治四十三年度總數 二三八、九八六 三、二〇六、四六五 額 一人平均 一三〇、七〇

昭和九年度總數 三,一五六〇九四

五,二六三,五五三

一六,六八八

郵便振替貯金 (口座受拂)

加入人員	退人員	拂込	拂出	年度末現在
人員	人員	口數	口數	人員
金額	金額	金額	金額	金額

明治四十三年度	昭和九年度	明治四十三年度	昭和九年度	明治四十三年度	昭和九年度
一五	三,三七	一五	三,三七	一五	三,三七
二	一,四七	二	一,四七	二	一,四七
五,八三	三,〇六,九〇	五,八三	三,〇六,九〇	五,八三	三,〇六,九〇
三,四六,九九	四,〇六,九〇	三,四六,九九	四,〇六,九〇	三,四六,九九	四,〇六,九〇
一〇,八五	三,〇六,九〇	一〇,八五	三,〇六,九〇	一〇,八五	三,〇六,九〇
三,二五,八九	四,〇六,九〇	三,二五,八九	四,〇六,九〇	三,二五,八九	四,〇六,九〇
四二	三,〇六,九〇	四二	三,〇六,九〇	四二	三,〇六,九〇
一六,六八	三,〇六,九〇	一六,六八	三,〇六,九〇	一六,六八	三,〇六,九〇

電信

發信	着信	中繼信	料金
----	----	-----	----

總數	和文	英文	歐文
二,〇五九,六四八	一,八五四,八〇七	一,七五三,三九三	二九,四四八
二,〇〇八,九二〇	一,七九九,六〇六	一,七四八,〇四	三四,五一〇
三,〇五八,六六七	—	—	—
六,五〇七,三	—	—	—

遞信

昭和 九年 度	總數	七、一四八、四三三	七、〇七九、〇九一	一一、六九四、〇一三	一一、七六四、二四三
	和文	六、五八二、〇三八	六、五〇一、六〇五	—	—
九年 度	諺文	五三七、〇四八	五三三、五三一	—	—
	歐文	二九、三三七	四三、九五五	—	—

電話加入者

明治四十 三年 度	總數	六、四四八	六、一一四	一、二五四	八〇
	和文	三、七六九	二九、〇九七	八、〇二六	五七一

電話市内通話 (料金の單位圓)

昭和 九年 度	通話總數	加入者間通話	加入者外通話	公衆電話通話	呼出請求
	度數	三〇、六七、四四	二〇、六六、六三三	三、八八五	一、五九七
明治四十 三年 度	料金額	四六九、九三三	四六八、〇七九	一、八五四	八〇
	度數	三三、一七〇、九七〇	三三、〇七四、四〇六	三、九九六	四四四
昭和 九年 度	料金額	四、六三九、二七〇	四、六三九、五九二	四一五	四七
	度數	—	—	—	—

# 市外電話通話

昭和九年 度	料金	通話總數		加入者間通話		加入者外通話		公衆電話通話		呼出請求	
		度數	料金	度數	料金	度數	料金	度數	料金	度數	料金
三、八五二、〇九七	一、九五八、八七四	四七三、一九一	七五、五一六	九三、四三六	二六、六六七	八、四三三	一、一六四	四八、四〇〇	五、五五〇	三、四三三、八四七	七九、四一〇
三、八五二、〇九七	一、九五八、八七四	四七三、一九一	七五、五一六	九三、四三六	二六、六六七	八、四三三	一、一六四	四八、四〇〇	五、五五〇	三、四三三、八四七	七九、四一〇

# 郵便貯金比較 (昭和九年度) (單位圓)

預入高	口數	朝鮮		內地		臺灣		樺太		關東州及 鐵道附屬地		南洋羣島	
		金額	口數	金額	口數	金額	口數	金額	口數	金額	口數	金額	口數
九、六三三、七四〇	一三三、三六六、一三三	一、六四四、五五〇	一、八四三、二七	一、五三三、四九六	四三、三、六七	一〇、五五九、三三七	一、四四、九七七	一、六四三、四三六	一、六四三、四三六	一、六四三、四三六	一、六四三、四三六	一、六四三、四三六	一、六四三、四三六
二、六〇一、三三七	四、四三三、二七	二、六〇一、三三七	四、四三三、二七	二、六〇一、三三七	四、四三三、二七	二、六〇一、三三七	四、四三三、二七	二、六〇一、三三七	四、四三三、二七	二、六〇一、三三七	四、四三三、二七	二、六〇一、三三七	四、四三三、二七

逕信

年度末		總人員	
總金額	三,三六,〇四	五,五,六,五〇	五,四,九,九三
預人員一員に付預金高	三,三三,一五三	二,四六,〇五八	三,三,七,〇〇八
預人口一に付預金高	一六,六	四,八四	三,九,三,〇〇八
預人口一に付預入員	一三,〇六	一五,四〇	一,四八,一
人口千に付預入員	一四,四	五,七,三	九,三,三
			五,三,九
			三,五,三
			二,五,五,九

備考 人口千に付ての預入員算出人口内地は昭和九年十月一日の推計人口、南洋は昭和九年四月一日現在、其他は昭和九年十二月末現在人口に依る。

郵便爲替比較 (昭和九年度) (單位円)

内國爲替

振出	口數		金額	
	口數	金額	口數	金額
朝鮮	三,八〇,一六〇	五,三,五,三三	一,〇八,五,四五	五,九,九,四六
内地	七,三三,二六三,〇三三	一,〇八,五,四五	一,六,三,六,六四	一,一,六,一,六
臺灣	三,〇,五	三,〇,六	三,六,八五	三,三,七
樺太	三,〇,五	三,〇,六	三,三,七	三,三,七
關東州及鐵道附屬地	三,四,〇,二七三	三,四,〇,二七三	三,九,八,六	三,九,八,六
南洋羣島	三,〇,五	三,〇,六	三,三,七	三,三,七

拂渡	金額	二〇、七九八・八〇	七四、三六・三三	一七、八〇、一五	九、五九、五七	一九、九三、九〇	五、八九〇、七七
	口數	三、三六	三〇、八九	七、七九	三〇、〇六	三五、五三	三三、九三
付金額							

外國爲替

朝鮮	内地	臺灣	樺太	關東州及鐵道附屬地	南洋群島
----	----	----	----	-----------	------

振出	金額	四六、四〇三	一、三〇六、一三〇	三、四、五二八	三、一八七	五四、三九四	二、一九九
	口數	五九・八〇	四七・六八	二九・三三	三六・六三	五六・六〇	六一・〇八
付金額							

拂渡	金額	一、〇四三、八三四	六、八五一、〇〇三	八三、四八五	一七、七六三	六七、八七八	二、七九九
	口數	四三、二九九	二二六、四九三	二、四四三	四三六	二八、〇〇八	九七
付金額							

備考 内地は振出欄に外國へ振出、拂渡欄に外國より振込を記入す。

郵便比較 (昭和九年度)

朝鮮	内地	臺灣	樺太	關東州及鐵道附屬地	南洋群島
八五	一〇、九二	三〇	六	三九	九

逓信

通 常 郵 便 物

引	受	三九四、三、四四四	四、六四、九六、九七	七六、三二、二〇〇	一九、六二、八三三	一五、四六、三三三	一、五四三、三九
配	達	三三、八〇、六四三	四、七三、六八、八四九	九三、〇六、二二三	三六、三八、二六三	一五、〇四、一七六	二、四〇三、三六
人口一に付引受		一三九	六六六	一五一	六三・七	一〇三・五	一七・〇
人口一に付配達		一五・三	五〇・〇	一七・九	九〇・五	一〇〇・八	三六・五

小 包 郵 便 物

引	受	二、四五、三三四	五五、〇七、三三九	六六、〇六	三三三、四四五	八四、八四	一三、三六
配	達	三、七七、九二五	六、八七、六七三	一、七三、八三三	五六、六九	一、七六、四六三	五、五三
人口一に付引受		〇・一	一・〇	〇・一	〇・七	〇・六	〇・一
人口一に付配達		〇・三	〇・九	〇・三	一・九	一・三	〇・六

備 考

内地の普通郵便物引受、配達數中外國郵便は發送、到着を計上せり。尙割合算出に當り内地の人口は昭和九年十月一日現在の推計人口、朝鮮は昭和九年十二月末現在人口に依る。

電 信 比 較 (昭和九年度)

朝鮮内地	八五	八、二六	二〇三	八	五四	一〇
臺灣						
樺太						
關東州及鐵道附屬地						
南洋群島						



昭 和 四 年 度	昭 和 九 年 度	新契約復活			消滅件數			年度末現在		
		件數	件數	件數	死亡	解約	失效其他	件數	保險料	保險金額
三五,三九	三六,三九	六	一〇,四〇〇	八,三四	六〇	五,七〇六	一,二〇二	一八,四四元	一五,七三〇	四,八九,四〇〇
三六,三九	七,三九	一〇,四〇〇	八,三四	六九,四八	一,二〇二	六五,五〇元	六八,一五〇	一三〇,〇二二	一三〇,〇二二	一三〇,〇二二

簡易生命保險比較 (昭和九年度) (單位円)

年 度 末 現 在	新契約			關東州及 鐵道附屬地			南洋群島		
	保險金額 一件に付	件數	保險料	件數	保險料	保險金額	件數	保險料	保險金額
一八,三・一	一六,〇〇	六,五五,五〇元	二,四三,六九三	一八,六六六	三三,九三六	一,三九八	一,三九八	一,三九八	一,三九八
一〇,〇〇,三三,三三〇	二,八三,五五九	一七,三三,七五七	四三,七六,五七二	一三,六五,五三三	三,六四,五八五	四,五七,三一九	一八,六六六	一八,六六六	一八,六六六
一〇,〇〇,三三,三三〇	二,八三,五五九	一七,三三,七五七	四三,七六,五七二	一三,六五,五三三	三,六四,五八五	四,五七,三一九	一八,六六六	一八,六六六	一八,六六六
一八,三・一	一六,〇〇	六,五五,五〇元	二,四三,六九三	一八,六六六	三三,九三六	一,三九八	一,三九八	一,三九八	一,三九八
一〇,〇〇,三三,三三〇	二,八三,五五九	一七,三三,七五七	四三,七六,五七二	一三,六五,五三三	三,六四,五八五	四,五七,三一九	一八,六六六	一八,六六六	一八,六六六
一〇,〇〇,三三,三三〇	二,八三,五五九	一七,三三,七五七	四三,七六,五七二	一三,六五,五三三	三,六四,五八五	四,五七,三一九	一八,六六六	一八,六六六	一八,六六六
一〇,〇〇,三三,三三〇	二,八三,五五九	一七,三三,七五七	四三,七六,五七二	一三,六五,五三三	三,六四,五八五	四,五七,三一九	一八,六六六	一八,六六六	一八,六六六
一〇,〇〇,三三,三三〇	二,八三,五五九	一七,三三,七五七	四三,七六,五七二	一三,六五,五三三	三,六四,五八五	四,五七,三一九	一八,六六六	一八,六六六	一八,六六六

人口千に  
付件數

三・二

三三・六一

五五・八三

二六六・四

五七・四三

二九・四九

透 信

二〇五

## 二三 社會事業

**罹災救助** 水害・風害・火災・旱害・雹害・冷害其の他非常災害の罹災者にして救済の必要ありと認むるものに對しては韓國併合の際、朝鮮各道の府郡島に下賜せられたる府郡島臨時恩賜金一千七百三十九萬餘圓の利子の十分の一は道費凶歉救済費及道費救恤費を以て、一面明治四十五年明治天皇及大正二年 昭憲皇太后崩御に際し慈惠救済の資として下賜されたる金額三十一萬五千圓及國庫の補助に係る金額十萬圓、合計四十一萬五千圓より成る恩賜罹災救助基金の利子を以て之に充て、種穀・種苗又は材料の給與、農具の貸付及給與、被服の給與、醫藥費の給與、應急救護を行ひ、基金設定以來昭和九年度迄に支出したる金額は六十萬八千六百八十七圓に及び、非常の天災に際しては其度毎に被害の程度に應じ御内帑金の御下賜ありて救恤の資に供せられ、併合以來昭和九年度迄既に三十四回に亘り、合計二十九萬五千七百圓に達した。

**賑恤救護** 老幼・不具・癡疾等生業を營むこと能はざる者の救護賑恤に關しては恩賜賑恤資金を設定し、大正四年御大禮に際し下賜せられたる御内帑金二十萬圓、昭和二年二月御大喪に際し下賜せられたる三十四萬六千二百圓及昭和三年十一月御大禮に際し下賜せられたる三十四萬六千二百圓を基本とし、之より生ずる利子を以て窮民救助を爲しつゝあり、現在被救助者一千五百二十

九名にして、何れも鴻恩に感泣して居る。行旅病人及同死亡人の取扱は、併合の際下賜せられたる臨時恩賜金三千万圓分配残額及其預金中の利子合計二十六萬三千六百五十圓餘を以て、大正六年四月行旅病人救護資金を設定し、人口稠密、往來頻繁なる都會地にして行旅病人又は同死亡人多き京城外二十六箇所に宗教團體・宗教家又は篤志家を選定し、慈善事業として救護所を設けしめ、前記資金より生ずる利子を此等事業經營の設備及維持費の一部に補助して其の發達を期しつゝある。既に補助したる總金額は昭和九年度迄に設備費三萬五千八百五十圓・維持費十八萬二千八百十七圓に達し其事業成績は何れも相當良好にして、所在宗教家又は篤志家に依る自治的救護の基礎漸く確立せんとする傾向に在り、現在基金總額は三十二萬二千九百八十七圓餘に達してゐる。

**福利施設** 公益住宅は京城・木浦・大邱・釜山・新義州・清津の六府及公州・海州の二邑に亘り經營戸數約五百戸あり、公益市場は京城・仁川・木浦・大邱・釜山・馬山・平壤・元山・清津・咸興・鎮南浦及び興南・羅南の二邑にして、市場數二十三箇所、店舗數二千餘、一箇年の賣上高五百三十七萬餘圓に達し、共同宿泊所は京城府・仁川府・平壤府及釜山府に於て之を經營し、尙京城府に在りては和光教團に於ても之が經營を爲し、簡易食堂は釜山府に於て之を經營し、公益浴場・公益洗濯場・公益理髮場は各地に於て經營せられつゝあり。公益質屋は京城・釜山・木

浦・大邱・平壤・清津・咸興・元山・新義州・仁川・群山・鎮南浦の十二府及興南邑に設置し、國費より補助金を交付し助成指導を爲しつゝある。小額生業資金は朝鮮農家總戸數の大部分を占むる小農が、生産資金の融通を受くること困難なるため、已むなく貸金業者、地主等より、高利の小口資金を借入れ一時の急を凌ぎつゝある實情に鑑み、昭和三年度より邑面をして小額生業資金の貸付事業を實行せしめ、小農者に對し低利且容易に小口の資金を融通し、以て生業を奨め、之に保護と指導とを加ふる爲、部落單位に依り一部落三十戸内外の小農を以て勤農共濟組合を組織し、組合員の指導者として一組合に一名の勤農輔導委員を置き、勤勞主義の下に小農者の生活安定を圖りつゝありて、昭和九年度迄に實施したる資金總額は三百四十餘萬圓に及び、勤農共濟組合數は五千四百餘、其組合員數は十五萬五千餘人を算して居る。

職業輔導、輓近西北鮮地方に於ては鐵道・河川・道路・港灣等大規模なる土木工事の増加に依り勞働者の需要は激増の趨勢に在る。然るに同地方は人口稀薄にして勞働者の不足を告げ、支那人勞働者の使役を餘儀なくせられつゝあり。一方南鮮地方は人口稠密にして窮民多く内地渡航者は逐年多きに上り、勞働者の需給調節上面自からざる現象を呈せるを以て、總督府は之が對策の一端として昭和二年二月以降就職の爲旅行する勞働者の運賃割引を實施し、之に依り其移動を容易ならしめ、又常時釜山に職員を駐在せしめ、漫然内地渡航勞働者を朝鮮内に於ける勞働需要先に

紹介就職せしむるの外、昭和九年三月以來大量的に南鮮過剩農民を西北鮮地方の勞働需要先へ移動の斡旋を爲し之が需給調節に資しつゝある。また朝鮮内職業紹介機關の充實を圖る爲、昭和三年度より公益職業紹介所に對し建設費五割以内經常費二割以内の國庫補助を爲し、事業を助成指導しつゝあるが、現在朝鮮に於ける公益職業紹介所は、府營のもの九箇所（京城・仁川・群山・釜山・平壤（二箇））・新義州・大邱・咸興）邑營のもの一箇所（三箇）、私設のもの三箇所ある。

兒童保護 總督府濟生院は孤兒の養育及盲啞者の教育を掌るものにして、前者は養育部及附屬農場に於てし、後者は盲啞部に於てする。感化院は不良性を帶ぶる年少者を收容して感化教育を施す機關にして、總督府に於て咸鏡南道文川郡明孝面松田灣元海軍防備隊跡に開設し、之を永興學校と稱して居る。

救療機關 總督府の施設に係る癩療養所を全羅南道小鹿島に置き、從來の道慈惠醫院は大正十四年四月道地方費に移管し道立醫院として診療に従事せしむ。道立醫院は各道廳所在地（京畿道・慶尙道・浦達を除く）及仁川・水原・開城・公州・群山・南原・順天・濟州・安東・金泉・晋州・馬山・沙里院・鎮南浦・義州・楚山・江界・江陵・鐵原・元山・惠山鎮・城津・會寧・龍井・局子街の各地に設置し、尙水原醫院出張所を利用に設け、醫院同様診療に従事す。又國境對岸地方に於ては東間島に在る朝鮮人の救療を目的とせる在間島龍井醫院・局子街醫院の外、頭道溝及百草溝等には信用あ

る開業醫に救療を囑託し、僻陋地在住朝鮮人及鴨綠江對岸地方に於ける朝鮮人に對しては道立醫院に於て巡回診療を施行し、珥春地方に於ても亦同地の信用ある開業醫に救療を委託し、以て朝鮮人救療の途を講じて居る。

尙京城帝國大學醫學部附屬醫院・大邱・平壤及咸興道立醫院に於ては、内地人助産婦・看護婦を養成し、卒業者の大多數は官公立醫院等に就職し、いづれも相當の信頼を受けつゝある。

社會教化 地方改良としては、優良部落助成、勤儉貯蓄の奨励、篤志者の表彰を行ひ、郷校財産は専ら文廟の維持と社會教化事業の施設に使用し、社會教化としては、青少年の指導、巡回講演、郷約の復興助成、婦人の教養施設奨励、パンフレットの刊行、體育運動の奨励、活動寫眞の利用等を行ひ社會教化に資しつゝある。

免囚保護事業 朝鮮の免囚保護事業は始政當時に在りては僅に一保護團體の設立ありしに止まりしも、今や官民有志の協力に依り昭和十年末に於ては其の數二十六を算し、此等の大部分は財團法人組織に進み、昭和三年七月内地に於ける斯業統括機關輔成會に加盟し、内鮮間の聯絡と事業の發展を期圖する所あり、更に昭和九年二月各覆審法院管内毎に司法保護事業研究會を組織し、保護事業の統一、保護思想の普及並に事業の改善發達上必要なる事項を調査研究して之を實行に移し、一般施設と相俟て刑事政策の目的を達する上に顯著なる貢獻をなしつゝある。

社會事業施設一覽 (昭和九年末)

總數	社會事業 及助成機關	一般救護事業	療養兒童保 護事業	經濟的保 護事業	失業保 護事業	社會救 濟事業	釋放者 保護事業
三三	四	三三	四	三	六	一	一
昭和三十九年末	二七	四	四	三	六	一	一
大正十三年末	二七	四	四	三	六	一	一

窮民救助 (昭和九年度)

社會事業	內地人		總數		新救助廢停死亡	年度末現在	救助費
	女	男	女	男			
總數	一七四九	二二三	二〇〇	一、五九	四、四六七	二二一	
女	四	二	一	七六一	一	一	
男	三	二	一	七六八	一	一	
總數	七	四	八三	一、五八	一	一	
女	八六二	一一	八三	七六一	一	一	
男	八九四	一六	一一七	七六一	一	一	
總數	一七五六	二七	二〇〇	一、五九	四、四六七	二二一	

社會事業

朝鮮人

男  
女

八九一  
八五八

一四  
九

一二七  
八三

七六〇  
七六六

一一二

罹災者救恤 (昭和九年)

總數	救 助		救 恤 金 額									
	回數	戶數	實人員	延人員	總額	國費	道費	臨時恩賜金	恩賜金	救助基金	陛下賜金	義捐金
總	四,一六二	七,五二六	四,四三三	一〇,六三二	一,五四一	二,三七六	〇,〇六六	三,三三三	六,八八〇	四,四三三	八,八八〇	四,四三三
風	一〇	九	九	九	九	九	九	九	九	九	九	九
水	一〇	九	九	九	九	九	九	九	九	九	九	九
旱	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一
害	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一
電	二	二	二	二	二	二	二	二	二	二	二	二
害	二	二	二	二	二	二	二	二	二	二	二	二
火	二	二	二	二	二	二	二	二	二	二	二	二
災	二	二	二	二	二	二	二	二	二	二	二	二
其	八	七	八	七	八	七	八	七	八	七	八	七
他	八	七	八	七	八	七	八	七	八	七	八	七

救恤御下賜金

總額	昭和九年	明治四十四年以後累計	昭和九年	明治四十四年以後累計
京畿道	四七、〇〇〇 <sup>四</sup>	二九五、七〇〇 <sup>四</sup>	慶尙南道	二三、五八八 <sup>四</sup>
忠清北道	—	三三、二〇六	黃海道	一、七三八
忠清南道	二二九	四、八三九	平安南道	—
全羅北道	三、二八八	一〇、八七五	平安北道	二六二
全羅南道	二、三三〇	一七、八九五	江原道	—
慶尙北道	四、八八一	二二、二五四	咸鏡南道	—
	一〇、六九四	二四、一八七	咸鏡北道	—
				六、四五七

行旅病人及行旅死亡人救護 (昭和九年)

新救護	全治	救護を離れたる者	死亡	現在	救護數	行旅死亡人
總數	二、〇二二	五九六	五四三	七三一	八五七	二八、二六五八
男	一、五四五	四八五	四一七	五五〇	五一〇	一六六、三三六
女	四七六	一一一	一一六	一八二	三四七	二六四、三三
					二二三	七五八

社會事業

公益職業紹介事業 (昭和九年)

一般紹介

總數	求人數		求職者數		就職者數	
	男	女	男	女	男	女
總數	三, 五五	一四, 〇〇	四七, 七五	二七, 四四	一九, 四一	八, 三〇
內地人	六, 三九	三, 二〇	七, 九三	五, 六七	二, 七〇	一, 三三
朝鮮人	二七, 三六	一〇, 八〇	三九, 八二	二一, 七七	一六, 七一	六, 九七
日傭勞働紹介						
總數	三, 五五	一四, 〇〇	四七, 七五	二七, 四四	一九, 四一	八, 三〇
內地人	六, 三九	三, 二〇	七, 九三	五, 六七	二, 七〇	一, 三三
朝鮮人	二七, 三六	一〇, 八〇	三九, 八二	二一, 七七	一六, 七一	六, 九七

昭和九年	求人數		求職者數		就職者數	
	男	女	男	女	男	女
總數	一七, 六六	一五, 七三	一八〇, 四三	一七, 九七	二, 四六	一七, 五一
內地人	七, 六五	七, 六五	七, 九六	七, 六六	七, 六〇	七, 六三
朝鮮人	一〇, 〇一	一〇, 〇八	一七, 四七	一〇, 三一	一六, 九一	一七, 四三
公益質屋事業						
總數	一七, 六六	一五, 七三	一八〇, 四三	一七, 九七	二, 四六	一七, 五一
內地人	七, 六五	七, 六五	七, 九六	七, 六六	七, 六〇	七, 六三
朝鮮人	一〇, 〇一	一〇, 〇八	一七, 四七	一〇, 三一	一六, 九一	一七, 四三

昭和四年度	昭和九年度	貸付		受戻		流質	
		貸付金額	口數	受戻金額	口數	流質金額	口數
80,000	33,500	4,453	1,020	3,705	3	4,333	1
16,267	15,690	1,267	303	3,122	4	3,397	1
1,020	2,073	1,020	303	3,122	4	1,925	1

小農生業資金貸付事業

昭和四年度	昭和九年度	貸付事業實施		組合員		貸付		組合員の貯金	
		金總額	邑面數	組合數	員數	人員金額	人員金額	人員金額	人員金額
1,770,453	3,480,828	1,212	3,106	9,653	80,021	1,523,125	4,000	100,770	
1,770,453	3,480,828	1,212	3,106	9,653	80,021	1,523,125	4,000	100,770	

社會事業施設比較 (昭和七年度末現在)

一、社會事業に關する機關		朝鮮	内地	臺灣	樺太
聯絡	統一	—	—	—	—
社會事業	—	—	—	—	—
		五五	—	—	—
		—	—	—	—
		—	—	—	—
		—	—	—	—

社會事業

調查研究

養成助成機關

方面委員

方面委員後援

二、兒童保護

產婆

產院

託兒所

育兒

救護教育

其他

三、經濟保護

住宅經營

共同宿泊所

公益市場

三

三五

二三

七〇

一〇〇〇

三九一

四五

五八九

二二七

五九

二七〇

四五

一〇五

二二六

一

三

四五

二六

二〇

一

四

一

二六

二

二

三

一

三三八四

一五二

二九一

簡易食堂

公益浴場

公益質屋

四、失業救濟及防止

授產

職業紹介

職業輔導

五、救護

院外救護

院內救護

其他

六、醫療保護

施療病院

診療所

精神病院

社會事業

七〇

一六七

三四

七二

四六二

五

一九五

一二三

二七四

一四二

三七三

四四

一

四九

一七

四七

一

二七三

三

三

三

三

二

一

一

一

一

一

六

六

二

二

二

二

社會事業

結核療養所

癩療養所

七、隣保事業

八、人事相談

九、婦人保護

十、司法保護

釋放人

少年

十一、其

他

行旅病人及行旅死亡人救護比較

行旅病人

救護者

全護者  
離

新救護  
治

朝鮮

內地

臺灣

樺太

1,011

6,716

2,555

1,100

5,966

4,432

1,700

79

5,433

228

26

23

152

146

23

26

89

91

236

74

236

77

1

26

89

54

2

1

23

1

1

1

146

33

1

1

152

2

1

1

23

2

1

26

26

26

1

行旅	死	亡	七三二	二二六四	七一	五七
救護延日數	年度末現在	八五七	二八六三	六一	四	五
死亡人數	二八二、六五八	四、六八一	四、四〇四	一六七	三八	三六

朝鮮は昭和九年度、他は昭和七年度。

朝鮮の事に就ての御質問は左記の局課へ御照會になれば出来るだけ御回答いたします。

記

一般的な朝鮮事情

文書課

對外移民其の他涉外事項

外事課

地方行政及土木等に關する事項

内務局

財政及稅務等に關する事項

財務局

商工・鑛山・水産等に關する事項

殖産局

農務・林務・土地改良・水利・開墾等に關する事項

農林局

法務及行刑等に關する事項

法務局

學務及社會事業等に關する事項

學務局

警察關係の事項

警務局

通信・海事・保險・電氣に關する事項

遞信局

交通に關する事項

鐵道局

專賣に關する事項

專賣局

尙内地に在つては左記に於て朝鮮、滿洲に關する旅行・通關・貨物の御質問並に事情講演・活動寫

眞の御需めに應じます。

東京 鮮満案内所

大阪 鮮満案内所

下關 鮮満案内所

丸ノ内ビルディング内

東區堺筋安土町

下關驛前

電丸ノ内

電本町

電

(23)

一七八八  
一七七八  
一七〇三

一七〇〇  
一七〇〇  
一七〇〇

一九六二

朝鮮現勢便覽終

昭和十一年七月二十五日印刷  
昭和十一年七月三十一日發行

朝鮮總督府

京城府長谷川町七十六番地

印刷所 近澤印刷部